

靈界物語 第七二卷 山河草木 亥の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十二卷』天聲社

1971(昭和46)年05月15日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 水波洋妖 すゐはやうえう

第一章 老の高砂 おい たかさご  
〔一八一〇〕

第二章 時化の湖 しけ うみ  
〔一八一〇〕

第三章 嚴の欸乃いづ ふうた（一八一二）

第四章 銀杏姫いてふひめ（一八一三）

第五章 蛸船たこぶね（一八一四）

第六章 夜鷹姫よたかひめ（一八一五）

第七章 鯉の網引かつを あみひき（一八一六）

第二篇 空迂拙婦もくうせつぷ

第八章 街宣がいせん（一八一七）

第九章 缺戀坊かくれんぼう（一八一八）

第一〇章 清の歌すが うた（一八一九）

第十一章 問答所もんたふどころ（一八二〇）

第十二章 懺悔の生活ざんげ せいくわつ（一八二二）

第十三章 捨臺演すてたいえん（一八二二）

第一四章	新宅入 <small>しんたくいり</small> 〔一八二三〕
第一五章	災會 <small>さいくわい</small> 〔一八二四〕
第一六章	東西奔走 <small>とうざいほんそう</small> 〔一八二五〕

第三篇 轉化退閉てんくわたいへい

第一七章	六櫛問答 <small>むつかしもんだふ</small> 〔一八二六〕
第一八章	法城渡 <small>はふじやつわたし</small> 〔一八二七〕
第一九章	舊場歸 <small>きうばがへり</small> 〔一八二八〕
第二〇章	九官鳥 <small>きうくわんてう</small> 〔一八二九〕
第二一章	大會合 <small>だいくわいがふ</small> 〔一八三〇〕
第二二章	妖魅歸 <small>よみがへり</small> 〔一八三一〕

靈界物語 特別篇 筑紫瀉つくしがた

## 序文

本年二月の節分祭の前日第七十一巻一冊を口述せしより、今日まで靈界物語の口述を中止してをりました。何分天恩郷の經營や裁判事件の精神鑑定などにて身を勞し、その上一月以來天恩郷において樂焼を始めたり、花壇を造つたり、愛善會、宗教聯合會等の事業のため豫定の物語を著はす事が出来なかつたのです。今回幸ひに舞鶴分所長、新舞鶴支部長、役員信者の御盡力により、天橋に清遊する事となつたのを幸ひ、閑暇を利用して六月二十九日より今日まで三日間を費やし、原稿用紙一千二百六十餘枚を加藤明子、北村隆光二氏の丹精にて書上げることを得ました。

惟神かみの力に助けられ神書著はしぬ天のはし立

大正十五年七月一日 小天橋 於掬翠莊

本卷は千草の高姫、妖幻坊の空助、天然坊のキューバー、玄眞坊、ヨリコ姫、花香姫、ダリヤ姫、須賀の長者アリス、イルクをはじめ、神谷村の玉清別、コオロ、コブライ、フクエ、岸子、久助をはじめ、三五教の宣傳使照國別、照公別、梅公別の大々の活動舞臺を描寫し、須賀の宮に關する經緯等全紙面に活躍してをります。ことに高姫、ヨリコ姫の問答の場面や、梅公別、ヨリコ姫の最後における高姫との掛合ひは抱腹絶倒せむばかりの面白味があります。

大正十五年七月一日 天之橋立なかや旅館 於掬翠莊

第一篇 水波洋妖

第一章 老の高砂（一八一〇）

神の力のこもりたる

如意の寶珠に村肝の

心の綱を奪はれて

自轉倒島を初めとし

世界隈なく驅けめぐり

揚句のはては外國魂の

よるべ渚の捨小舟

琵琶の湖水に浮びたる

辨天さまの床下の

三角石を暗の夜の

目標となして爪先の

血のにじむまで掻きまはし

斷念したる玉探し

産みおとしたる一人子の

所在をさがす折りもあれ

淡路の洲本の東助は



昔なじみの戀人と 知るや忽ち戀雲に

全身くまなく包まれて またも狂態演出し

綾の聖地を追放され おためごかしに再度の

山の麓に建てられし 生田の森の神館

司となりて暫くは いとまめやかに大神に

仕へ侍りし折りもあれ 夜寒の冬も早あけて

若葉のめぐむ春となり 再び起る婆勇み

戀の焰を消しかねて 大海原を打ち渡り

見なれぬ山野を數越えて 五月六月草枕

旅の疲れも漸くに 甦生りたる齋苑館

ウブスナ山にかけ上り 總務を勤むる東別

司に面會せむものと 富妻那の辨の舌の先

泣きつ口説きつ詰寄れど ビクとも動かぬ千引岩

鐵石心の東助を 生捕る由もないじやくり

恥はぢを忍しのびてテクテクと

阿修羅あしゆらの姿すがた凄さましく

にらみつけたる齋苑いそやかた館

後足あとあしあげて砂すなをけり

肩かた肱ひぢ怒いからせ尻しりを振ふり

おのれ見みてゐよ東助とうすけよ

思おもひこんだる女丈夫ぢよぢやうぶの

矢竹やたけの心こころはこの通とほり

岩いはに矢やの立たつ例ためしあり

千引ちびきの岩いはにも松まつ茂しげる

挺て子こでも棒ぼうでも動うごかない

戀こひの意い地ぢをば立たてぬいて

居あ竝ならぶ數あまた多やくの役あん員に

泡あわを吹ふかせにやおかないと

風かぜ吹ふき荒すさぶ坂さか道みちを

徳利とっくりコブラをぶらつかせ

尻しり切きれ草履ざうりを足あしにかけ

鼻息はないき荒あらく口くちゆがめ

眼まなこを怒いからせ空くうちう中を

二ふたつの肩かたにしやくりつつ

地ぢ團だん駄だ踏ふんで上のほり行ゆく

ああ惟かむ神な々が々む

御靈みたま幸さきはひましまして

思おもひつめたる戀こひの意い地ぢ

遂とげさせ玉たまへと祈いのりつつ

祠ほこらの森もりに來きて見みれば

思おもひがけなき神かみの宮みや

千木ちぎ高たか知しりて聳そそり立たつ

莊嚴無比の神徳に  
あきれて高姫言葉なく  
しばし佇みたりしが  
ヤンチャ婆の高姫は  
金毛九尾と還元し  
づうづうしくも受付に  
大手をふりつつ進みより  
聲嚴かに掛合へば  
祠の森に仕へてゆ  
まだ日も経たぬ神司  
齋苑の館の御使と  
信じて奥へ通しける  
高姫ここに尻を据ゑ  
齋苑の館へ往來する  
信徒たちを引止めて  
蝨殺しに吾が道へ  
墮落とさせむと企らみつ  
教主の席にすましこみ  
奥殿深く鎮まりぬ  
少時あつて受付に  
訪ふ眞人のメモアルは  
トの字のついた司ぞと  
聞いて高姫膝を打ち  
ウブスナ山の聖場に  
おいてトの字のつく人は  
東助さまに違ひない  
人目の關を恥ぢらいて  
吾が身を素氣なく扱ひつ

心はさうぢやない（内）證の 妻に會はむと河鹿山

けはしき坂を昇降し 昔馴染の高姫を

慕うてござつたに違ひない アア有難い有難い

女の髪の毛一筋で 大象さへも引くといふ

諺さへもあるものを 年はとつても肉付きの

人に勝れたこの體 吾が肉體の曲線美

全身つつむ芳香を 忘れ難く捨て難く

慕うて來たるやもめ鳥 東助さまも戀の道

少しは話せる人だなア こりや面白い面白い

人目少なき此の館 思ふ存分口説き立て

昔の缺點をさらけ出し 顔を紅葉に染めてやらう

とは言ふものの妾だとして 年はとつても戀衣

着せられや顔が赤くなる 赤き誠の心もて

たがひに親切盡し合ひ 老木の枝も花盛り

小鳥は歌ひ蝶は舞ふ

喜樂蜻蛉の悠々と

羽を擴げて翔つごとく

天下に羽翼を伸ばしつつ

齋苑の館に鼻あかし

もしあはよくばウラナイの

道を再開せむものと

雄猛びするぞ凄じき

受付イルの案内で

入り来る男はあら不思議

東助ならぬ時置師

いつも吾が身の邪魔ひろぐ

空助總務の姿には

さすがの高姫ギョツとして

倒れむばかりに驚けど

副守の加勢に勵まされ

膝立て直し襟正し

太いお尻をチンと据ゑ

團栗眼を細くして

あらむ限りの媚呈し

前齒の抜けた口許を

無理にすばめたスタイルは

棚の鼠の餅かじる

その口許にさも似たり

高姫心に思ふやう

吾が目の敵空助も

木石ならぬ肉の宮

少しは情けを知るであらう

いちほどにかねさんきりやう  
一程二金三器量

こひの規則と聞くからは

てんかたくひほど  
天下に比類なき程の

よき高姫がこの笑凹

おにじゃすこ  
鬼でも蛇でも吸ひ込んで

とりこ  
捕虜にせられぬ筈はない

さうぢやさうぢやと胸の裡

がてんがてん  
合點合點と首肯いて

これこれまうし時置師

もくすけつかさ  
空助司の總務さま

ようマアお出まし下さつた

さんばがらす  
三羽烏の一人と

なとじゅう  
名を轟かすお前こそ

あつまのわけ  
東別に比ぶれば

いくそうばい  
幾層倍の英傑ぞ

なに  
何しに御座つたそのわけを

つぶさに知らして下されと  
しなだれかかる嫌らしさ

もくすけそうむ  
空助總務に變装した

たいうんざん  
大雲山の  
大妖魅

えうげんぼう  
妖幻坊は面を上げ

はなうご  
鼻蠢めかし鷹揚に

あかくち  
赤き口をば開きつつ

ごゑ  
ダミ聲しぼりケラケラと

やかた  
館もゆるぐ高笑ひ

これこれ高チヤン生宮さま

ひのでのかみ  
日出神の肉の宮

お前の強い戀の意地

側に見る目も羨ましと

後を慕うて来たわいな

東助さまには濟まないが

人の前とは言ひながら

一旦捨てた戀の花

拾うて見るも人助け

戀の奥の手と勇み立ち

一つ相談せむものと

きつい山坂乗り越えて

出て来た可愛い男ぞや

と 祠の森の聖場で

交渉談判開始して

二世や三世はまだ愚か

五百生まで契をば

ここで確り結び昆布

寝てはするめの老夫婦

二人の譽も高砂や

お前の持った浦舟に

眞帆や片帆をかかげつつ

浪の淡路の島影に

漂ひ舟を割りし如

玉の御舟を漕ぎ出して

心も安く住の江の

月と花との夫婦仲

面白可笑しく暮さうか

言へば高姫喉鳴らし

よい鴨鳥かもどりを捉つかまへた　　チンチンカモカモ酒祝さかいはひ  
 空助もくすけさまの銚子てうしから　　さす玉たまの露つゆドツサリと  
 玉たまの杯さかづきに満みたしつ　　夜舟遊よぶねあそびをせむものと  
 契ちぎりも深ふかき秋茄子あきなすび　　種たねなし話ばなしに夜よを明あかす  
 かかるところへ宣傳使せんでんし　　初稚姫はつわかひめが現あらはれて  
 高姫たかひめさまの醜態しうたいを　　見みて見みぬふりをなしながら  
 駒こまを停とどめてやや暫しばし　　祠ほこらの森もりの曲津見まがつみを  
 拂はらはむものとスマートに　　旨むねをふく含ませ床下ゆかしたに  
 忍しのばせおきて妖幻坊えうげんぼう　　高姫司たかひめつかさを神かみの在ます  
 高天たかまの原はらに救すくはむと　　心こころも千々ちぢに碎くだかせつ  
 とどまり玉たまふをりもあれ　　妖幻坊えうげんぼうは逸いち早はやく  
 高姫たかひめ引ひき連つれ雲霞くもかすみ　　何處いづくともなく逃にげ失うせぬ  
 ああ惟かむながら神々かむながら　　神かみの恵めぐみに照てらされて  
 醜しこの高姫行衛たかひめゆくゑをば　　完全うまらに委曲つばらに明あかしゆく



神かみの出口でぐちの瑞月ずめげつが  
 日本にほん三景さんけいの一いつと聞きく  
 風光ふうくわう明媚めいび老松らいまつの  
 白砂はくしゃの濱はまにそそり建たつ  
 天あまの橋立はしだて背せなに負おひ  
 なかや旅宿りよしゆくの別館べつくわんに  
 口述こうじゆつ臺だいの舟ふねに乘のり  
 心こころも清きよくいさぎよく  
 妖幻えうげん坊ぼうや高姫たかひめの  
 戀こひと欲よくとに迷まよひたる  
 その經緯いきさつを詳細まつぶさに  
 傳つたへ行くこそ床ゆかしけれ  
 ああ惟かむながら神かむながら々々  
 御靈みたま幸さちはへましませよ。

(大正一五・六・二九 舊五・二〇 於天之橋立 掬翠莊 北村隆光録)

第二章 時化しけの湖うみ (一八一)

妖幻坊の空助や

金毛九尾の高姫は

初稚姫の神徳と

猛犬スマートの威に怖れ

祠の森を逸早く

雲を霞と逃げ出だし

薄の茂る大野原

彼方こなたとかけ廻り

うろつき魔誤つきしがみつき

意茶つき喧嘩も病みつきで

施す術も月の空

遙かにかがやく小北山

その靈場に蝶蜋別

魔我彦司の居ると聞き

齋苑の館の總務職

笠にきながら妖幻坊

ウラナイ教の大教祖

高姫司と名乗りつつ

二人は手に手を取りながら

一本橋を撓づかせ

河鹿の流れを打ち渡り

魔風戀風吹き荒ぶ

蝶蜋館に来て見れば

目界の見えぬ文助が

白き衣を着けながら

受付席に控へゐる

高姫見るより驚いて

これこれお前は文助か  
この聖場は高姫の

教を傳ふる蝶螺別  
神の司の館ぞや

蝶螺の別の教の祖  
高姫司をさしておいて

教を布くとは蟲がよい  
ちつと心得なさりませ

この御方は産土の  
山の臺に千木高く

大宮柱太知りて  
鎮まりぬます素盞鳴の

神の教に仕へます  
三羽鳥の御一人

空助總務でござるぞや  
早く挨拶した上で

いと丁寧におもてなし  
神の如くに敬へ」と

大法螺吹き立て尻を振り  
松姫館に駆け込んで

お千代やお菊に擲掬はれ  
腹は立てども蟲こらへ

木端役員初徳を  
旨く抱き込み小北山

神の館を奪はむと  
あらゆる手段を盡すをり

頂上の宮の鳴動に  
荒膽つぶし逃げ出だし

二百の階段驀地

下るをりしも文助に

思はず知らず衝突し

曲輪の玉を遺失して

高姫初徳もろともに

雲を霞みと逃げ出だし

怪しの森の近くまで

逃げ来るをりしも妖幻坊

吾が懐に隠したる

曲輪の玉の影なきに

顔青ざめて思案顔

芝生の上にとつと坐し

菱れかかりしその風情

見るより高姫怪しみて

様子を問へば妖幻坊

如意の寶珠に勝りたる

曲輪の玉をはしなくも

小北の山に落としたり

初徳兩人吾が命を

奉じて小北の山に行き

曲輪の玉を奪り返し

歸り來たれと命ずれば

尻を痛めた兩人は

チガチガ坂をよぢ登り

文助司を氣絶させ

やうやく曲輪の玉を奪り

再び怪しの森影に

走り歸れば妖幻坊

高姫二人は喜びて

やにわに玉を引奪り

その懐に捻ぢ込みぬ

をりから下る闇の幕

これ幸ひと兩人は

闇に潜める初徳の

頭の邊を目がけつつ

闇に打ち出す石礫

夜目の見える妖幻坊

金毛九尾の二人連れ

雲を霞みと逃げ出だし

浮木の森の狸穴に

暫く身をば潜めつつ

曲輪の玉を應用し

一夜に造る城廓は

天を摩しつつそそり立つ

金毛九尾の高姫は

實の城と思ひ詰め

空助司の妙術を

口を極めて稱讚し

高宮彦は妖幻坊

おのれは高宮姫となり

高子宮子の侍女を

狸と知らず侍らせて

戀に狂へるをりもあれ

三五教の宣傳使

初稚姫に踏み込まれ

妖術ここに暴露して

妖幻坊は座に堪へず  
高姫司を引つ抱へ

もはや運命月の國  
デカタン國の高原の

空翔けり行く折りもあれ  
にはかに吹き來る烈風に

耐りかねてか高姫を  
かかへし腕くつるげば

空中滑走の曲藝を  
演じて地上に墜落し

高姫息は絶えにけり  
さは然りながら高姫は

吾が肉體の失せしをば  
夢にも知らず幽界の

八衢街道をとぼとぼと  
彼方此方に彷徨ひつ

空助司の所在をば  
探し求めて三年振り

月日も照らぬ岩山の  
麓に荒屋構へつつ

往來の精靈引つ捕へ  
底つ岩根の大三口ク

日の出の神の生宮を  
悟れよ知れよ救世主

此處に居ますと法螺を吹き  
騒ぎ廻るぞ可笑しけれ

三年を過ぎし曉に  
トルマン國の王妃なる

千草の姫の身死りし

その肉體を宿となし

再び現世に蘇生り

千草の高姫となりすまし

國王までも尻に敷き

あらむ限りの狂態を

日夜演ずるをりもあれ

言靈別の化身なる

梅公司に謀られて

包むに由なく忽ちに

金毛九尾と還元し

トルマン城を後にして

雲を霞と逃げ出だし

妖僧キユーバーの行衛をば

探るをりしも入江港

濱屋旅館の一室で

思はず知らず空助に

化けおほせたる妖幻坊に

出會しここに兩人は

手に手をとつて夜の道

濱邊に出でて乗合の

高砂丸に身を任せ

スガの港をさして行く

波瀾重疊限りなき

いと面白き物語

完全に委曲に述べてゆく

ああ惟神々々

恩頼をたまへかし。

曲津の運命月の國

大雲山に蟠まる

八岐大蛇の片腕と

世に聞えたる妖幻坊

三五教の皇神の

清き明るき大道の

光を怖れ戦きて

數多の魔神を呼び集へ

神の大路を破らむと

心を碎き身を焦がし

三五教に捨てられて

心ひがめる高姫の

腸探り空助と

身をやつしたる恐ろしさ

身を粉にしても碎けても

潰さにやおかぬ三五の

道こそ強き梓弓

ハルの海原船出して

再び會ひし高姫と

教の【とも】船高砂の

名に負ふ船に身を任せ

油を流せし如くなる

浪も静かな海原を

鼻歌うたひ勇みつつ



スガの港をさして行く。

妖幻坊、高姫の乗り込んだ高砂丸は餘ほどの老朽船であつた。この船には建造以來、高砂笑といつて一種の妙な習慣が残つてゐた。高砂丸に乗り込んだ者は、大は政治の善悪より下は小役人の行動をはじめ、主人や下僕、朋友知己、その外あらゆる人物を捉へて忌憚なく批評し、悪罵し、嘲笑することが不文律として許されてゐた。遅々として進まぬ船の脚、退屈まぎれに種々の面白き話の花が咲いて來た。

船客の一人、

甲「オイ、コブライ、玄眞坊といふ賣僧坊主は本當に仕方のない餓鬼坊主ぢやないか。天帝の化身だの、天來の救世主だのと大法螺を吹きやがつて、オーラ山に立て籠り、三五教の梅公別様に内兜を見透され、岩窟退治をせられてお拂ひ箱となり、三百人の小泥棒を従へて再びオーラ山の二の舞をやらうと企らみ、スガの港のダリヤ姫に懸想して旨く肱鐵砲を亂射され、終ひの果てにやたらハン城の左

守の司に腹まで切らせ、「しこたま」黄金を強奪り俺たちに揚壺を喰はし、入江の濱屋旅館に泊り込み、千草の高姫とかいふ妖女に涎を垂らかし、眉毛をよまれ鞆丸を締められ、所持金をすつかり奪られて、殺されよつたといふことだが、本當によい氣味ぢやないか。俺たちが越後獅子に化けて、彼奴の面を曝してやつた時の狼狽やうつたらなかつたぢやないか、本當に思つても溜飲が下るやうぢやのう、エへへへへ」

コブライ「玄眞坊なんか悪いといつたつて知れたものだよ、彼奴は女さへ當てがつておけば如何でもなる代物だ。ちつと山氣はあるが、根が愚物だから、あんな奴は驚くに足らないが、このごろ三五教の宣傳使の話に聞けば、大雲山の妖幻坊とかいふ獅子と虎との混血兒なる大妖魅が天下を横行し萬民を苦しめ、三五教の聖地までも横領せむとして、第一靈國の天人の御化身初稚姫様とやらいふエンゼル様に太く誠められ、高姫とかいふ淫亂婆と手に手を把つてハルの湖を渡るといふぢやないか。三五教の照國別とかいふ生神様のお話だというて、今朝も埠頭に澤山の人が居てこそ話してゐたよ。俺たちは玄眞坊さへもあの通りこつぴど

くやつつけて肝玉を轉倒へしてやつたのだから、萬一妖幻坊に出會したら最後素首を捻切つて引きちぎつて、子供が人形を潰したやうな目に會はしてやり、天下萬民の憂ひを除き救世主にでもなつてやらうと思ひ、もしやこの高砂丸に怪しい奴が乗つてゐやしないかと目をぎよろつかせてゐるのだが、ねつから惡魔らしい奴も見えず、いささか見當違ひで面喰つてゐるのだ。もしひよつと船底にでも潛伏してゐやうものなら、俺が口笛を吹くから、お前も加勢を頼むよ。名譽は山別けだからのう、オホン」

コオロ「ヘンえらさうに法螺を吹くなよ、内辨慶の外すぼり奴が、貴様の面で妖魅退治も糞もあつたものか、天に口あり壁にも耳だ。妖幻坊といふ奴は魔神の大將だから、俺たちの囁き話を千里外からでも聞いてゐるといふ事だ。口は禍ひの門といふから、まづ沈黙したら宜からうぞ」

コブ「馬鹿をいふな、妖幻坊が怖くて此の世の中に居れるかい。何ほど強いといつても女の顔を見れや菴菴のやうになる代物だから、知れたものだよ。見ると聞くとは大違ひといふ諺もあるから、實物に遇うたら案外「しやつち」もないもの

かも知れないよ、アハハハハ

妖幻坊、千草の高姫は船の底に青くなつて縮こまり、二人の話を聞いて腹は立つてたまらねど、何というても湖の上、水には弱い兩人の事とて悔し涙を呑み乍ら、素知らぬ顔して控へてゐた。

頃しも晴れ渡りたる東北の空に一塊の黒雲現はれると見る間に、忽ち東西南北に擴大し、満天墨を流したるごとく、晝なほ暗く、暴風吹き來たり、雨沛然として降り注ぎ、波浪は山嶽のごとく猛り狂ひ、半ば荒廢に歸したる高砂丸は、めきめきと怪しき音を立て、忽ち轉覆の厄に遇ひ、乗客一同は浮きつ沈みつ聲を限り助けを呼んだ。

折りから激浪怒濤を犯して八挺櫓を漕ぎながら勢ひよく進み來たる新造船があった。アア船客一同の運命は如何なるであらうか。

(大正一五・六・二九 舊五・二〇 於天之橋立なかや旅館 加藤明子録)

第三章 巖の歎乃（一八一—二）

豊榮昇る旭影 巖の光も照國別の

司の一行朝まだき 眼を醒まし凧ぎ渡る

清けきハルの湖の岸 入江の港を舟出して

珍の教も照公や 一度に開く梅公別

玄眞坊ともるともに 名さへ芽出たき常磐丸

松の教の一行は 艚櫂を操り悠々と

ハルの港を迂り行く 魚鱗の波をたたへたる

ハルの海原影清く 彼方こなたにアンボイナ

信天翁や鷗鳥 飛び交ふ様の美はしさ

照國別は立ち上り 天津日影を伏し拜み

聲ほがらかに太祝詞 唱ふる聲は海若を

驚かしつつ船端に

波の鼓を打ちそへて

神國來を叫びつつ

進み行くこそ勇ましき。

照國別 神代の昔天教の

山に現れます元津神

木花姫の神勅もて

巖の御靈や瑞御靈

教を四方に開かむと

數多のエンゼル任せ玉ひ

白雲棚引く其の極み

青雲墮居向伏せる

極みも知らず皇神の

尊き教を傳へ行く

その御諭に従ひて

齋苑の館に現れませる

瑞の御靈の神柱

神素盞鳴の大神は

千座の置戸を負ひながら

雨に體はそぼち濡れ

御髪は風に梳り

手足は霜にやけただれ

食物着物乏しくて

身をきる寒き夕の夜も

やけるがごとき夏の日も

撓まず屈せず道のため

世人の悩みを救はむと

いそしみ玉ふぞ尊けれ

ウブスナ山の聖場に

齋苑の館を建て玉ひ

曲の靈魂に犯されし

人の心を清めつつ

眞人と生れ代らしめ

罪科深き吾々に

名さへ目出たき宣傳使

稱號さへも賜はりて

浮瀬に落ちて苦しめる

世の諸人を救ふべく

ハルナの都に蟠まる

曲津の神を言向けて

神の御國を永久に

建てむと圖り玉ひつつ

四方に遣はす神司

青雲高し久方の

高天原より降ります

天人天女の精靈を

吾等の身魂に下しまし

守らせ玉ふぞ有難き

ああ惟神々々

神の任さしのメツセージ

仕遂げおほせし暁は

再び齋苑の神館

ウブスナ山の聖場に

復命なして大神の

いと美しき尊顔を

拜し奉りて玉の聲

かからせ玉ふ曉を 待つも嬉しき神の道

踏みて行く身ぞ楽しけれ わが行く道は皇神の

御守り厚く坐しませば 如何なる枉の襲うとも

如何で恐れむ敷島の 神國魂の丈夫は

たとへ天地は覆るとも 月落ち星は沈むとも

如何で撓まむ真心の 心ゆるがぬ梓弓

ハルの海原渡り行く 吾が一行に幸あれや

ああ惟神々々 神の恵みぞ畏けれ

神の恵みぞ畏けれ

照公 照國別の師の君の 御名の一字を賜はりて

神の御稜威も照公別 名を負ふ吾ぞ尊けれ

ウブスナ山を立ちしより 吾が師の君ともろともに

あらゆる悩みを凌ぎつつ 彼方こなたの曲神を

言向け和し諸人の 艱難を救ひ恙なく



此處まで來たりし宣傳の

旅の空こそ樂しけれ

ここは名に負ふハルの湖

波こまやかに風清く

眞帆を孕ませ進み行く

常磐の丸は神の船

あまねく世人を天國に

導き渡す神の船

あらゆる罪や穢れをば

乗せて千里の海原に

彷徨ひ失ふ神の船

アア勇ましや勇ましや

波よ立て立て風も吹け

一瀉千里の勢ひで

わが乗る舟は逸早く

スガの港へ走れかし

ああ惟神々々

神の教の旅立ちは

世の人々の夢にだに

知らぬ樂しき節ぞある

伏しては地に幸祈り

天を仰いで國々の

民安かれと祈りつつ

草の褥に石枕

木々の梢を屋根として

月照る空を眺めつつ

幾夜の野邊の假枕

實にも樂しき旅出かな

ああ惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はへ坐ましませよ」

梅公うめこう『吾わが師しの君きみに從したがひて 神素盞鳴かむすさのをの大神おほかみの

任よさしのまにまに齋苑館いそやかた 後あとに眺ながめて出いでて行ゆく

吾わが一行いっかうは恙つつがなく 河鹿かじかの難所なんしよを乗のり越こえて

祠ほこらの森もりや小北山こぎたやま 浮木うききの森もりには目めもくれず

テームス峠たつげを打うち渡わたり 葵あひひの沼ぬまに辿たどり着つき

月の光ひかりも黄金わうごんの 姫ひめの命みことの宣傳使せんでんし

沼ぬまに輝かがやく清照きよてるの 姫ひめの命みことと袂たもとをば

右みぎと左ひだりに別わかちつつ トルマン國こくの危急ききふをば

神かみの恵めぐみに救すくひつつ 吾わが師しの君きみに再會さいくわいし

漸やつやく此處ここに來きたりけり ああ惟神々々かむながらかむながら

神かみの恵めぐみぞ畏かしこけれ 神かみの恵めぐみぞ畏かしこけれ」

玄眞坊げんしんぼうは歌うたふ。

オーラの山に立籠り

敢行したる吾こそは

たとへ方なき人非人

オーラの山を根據とし

謀主と仰ぎオーラ山

梢に仕掛けた星下し

善男善女を迷はして

七千餘國の月の國

時しもあれや三五の

梅公別に踏み込まれ

よるべなくなく三百の

ハルの湖原打ち渡り

様子を聞けば左守なる

十年の昔追放され

悪逆無道の企みをば

八岐大蛇の片腕か

ヨリコの姫を唆かし

泥棒頭のシーゴーを

高く聳ゆる大杉の

良家の婦女を拐かし

金穀物品奪ひとり

横領せむと企らめる

教の道の神司

わが計畫も晝餅となり

不良分子を選抜し

タラハン城に忍び込み

智勇兼備のシヤカンナは

山林深く姿をば

隠して再擧を圖るてふ  
噂を聞いて雀躍し

天帝の化身と化け込んで  
夢寐にも忘れぬダリヤをば

吾が夜の伽にせむものと  
色と欲との二道を

かけて踏み込む山の奥  
タニグク山の岩窟に

小盗人どもに導かれ  
一夜を明かす折りもあれ

命と頼むダリヤ姫  
吾が酔ふ隙を窺ひて

忽ち水沫と消えしより  
シヤカンナも糞もあるものか

二百の手下を借り受けて  
ダリヤの行衛を探しつつ

神谷村の村長の  
家に潜むをつきとめし

その暁の嬉しさは  
天にも上る心地しぬ

天に叢雲花に風  
吹く世の中は是非もなし

掴むに由なき水の月  
心残して澁々に

暗路を辿り進み行く  
上れば高きタラハンの

峠の岩に腰かけて  
前方はるかに見渡せば

野中に建てる城廓は

吾の住居に適へりと

雄猛びしながら小泥棒

二人と共に進み行く

道の行く手もいろいろに

戀路の雲に包まれつ

果し終せぬ果無さに

心を苛ちてタラハンの

城下に忍び待つほどに

タラハン城下の大火災

天の時こそ到れりと

タラハン城に乗り込んで

寶の倉に忍び入り

軍用金をせしめむと

逸るをりしも捕へられ

一度獄に繋がれて

少時憂目は見たれども

泥棒頭のシヤカンナが

左守の司となりすまし

國政を握ると聞くよりも

悪口雑言竝べ立て

遂には左守に腹切らせ

黄金數萬貢がせて

踏みも習はぬ谷川に

沿へる細路走るをり

追手に追はれ是非もなく

運命を天に任しつ

ザンブとばかり谷川に

身を躍らして飛び込めば 人事不省となり果てて

忽ち幽界の旅枕 百の責苦に遇ひながら

人の情けに救けられ 再び悪を企らみつ

入江の濱屋に泊り込み ホ口酔ひ機嫌のをりもあれ

花に嘘つく絶世の 美人千草の高姫が

色香に迷ひ涎くり 巾着までも締められて

所持金スツカリ奪ひ取られ 命危ふくなりしをり

照國別の師の君に ヤツと救はれ今此處に

法の友船常磐丸 松の心に立直し

心に匂ふ梅公別 日も麗かに照公の

神の司ともろともに 涼しき風を浴びながら

縮緬皺の漂へる 大湖原を進み行く

吾が身の幸ぞ樂しけれ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも たとへ天地は覆るとも

神かみに誓ちかひし眞心まごころは  
幾千代いくちよかけても違たがふまじ  
松まつの三口くちの末すゑまでも  
守まもらせ玉たまへ惟かむながら神  
神かみの御前みまへに謹つつしみて  
吾わが身みの行末ゆくすゑ祈ねぎ奉まつる  
』

照國別てるくにわけ 梓弓あづきゆみハルの湖原うなばら乗り行ゆけば

百鳥ももどりちどり千鳥おほぞら大空とに飛とぶ

天國てんごくの春はるにもまがふハルの湖うみを

乗のり行ゆく吾われの幸さち多おほきかな  
』

照公別てるこうわけ 大空おほぞらに日ひは麗うらかに照公てるこうの

湖路うなぢ静しづかに進すすむ樂たのしさ

風清かぜきよく波穩なみおだやかに吾わが乗のれる

船端ふなばたに波なみの鼓打つづみち行ゆく  
□

梅公うめこう別わけ □ 御教みをしへの一度いちどに開ひらく梅うめの花はな

三千さんぜん世界せかいに匂におふなるらむ

梅うめ薫かをる春はるの景色けしきに酔よひながら

ハルの湖渡みづうわたり行ゆくかな  
□

玄真げんしん坊ぼう □ 吾わが爲なせし昔むかしの枉まがを思おもひ出いでて

神かみの御船みふねもいと苦くるしき

今いまよりは誠まことの神かみの大道おほみちに

進すすみ行ゆかなむ假令たとへし死しすとも  
□



かく各自に歌を詠みながら波静かなるハルの湖面を進み行く。時しもあれや、一天にはかに掻き曇り、暴風吹き荒び、激浪怒濤は山嶽のごとく押し寄せ来たり、常磐丸は木の葉の風に散るごとく實に危ふき光景となつた。彼方の海面を遠く見渡せばハルの湖面にて名も高き高砂丸の船體は木端微塵に打ち碎け、乗客の一同は激浪怒濤に翻弄され、命限りに救ひを叫ぶ聲、あたかも叫喚地獄の状態を現出したるが如くであつた。照國別は吾が身の危難を忘れ高砂丸の遭難を救はむと、船頭を勵まし八挺艦を漕ぎながら、高砂丸の難船場目蒐けて力限りに漕ぎつける。ああ惟神靈幸倍坐世。

（大正一五・六・二九 舊五・二〇 於天之橋立なかや別館 北村隆光録）

#### 第四章 銀杏姫（一八一—一三）

空助に化けた妖幻坊および千草の高姫は、高砂丸の破壊沈没に命ばかりは助か

らむものと、兩人とも手早く着衣を脱ぎ棄て、眞裸體となつて海中に飛び込んだ際、妖幻坊は全く元の正體を現はし、獅子と虎との混血兒たる怖ろしき姿となつてしまつた。高姫も眞裸體となつて毛だらけの妖幻坊の首に喰ひつき、浪のままに漂ひながら老木茂れる一つの離れ島に漂着した。

高姫はホツと一息しながら、

「アアこれ空助さま、大變な暴風雨に遭ひ、妾はもう命が無くなるかと思つてゐましたのに、お前さまの變身の術で此の荒湖を乗切り、お蔭で命が助かりました。何とマア貴方は偉い隠し藝をもつてゐらつしやるのですねえ」

妖幻坊は高姫に正體を見附けられ、大變に心を痛め、どう言ひ譯をして胡魔化さうかと思つてゐた矢先、高姫の方から却つて感賞の言葉を受け、心の底から善意に解してゐる事を悟つたので、わざと得意の面をしゃくりながら、

「オイ、千草の高姫、俺の魔術は偉いものだらうがな、まさかの時になれば獅子とも虎とも分らぬかういふ怪體な形相に變化するのだもの、天下に怖れるもの一つも無しだ。俺もかういふ美人を女房にしてゐる以上は、一つの不思議な妙術を

使つてお前の信用を得ておかないと、いつ東助の野郎に鞍替へせらるるか分らない危険区域に置かれてゐるのだから、お前を助ける爲にかういふ醜い肉體に變化して、千草の高姫女帝に忠勤を勵んでみたのだよ、アハハハハ」

高姫「アタ憎らしい空助さまだこと、二つ目には東別だの東助だのと、そんな舊めかしい話は止めてもらひませうかい。東助なんて淡路の洲本で船頭稼ぎをやつてをつた、澁紙面をして色の黒い獨活の大木みたよな體見倒しですよ。何一つ離れ業を知つてゐると言ふでもなし、八島の主のお鬚の塵を拂ひ、お尻の臭を嗅いで喜んでゐるやうな代物は、たとへ十千萬兩の金を積んで倒になつて歩いて見せても靡く千草の高姫ぢやありませんよ。東助なんていふのは勿體ない、彼奴は豆腐の助で結構だ。この高姫の指一本で、潰さうと破うと自由自在ですもの、オホ

ホホホ」

妖幻「これ高チヤン、ずるぶん法螺を吹くぢやないか、齋苑の館で東助に肱鐵砲を打ち出され脆くも敗北し、泣く泣く河鹿峠を渡つて祠の森に逃げ込み、世を果無むで熏ぼつてゐたぢやないか、ちつと頬桁が過ぎるぞや」

「頼下駄を履くのは呆助くらゐが適當ですよ。いや朴下駄でも東助なら過ぎてゐる、この千草の高姫はトルマン國の女帝だから、桐の下駄か伽羅の下駄が性に合つてゐるのですよ。へん、朴下駄が過ぎるなんて餘り人を輕蔑してもらひますまいかい」

「オイオイ高チヤン、さう履き違ひをしてもらつてはいささか迷惑だ。話が脱線してしまつたよ、「ほうげた」が過ぎるといつたのはお前の口が過ぎると言つたのだ」

「へん、口が過ぎるなんて馬鹿にしなさるな、妾だつて口すぎくらゐは立派にいたしますよ、男の一匹や二匹くらゐ遊ばして養つてやりますワ」

「アハハハハ、ますます分らぬぢやないか」

「ますます分らぬの、別れぬのと、それや何を言ふのですか、お前さまはこの高姫に別れやうと思つてゐらつしやるのでせう。盛装を凝らし髪を立派に結つて、お白粉でもつけてみた姿を見て、お前さまは岡惚れをやつてゐたのだらう。かう難船して保護色の衣類は浪に攫はれ、髪はサンバラに亂れ、要塞地帯が丸出しに

なつた姿を見て愛想が盡きたのでせう。へん、これでも、

（都々逸）お前嫌でもまた好く人が  
無けれや妾の身が立たぬ

といふ俗謡の通り、男のすたり物はあつても女のすたり物は三千世界どこを探しても滅多にありませんぞや。へん、嫌なら嫌ときつぱりと言つて下さい、此方にも考へがありますからな

「アアますます困つた事を言ふぢやないか、八八一分つた！ 讀めた！ この空助が妖術を使ひ過ぎ、こんな姿に化けた姿が女帝のお目に留り、秋風が吹いたのだな、よし、それならそれで此方にも考へる餘地は十分にあるはずだ」

「又しても、お前さまは妾を術無がらすのかいなア、エエ腹の悪い人だこと。そしてあの曲輪の玉は如何なさいましたか、よもや湖に落とすはなされませうまいな

ア

「ウン、それや心配すな、湖に飛び込む際腹の中へ呑み込んでおいたから大丈夫だ」

「マアマア呑み込んだのですか、へーん、なぜ妾に呑まして下さらないの、本當に貴方は水臭いお方だワ」

「お前に呑ましたいは山々だが、咄嗟の場合、そんな餘裕があつて堪らうかい、失禮ながら空助の高天原にチヤンと納めておいたから、何時かまた吐き出す時があるであらう、さう心配はするに及ばないよ」

「なるほど、抜目のない空助さまだこと、それでこそ高姫が最愛の夫、末代までの旦那様だワ。しかし空助さま、この島に着くは着いたが、かう裸では道中も出ないし、曲輪の法でも使つて立派な着物を一枚拵へて下さるわけにはゆきませんまいかなア。貴方だつてさう毛だらけの變化姿では人中へも出られませんまい」

「なるほど、お前の言ふ通りだ、俺の聞く通りだ。雨蛙が木に止まつて鳴く通りだ、書き出しは右の通りだ。俺も此の通りだ、両手を土について正に高姫の君に謝り参らする通りだ。アハハハハ」

「これ空チヤン、笑うてゐる場合ぢやありませんか。何ほど春ぢやといつても斯う寒くつては、やりきれないぢやありませんか、何とか工夫がございますまいかなア」

「ヤア、此處に船が一艘繋いである。これから考へると、誰か此の島に上陸してゐる人間がある筈だ。一つ其奴の皮を剥いて、お前と俺とが身に纏ふ事とせうではないか」

「全然り追剥のやうな事をするのですか、それでは時置師の宣傳使とは言はれま  
すまい。妾だつて何ほど寒くつても泥棒した衣類を身に纏ふことは嫌です。そんな事をすれや日出神の神格がさつぱり地に落ちてしまひますワ」

「てもさても馬鹿正直な女帝様だなア。昔から譬にも背に腹は替へられぬといふぢやないか。大善をなさむとすれば、小悪は時と場合により止むを得ないだらうよ。アア寒い寒い、かう俄かに強い風が吹いて來ては、俺も耐らない。どこかに  
好い竹藪でもあれば、すつこんで風を避けたいものだ」

と言ひながら、「高姫續け」と一聲残し、篠竹のシヨボシヨボと生えてゐる竹藪

の中なかに身みを隠かくしてしまつた。その實じつやうやくに顔かほだけ人間にんげんらしく化ばけてゐるもの、身みに一片いつぺんの布片ふへんも纏まとつてゐないので苦くるしくつて耐たまらず、顔かほまでが元もとの妖怪えうくわいに還元くわんげんしさうなので、そんなエグイ面つらを見せては、さすがの高姫たかひめも愛想あいそをつかさだらうと思おもひ、この竹藪たけやぶに飛とび込み第二だいにの變化術へんげじゆつを施ほどこすためであつた。

この藪やぶは百坪ひやくつばばかりの面積めんせきがあつて、その中なかへ入いるや否いなやたちまち白胡麻しろごまのやうな蟻ありの群むれが數知かずしれず登のぼりつき、いかなる人間にんげんといへども身體からだ中ちゆうを噛かみ破やぶり、たちまち身體からだは腫はれ上あり痛痒いたかゆうてたまらない。さうこうしてゐる中に、足あしの一尺いつしやくもある怪あやしい蜘蛛くもが幾萬いくまんともなくやつて來きて尻しりから粘着性ねんちやくせいの強つよい絲いとを出だし、身體からだをぎりぎり巻まきにして仕舞しまひふといふ怖おそろしい魔まの森もりである。それとも知しらず妖幻坊えうげんぼうが飛とび込こんだのだから耐たまらない。荒あらくたい毛けの間に幾萬いくまんとも知しれない蟻ありが噛かみつく痛いたさ、さすがの妖幻坊えうげんぼうも悲鳴ひめいをあげて虎とらの唸うなるやうな呻吟聲うめきしこゑで高姫たかひめの救すくひを求もとめてゐる。高姫たかひめはその聲こゑを聞ききつけて藪やぶの傍そばに立たち寄より中なかを覗のぞいて見みれば、妖幻坊えうげんぼうは蟻ありに責せめられ七轉八倒しちてんはつたうの苦くるしみの眞最中まっさいちゆうであつた。高姫たかひめは氣きも轉倒てんたうせむばかり打ち驚おどきながら竹藪たけやぶの後うしろの方ほうに廻まつて見みると、一寸ちよつと小高い塚つかが在あつて、その



上うへに周圍しうゐさんぢやう三丈さんぢやうもある大銀杏おほいてぶが天てんを摩まして立たつてゐる。銀杏いてぶの根本ねもとには小ちひさい祠ほこらが立たつてゐて、若い男女わかにんぢよが何事なにごとかすすり泣なきしながら祈いのつてゐた。抜目ぬけめのない高姫たかひめは、早くも男女だんぢよふたり二人の着衣ちやくいを失敬しつけいして東助とうすけの難なんを救すくひ自分じぶんも着用ちやくようせむものと、銀杏いてぶの木きの後ろうしに隠かくれて兩人りやうにんの話はなしを聞きいてゐた。

女をんな「もしフクエさま、どう致いたしませう。何なにほど貴方あなたと妾わたしと戀こひにおちて惱なやんでゐても、強欲がうよくな繼母ままははが、あなたとの戀こひを許ゆるしてくれないのですもの。スガの港みなとの呉服屋ごふくやへ嫁よめに行ゆけと、煙管きせるで疊たたみを叩たたいての日夜にちやの折檻せつかん、生うみの兩親りやうしんは既すでにこの世よを去さり、繼母けいぼの手に育そだてられた妾わたし、その恩義おんぎを思おもへばどうして戀こひしい貴方あなたと、天下てんか晴はれて添そふ事ことが出來できませう。また妾わたしの家いへはスガの呉服屋ごふくやさまに大變たいへんな借金しやくきんがあり、それを返かへさなければなりません、返かへす金かねはなし、母ははも大變たいへんに心配しんぱいいたしてをります。もし妾わたしの縁談えんだんを斷ことわりでもせうものなら、戀こひしきスガの里さとに住すむ事ことは出來できませぬ。だと言いつて貴方あなたを思おもひ切る事ことは如何どうしても出來できませぬ。何なんとか此この銀杏いてぶの神様かみさまの御利益ごりやくによつて圓滿ゑんまんな解決かいけつをつけてもらひたいものでございます。』

と又またもやすすり泣なく。

フクエ「オイ岸子、さう悲觀したものでぢやない。この神様は女神様だといふ事だから、きつとお前に同情して下さるに相違ない。私ぢやとて未だ主人持ちの身上、どうする事も出来ぬみじめな有様だが、お前と別れるくらゐなら、一層ハルの湖へ身を投げて死んだが増しだよ」

岸子「この神様に一切の衣服をお供へすれば、屹度願ひを叶へて下さると言ふぢやありませんか、上衣だけなりとお供へして歸りませうか」

フクエ「なるほど、上衣の一枚ぐらゐお供へしたつて別に苦しくはない」

かく話す折りしも、银杏の木蔭より、優しき女の聲、

「妾こそは、银杏姫の命でござるぞや、今より千五百年の昔、戀男に逢はむため盃の船に乗つて、この離れ島に夜な夜な通ひ、折柄の暴風雨に遇ひ、惜しき命を湖の藻屑となし、その精靈凝つて茲に裸姫となり、名も银杏ヶ姫の命と改め、衣類一切を吾に獻ずるものには、如何なる戀も叶へ得させむ、縁結びの守護神であるぞや。そち達兩人の戀はこの千草オツトツコイ银杏姫の命が請合うて叶へてやらうほどに、衣類一切を此處に脱ぎ捨て、其の上この魔の藪に飛び込んで、惱

める一つの生物を眞裸のまま救ひ出せよ。さすれば其方の願望は必ず必ず今日只今より叶へて遣はずぞや、夢々疑ふ勿れ、夢々疑ふ勿れ」

といふ聲は千草の高姫である。二人の男女は實の神の言葉と信じ、兩人一度に惜氣もなく、下着まで残らず脱ぎ捨て銀杏姫の命に奉り、神勅のごとく魔の藪に飛び込んで、白蟻に悩み苦しめる妖幻坊をやつとの事で引き出してしまった。不思議にも白蟻は藪の外一步出づるや否や、一匹も残らず、身體より落ちて藪中に逸早く姿を隠してしまった。二人の男女は甘々と高姫の計略にかかり眞裸にせられ、其の上妖幻坊を救ふべく藪中に飛び込んだため、身體一面白蟻に集られ身動きならず、七轉八倒の苦しみをしてゐる。

高姫「ホホホホ、オイそこな若い二人の呆け共、こなさまは銀杏姫の命でも何でもないんだよ。よつく耳を浚へて聞いておきや、ウラナイ教の大教主千草の高姫さまだよ。二人が眞裸で白蟻に噛み殺されるのも前世の因縁だ。その代り潔く蟻どもに喰つてもらつて死になさい、きつと最奥第一の天國に、此の贖の銀杏姫に衣類を獻じた徳によつて救ひ上げてやらぬ事もないぞや、……これ空チヤン、

何を呆けてゐるのぢや、確りなさらぬかいな」

妖幻「ヤア高姫、よう助けてくれた。思はず知らず魔の森に飛び込んで一つより命を棒に振るところだつた。お前の縦横無盡の智略によつて此の空助も一命が助かつたやうなものだ。いや感謝するよ」

「ホホホホ、これ空チヤン、曲輪の玉の神力は如何なつたのですか、まさか白蟻の奴に奪られたのぢやありますまいなア。神變不思議の妙術を使ふお前さまが、蟻なんかにしてやられるとは、ちつと均衡が取れぬぢやありませんか」

「甘いものには蟻が集る、辛い奴には蟻が集らぬと言ふぢやないか。とにかく俺は人間としては最上等だ、さうして女に甘いだらう。血液も人一倍甘いなり、何分神魂が勝れて良いものだから蟻の奴、有難がつて吸いついたら離れぬのだよ。お前だつて俺に吸ひついたら容易に放して呉れまいがな」

「なるほど、道理を聞けばご尤も千萬、うつかり空チヤンは、これから蟻のある所へは行つて貰はないやうにせねばなりません。妾だつて、きつと蟻につかれる體に違ひありませんからなア」

「それやさうかも知れぬ、いつも喋々喃々と甘い囁きを聞かして呉れるからなア。しかし俺を救ってくれた二人の男女は可哀さうだから助けてやらうぢやないか。何というても俺の命の親だからのう」

「空チヤン、それや何を言ふのですか、お前さまの正體を見附けられた以上、こんな者を置いては後日の妨げになるぢやありませんか。あの通り蟻に喰はしてあげば別に人殺しの罪にもならず、蟻は喜んで腹を膨らすなり、蟻のためには吾々は救世主ですよ。蟻だつて人間だつて同じ事ですよ、たつた人間二人の命の代りに數百萬の蟻の命を救へば、幾ら功德になるか知れませぬよ。そんな宋襄の仁はおよしなさい。折角喜んでゐた蟻が困りますよ。サアサア二人の衣類も胡魔化して剥いたから、貴方は男の方をお着けなさい。妾は嫌だけれど阿魔女の方を暫時着てやりますワ、何と知恵ほど世に尊いものがあらうか、空助さま、千草の高姫の器量はちと分りましたか」

「烏賊にも、蟹にも蛸にも足は四人前だ、ヤア感心々々、お前の腕前には時置師の空助も恐れ入谷の鬼子母神だ。呆れ蛙の面に水だ、ウフフフ」

フクエ「もしも私を助けて下さいな、あまり殺生ぢやございませぬか」

高姫たかひめ 腮あこをしゃくりながら、

「ヘン頓馬野郎奴。それや何を言ふのだ。最前あれだけ丁寧ていねいに引導いんどうを渡わたしておいたぢやないか、マア悠ゆうりと其處そこに兩人りやうにんが寝ねて喰くれてゐたらよからう、有難ありがたうと感謝かんしなさい、お前まへの體からだはたちまち蟻ありケ塔がたふになるぞや、朝あさから晩ばんまで働はたらいても働はたらいても喰くへぬ世よの中に、寝ねとつて喰くれるとは幸福かうふくな人間にんげんだ、オホホホ」と憎にくらしげに腮あこを突き出し、尻しりを三みつ四よつ叩たたいて一目散いちもくさんに空助もくすけと共に船着場ふなつげばに馳はせ歸かへり、二人ふたりの繋つないでおいた小船こぶねに身みを任まかせ、浪なみなぎ渡る春はるの湖面こめんを鼻歌はなうたうたひながら甘あまき囁ささやきをつづけて何處いづくともなく漕こいで行く。

(大正一五・六・二九 舊五・二〇 於天之橋立なかや旅館 加藤明子録)

高砂丸の沈没を見てその危難を救ふべく、照國別一行の乗れる常磐丸は現場に馳せつけ、救ひの綱を投げかけて一人も残らず吾が船に救ひあげてしまった。一同の乗客は九死に一生を得て、照國別を神のごとく感謝し尊敬し、喜びの聲は狭き船中に湧くごとくであつた。

さしも烈しかりし暴風はピタリと止んで海面にはかに凪ぎ渡り、あたかも疊の上を迂るとき光景となつて來た。救はれた人々の中には、一旦玄眞坊と事を共にせし泥棒の小頭分コブライ、コオロの兩人があつた。コブライ、コオロの兩人は、自分を救うてくれた船の中に泰然と坐つてゐる玄眞坊の姿を見て、船の片隅に頭を鳩め囁きはじめた。

コブライ「オイ、コオロ、どうやら宣傳使の側に神さま然と口を【へ】の字に曲げて坐り込んでゐる男は玄眞坊ぢやなからうかのう」

コオロ「俺も最前から、よう似た奴だと思つて考へてゐるのだが、なにぶん尊い宣傳使の側に蟲の卵見たいに、しがみついて離れぬものだから、「オイ、どうだ」と聲をかけるわけにも行かず、俺の僻目ぢやなからうか、もしも人違ひではない

かと控へてゐたが、どうもよく似てゐるやうだ。縦から見ても横から見ても、何處から觀察しても熟視しても、調査しても、正眞正銘の玄眞坊とより思はれないぢやないか。ここで一つ、歌でもよんで、彼奴を此處へつり出す工夫をしやうぢやないか』

一旦は俺たちに辛い目を見せよつた敵だといつても、俺の命を助けてくれた仲間だから、あつて過ぎた事はモウ忘れやうぢやないか。過越苦勞は禁物だと三五教でも教へてるからのう』

なに、彼奴が玄眞坊とすれや、舊惡の露顯を恐れて俺たちを助けるものかい。キツと俺たちア水を呑んで誰に助けてもらつたか夢現で分らなかつたが、彼奴に助けてもらつた氣づかひは毛頭なからうよ。もし玄眞坊が俺たちと見たならば、助けるふりして水の中へ投げ込んだに違ひない。とにかく、俺たち二人は玄眞坊にとつては、非常の邪魔物で目の上の瘤だからのう』

如何にも、そらさうだ。彼奴に助けてもらつたのでないとすれや、何も憚る事はない。ここで一つ、彼奴の舊惡を歌つて宣傳使さまに訴へやうぢやないか』



「そんなら俺が一口言ふから、あと又お前が一口歌へ、俺が一口お前が一口、交り代りに歌ひさへすれや片見怨みがなくて可いだらう。サア始めるぞ」と言ひながら、少しばかり立膝をして、玄眞坊の面を睨みつけながら歌ひはじめた。

コブ「ここは名に負ふハルの海」

コオ「ヨイヨイヨイヨイトサヨイトサ」

「往來の船も澤山に 竿舵干さず續いてる」

「ヨイヨイヨイトサヨイトサ」

「高砂丸に乗り込んで ドテライ時化に出會し

船は忽ち轉覆し 水に流されブクブクと

すでに土左衛門となりかけた」

「ヨイヨイヨイトサヨイトサ」

㊦ オイ、後はお前の番だ、俺が囃役だ

㊦ ヨシヨシこれからが正念場だ、シツカリ囃せよ。

天道は人を殺さない 救ひの船が現はれて  
一人も残らず常磐丸 助けて下さつた有難さ

㊦ ヨーイヨーイ ヨイトサヨイトサ

㊦ 中に一つの不思議さは 人並み勝れた大男

天下無雙の貴婦人と 海に飛び込み忽ちに

虎か獅子かといふやうな 怪體な姿を現はして

荒波かき別けブクブクと 逃げて行つたのが面白い

こいつア又どうしたものだらう 狐狸の化けたのと

一緒に船に乗りしたため あのやうな時化に會うたのか

㊦ ヨーイヨーイ ヨイトサヨイトサ

㊦ それは如何でもよいとして 肝腎要の生命をば

助けてもらうた嬉しさに 感謝の歌を歌ひませう

三五教の宣傳使 照國別とかいふお方

吾が身の危難を顧みず 伊猛り狂ふ荒波を

物ともせずに乗りにきつて 危ふき人の生命を

守らせ玉ふは生神か ただしは神の御化身か

お禮は言葉に盡されぬ 幾重も感謝し奉る

ヨイヨイ ヨイトサヨイトサ

それに一つの不思議さは オーラの山に立籠り

世人を欺く星下し 怪體な藝當演じたる

膺天帝の膺化身 天下唯一の膺救主

玄眞坊のデレ助が すました顔して乗つてゐる

こんな汚れた身魂奴が ハルの湖原渡りなば

又もや龍神腹立てて 荒風起し浪立てて

舟を覆すに違ひない 思へば思へば恐ろしや

悪魔の権化の玄眞坊

オーラの山を失敗つて

谷蟻山に迷ひ込み

スガの港のダリヤ姫

手ごめにせむと息捲きつ

きつい肱鐵喰はされて

性懲りもなく附け狙ふ

蛙の面に水とやら

恥を知らない賣僧坊主

タラハン城へと乗り込んで

左守の司に駄々をこね

無理難題を吹きかけて

しこまた金を奪ひとり

追手に追はれてドンブリと

深谷川に身を沈め

一度は幽冥旅行まで

やつて来よつた曲者よ

又もや娑婆に舞ひ戻り

吾々二人を誑かし

千草の姫とかいふ奴に

うつつを抜かし巾着を

しめて殺されたりと聞く

その糞坊主が泰然と

常磐の丸に坐り込み

横柄面を下げよつて

ヨイヨイ ヨイトサヨイトサ

すましてけつかる憎らしさ  
これこれまうし宣傳使

怪體な奴が居ります  
其奴は油斷がなりません

女と見たら娘でも  
人の女房でもかまはない

目尻を下げて涎くり  
ものに致さなおかぬ奴

彼奴が船に居るかぎり  
この船中の御一同

懷中用心なさいませ  
私も一度は泥棒の

仲間に這入った事あれど  
改心いたした其の上は

決して後へは戻らない  
これこれこの通り修驗者

蓑笠つけてをります  
人の門戸に立ちながら

お經を讀んで世を渡る  
改心組の吾々は

決して心配要りませぬ

ヨイヨイ ヨイトサヨイトサ

彼處にけつかる糞坊主  
天帝の化身と化け込んで

人をたばかる大泥棒  
重ねて懷中物御用心

命助いのちたすけて貰もらひました　お禮れいに宣傳使せんでんしに玄眞坊げんしんぼう

ありし昔むかしの悪行あくかうを　根ねから葉はから曝さらけ出し

謹つつしみ訴うったへ奉たてまつる　天地てんちの神かみも御照覽ごせうらん

コブライ　コオロの申まをすこと　決して偽いつはりありませぬ

お禮れいに氣きをつけおきまする　ああ惟神かむながらかむながら々々

御靈幸みたまさちはへましませよ

ヨイヨイ　ヨイトサヨイトサ

玄眞坊げんしんぼうはたまりかねてや、ツカツカと座ざを立たつて二人ふたりの側そばに寄より添そひ、言葉ことばも  
低ひくう丁寧ていねいに、

「ヤア、コオロさまに、コブライさま、まづまづ御壯健ごさうけんでお目出めでたう。イヤモウ、  
キツウ膏あぶらを皆みなさまの前まへでとられました。もうこの邊へんでどうか御勘辨ごかんべんを願ねがいたいも  
のですな」

コブ「ヘン……これくらゐで御勘辨ごかんべんが願ねがいたいものですな……ソラ、ナーン吐ぬか

してけつかる。これや貴様、俺をえらい目に遭はした事は覚えてゐるだらうな。サアこれから貴様の生首を引つこ抜いてチツと不恰好だけど、煙草入の根付にしてやるから、因果腰を定めてをれ。のうコオロ、さうでもせぬと、腹の蟲が承知せぬぢやないか」

コオ「ウンそらさうだとも、こんな奴を助けてたまるものか。此奴の所在をどこまでも探し出して、怨みをはらさにやおかぬと、修験者とまでなり下つてをつたのだもの、今日會つたのは優曇華の花咲く春に會つたやうなものだ。サア玄眞坊、返答はドドドドどうだい」

と握り拳で胸を三つ四つ打ちながら雄猛びする其の可笑しさ。蝶螈が井戸の底から放り上げられて、踊つてゐるやうなスタイルである。

玄眞坊「サア本當に悪かつた、濟まなかつた。然しながらこれも因縁づくぢやと見直し、聞直し、どうぞ俺の罪を許してくれ。俺もな、スツカリ改心して三五教の宣傳使のお弟子となつたのだから、俺に指一本觸えてもヤツパリ宣傳使様に御無禮した事になるのだからのう」

コブ『ヘン、虎の威をかる野良狐奴が、うまく、ぬけやうとしても、玩具の脇差だ、ぬきさしならないぞ。サアこれから荒料理だ。オイ、コオロ、この船中の無聊を慰むるために、チツと古いけれど蛸一匹料理して、皆さまにお目にかけてやうぢやないか』

コオ『航路の安全を祈るため龍神さまにこの蛸を料理して、お供へするの信心の一つだ。又あんな時化がくると叶はないからう、イツヒヒヒ小氣味のいい事だワイ』

玄真『オイ、コブライ、コオロの兩人、本眞劍に俺を料理するつもりか、エー、それなら、それで此方にも一つの覺悟がある。無抵抗主義の三五教に入信した俺だけ、正當防衛は許されてあるから、小泥棒の一匹や二匹、ばらすくらゐ何の手間隙要るものか。サア見事相手になるならなつて見よ』

と團栗眼をむき出し仁王立ちになつて船底に四股を踏鳴らしてゐる。コオロ、コブライの兩人は、

『なに、猪口才な、賣僧坊主』



と言ふより早く、一人は首つ玉に喰ひつき、一人は足を引つ攪へ、せまい船の中  
で轉けつ輾びつ一場の活劇を演じ出した。

照國別は此の體を見るより、

争ひは枉津の神の仕業ぞや

静かなるこそ神の御心

憎まれて憎み返すは枉神の

醜の業なり畏れつつしめ

よき事と悪しき事柄行き交ひて

この世の中は開け行くなり

コオロ、コブライの二人はこの歌を聞くより、パツと手を放せば玄眞坊は鼻汁  
をすすりながらヤツとのことで起き上がり、

有あり難がたし照てる國くに別わけの師しの君きみの

生いく言こと靈たまに命いのち拾ひろひぬ

コブライヤコオロの君きみに毆なぐられて

罪つみ消きえなむと思おもへば嬉うれし

コオ 吾わが命いのち助たすけ玉たまひし師しの君きみの

嚴いづ言こと靈たまに反そむくよしなし

コブ 憎にくい奴やつとは思おもへども宣せん傳でん使し

待まてとの聲こゑに力ちから拔ひけたり

照國てるくに 『争あらそひの雲くもも漸やっやく晴はれ行ゆきて  
誠まことのかがみ照てるぞ目め出でたき』

照公てるこう 『不ふ思し議ぎなる神かみの助たすけに會あひながら  
なほも争あらそふ人ひと心こころかな』

梅公うめこう 『ただ人びとの心こころは廣ひろく押おし竝なべて  
今いま目めの前まへに三み人たりの姿すがたよ  
晴はれてまた曇くもる五さつ月つきの大おほ空ぞらに  
さも似にたるかな人ひとの心こころは』

梅公うめこう別わけは照國てるくに別わけに少時しばしの暇いとまを乞こひ、救すくふべき人ひとありと言こと舉あげしながら濱邊はまべの町まち

に舟を横たへ、一先づ上陸し、更に小舟を借り受け、湖中に浮ぶ太魔の島を指して艦を操りながら別れ行く。

常磐丸は順風に帆を上げながらスガの港を指して進み行く。

(大正一五・六・二九 舊五・二〇 於天之橋立なかや別館 北村隆光録)

## 第六章 夜鷹姫(一八一五)

妖幻坊、高姫の二人は太魔の島に繋いであつた小船を失敬し、四五町ばかり湖上を進んだをりしも、矢を射るごとく一艘の小船此方を指して馳せ來たるに出會した。高姫は目敏くもその船を見てハツと胸を轟かせながら、顔色を紅に染めた。妖幻坊はこの體を見るよりやや不審を懷き、

改めて千草の高姫様、いや女帝様、凄しい御腕前にはこの空助、驚愕いな感激仕りました。歸命頂禮謹請再拜謹請再拜

高たか「これはしたり、空助様もくすけさま、妙な事めうことを仰おつしやいますね、何なにをそれほど感激かんげきなさつたのですか。他人行儀たにんぎやうぎに改あらたまつて謹請再拜ごんじやうさいはいだなんて、よい加減かげんに擲揄からかつておいて下さいな」

妖えう「忍しのぶれど色いろに出でにけり吾わが戀こひは  
物ものや思おもうと人ひとの問とふまで

といふ百人一首ひやくにんいつしゆの歌うたを、お前まへ知しつてゐるのだらう」

「へん、馬鹿ばかにして下くださいますな、そんな歌うたぐらゐよう知しつてゐますよ、それが一體いつたい何なんだと仰おつ有しやるので、怪體けつたいの事ことを言いふぢやありませんか」

「お前は今彼處いまあそこへやつて來きた一艘いっそうの船ふねの若者わかものを見て、顔かほを紅葉もみぢに染そめたぢやないか、お前の寢ねても醒さめても忘わすれる事ことの出來できない戀人こひびとに相違さうゐあるまいがな、さうだから凄すこいお腕前うでまへだと言いつたのだ」

「何なんの事ことかと思おもへばまた嫉やいてゐるのですか、水みづの上うへで妬やくのも餘あまり氣きが利きかぬ

ぢやありませんか。サ、そんな氣の利かぬ事を言はないで艦を操つて下さいな」

「艦を操るより實はあの男の艶福家に『あやかり』たいのだ。トルマン城の王妃の君、千草の高姫さまに思はれた天下唯一の美男子だからなア。俺のやうな虎とも獅子とも譯の分らぬ毛の深い男と一緒に暮すよりも、縮緬のやうな肌をした若い男と同棲した方が、どのくらゐ世の中が楽しいか分らないからう。いや醜男には生れて來たくないものだ」

「それや何を仰有います、よい加減に妾を虐めておいて下さいませ」

「本當に、お前はあの男を知らぬと言ふのか」

「絶対に知らない事は知らないと言ふより外に道はありませんもの」

「日出神の生宮、底つ岩根の大ミロク様の身魂は、決して嘘は言はないでせうね」

「勿論の事です」

「そんなら此處で一つお前と約束しやう、お前が知つてゐるかゝないか、あの船を追つかけてあの若者に會はして見やう。もし、向かふの方からお前の顔を見て何とか言つたら決して知らぬとは言はさないからな。關係のない男女には言葉を

交かはさないのがこの國くにの規則きそくだ。又またただ一度いちどでも關係くわんけいしたら、内證ないしようでも言葉ことばをかけなければならぬ規則きそくだから、どうだ高姫たかひめ、知らぬと言いふなら調しらべて見みやうか」

「なんとマア嫉妬心しつとしんの深い執念しふねん深い人ひとだこと、もうそんな事ことは水みづに流ながして一時いちじも早はやうスガの港みなとに行ゆかうぢやありませんか」

「お前まへがさう言いへば言いふほど私わしの疑うたがひが増まして來くるばかりだ。もしお前まへに關係くわんけいがあつたとすれや如何どうしてくれる。サアそれから定きめておこう」

「さう疑うたがはれちや行やり切きれませぬから、あなたの御勝手ごかつてに調しらべて下ください、さうし  
たらきつと疑うたがひが晴はれるでせう。妾わたしの身みは晴天白日せいてんはくじつですからなア」

「よし、おい出でた。サアこれからが化ばけの皮かはの現あらはれ時ときぢや、高姫たかひめさま、確しつりな  
さいませや」

「何なんなと仰おつしや有あいませ、その代かはりあをの男をとこと妾わたしと關係くわんけいが無なかつたといふ事ことが分わかつたら、  
どうしてくれませんか」

「ハハハどうするもかうするもない、分わかつたらお前まへも疑うたがひが晴はれて結構けっこうだらうし、  
俺おれも嫉妬心しつとしんがとれて大慶たいけいだ。萬々まんまん一俺いちおれの言いふ事ことが違ちがつたら、今後こんごどんな事ことでもお

前の言ふことに絶対服従を誓つておく。しかし俺が勝つたら、どんな事でもお前は俺の無理難題を聞くだらうなア」

「あも屋」の喧嘩で、餅論ですワ」

「よし面白い」と言ひながら妖幻坊は船首を廻し、一艘の船を目當に追つかけて行く。一艘の船は自分の現在盗つて来た船の繋いであつた場所へと横づけとなつた。妖幻坊は「オーイ オーイ」と熊谷もどきに呼ばはりながら早くも岸邊についた。梅公別は二人の姿をつくづく眺めながら、

「ヤア、誰かと思へば千草の高姫さままでござつたか、其の後は打ち絶て御無沙汰いたしました。あなたのお居間でグツスリと寝さしてもらひ、いかい失禮をいたしました。ですが、ますますお達者でお目出たう、見れば立派なお婿さまをお貰ひなさいましたやうですね。私とても萬更他人ではありませんまい。しかし女といふものはよき氣の變るものです。どうか私の時のやうに、氣の變らないやうに、今度の婿さまを大切に上げて下さいや。かう言うても私は貴女に再縁を迫るやうな事もありませぬから御安心下さいませや。さうしてお二人お揃ひで此の島へ何の御



用でお出ですか」

高姫「これはこれは何處の方かは知りませぬが、人違ひをなさるも程がある。なるほど妾は千草の高姫に間違ひはありませぬが、廣い世界には同じ顔をした女もあり、同じ名の女もあるでせう、そんな事を言うてもらうと夫ある妾、大變に迷惑いたしましたす」

梅公「高姫さま呆惚けちやいけませぬよ、人違ひするやうな老眼でもなし、晝夜間斷なく夢にまで貴女の姿を見て探してゐる私、どうして間違へる氣遣ひがありませうか」

妖幻坊は面色朱を注ぎ身體一面慄はせながら、高姫と梅公をグツと睨めつけ、「これや、そこな青二才奴、誰に斷わつて俺の大切の女房と何々しやがったか、サ、その理を聞かせ、返答次第によつては容赦は罷りならぬぞ。これや女帝、いや阿魔奴、夜鷹、辻君、惣嫁、十錢、下等内侍、蓆敷奴が、八尺の男子を今まで馬鹿にしよつたな、サアこの裁きを確りと付けてもらひませうかい」

高「これ空助さま、辻君だの、十錢だの、蓆敷だの、あまり情けないお言葉ぢや

ありませぬか、妾こそ全く知らないのですもの。此の人は妾の美貌を見て精神が錯亂したのでせう、さうでなければ見ず知らずの妾を見て、こんな事を言ふ道理がありませぬもの」

妖「マアこの青二才はこの島に置いておきや逃げる氣遣ひはない、その代り此の借船は預かつておく」

と確りと自分の船尻に縛りつけ、二三町ばかり沖へ漕ぎ出し、

「サア、夜鷹さま、かうなつちや此方のものだ。本當の事を言うてもらひませう

かい」

高姫は進退これ谷まり、隠すにも隠されず虚實取混ぜて覺束なくも白状をする。

高「前齋苑の館の救世主、神素蓋鳴尊の三羽烏の御一人、第一靈國の御天人様、

曲輪の術に妙を得たる天下無雙の英雄豪傑、縦から見ても横から見ても、頭から

見ても、尻から見ても、何處に一所穴のない吾が夫様、その御慧眼には遠の千草

の高姫も感嘆の舌を捲かざるを得ませぬワ」

妖「何だ、長たらしい俺の名を竝べやがつて、機嫌を取らうと思つたつて其の手

に乗るものか、善言美詞も時と場所によるぞ。阿婆摺れ阿魔奴、そんな追従は聞きたくない。貴様の戀人に間違ひはなからうがな、女なら女らしくあつさりと白状しろ」

高「工工もうかうなれや破れかぶれだ。サア私をどうなとして下さいませ、お前さまに捨てられちゃ、もはや此世に生き甲斐もありませぬから、覺悟を決めました。サア、早う殺しなさい」

と糞度胸を据ゑて、もたれかかる。

妖「それほど殺して欲しけれや、敢て遠慮はしない覺悟だが、しかしお前を殺すと忽ち困るのは俺だ。お前の美貌を種に一芝居打たにやならぬからのう」

高「ホホホホ、それやさうでせうとも、ねえ貴方、どうして此の可愛い女房に刃が當てられませう。そこが人情の美しいところ、見上げたるお志、ますます好きになつて來ましたワ」

「工工馬鹿にさらすない、すべた阿女奴。それよりも約束を履行して何でも俺の言ふ事を聞いてもらはうかい」

「ハイ何なりと聞きませう、お前さまが死ねと仰有つても嫌とは言ひませぬ、  
（低い聲）ことはないけど、マアマア何でも聞きますから仰有つて下さい」  
「そんなら俺に誠意を現はすため、あの男を甘くちよるまかして魔の森へ甘く放  
り込んでくれ。さうすれや彼奴は蟻や蜘蛛に命を奪られてしまふから、俺もお前  
に尻を振られる心配もなし、夜の目も樂に寝られるといふものだ。どうだ得心か  
……黙つて返事をせぬのは嫌と吐すのか」  
高「イエイエ、決して決して決して嫌とは申しませぬ、夫のためになる事なら、どんな  
事でも命を的に決行して御覽に入れませう、サア早く船をつけて下さい」  
妖幻坊は「お手並み拜見」と言ひながら、梅公別の上陸した地點に引返し見れ  
ば、梅公は二人の様子の唯ならぬに氣を揉み、萬々一大喧嘩でも湖上でおつ始め  
よつたら、忽ち湖中に飛び込み二人の危急を救はむと、じつと様子を見てゐたの  
である。雲突くばかりの妖幻坊は高姫と共に上陸し、  
妖「そこにゐる青二才奴、この方の言ふ事をよつく承れ、吾こそは齋苑の館の總  
務を勤むる時置師の空助だ。この方は照國別のへボ宣傳使の草履持ちをいたす木

端野郎だらうがな。俺の女房と慇懃を通じたとかいふ話だが、今日は大目に見ておくから、以後は必ず慎んだが宜からうぞ」  
梅「ヤ、あなたが噂に高き時置師の神、空助様でございましたか、存ぜぬ事とて偉い失禮をいたしました。高姫さまと私との仲は雙方とも一度は戀慕いたしましたし、たが、未だ要領は得てをりませぬ。それゆゑ赤の他人も同様ですから、あまり貴方からお咎めを蒙るわけもございませんまい」  
妖「ハハハハハ、口は調法なものだのう、ゴテゴテ言ふにや及ばない、お前の良心に問うたら分るだらう。」

人問はば鬼は居ぬとも答ふべし

心の問はば如何こたへむ

といふ道歌を知つてゐるだらう、俺も男だ、敢て追及はしない。高が青二才の一匹や二匹つかまへてゴテゴテ言ふのは、時置師の沽券にも關するから、寛大の處

置を取つて不問に付しておく、有難う思へ」

高「もし梅公別様、時置師の神様はああ仰有つても、決してお前さまを憎むやうな方ぢやないから、悪く思はないやうにして下さい。しかし「あたゐ」に戀慕したつて駄目ですから、その點は固く堅く注意しておきますよ。お前さまも宣傳使の卵ださうだから、一つ手柄初めにこの魔の森に落ち込んで苦しんでゐる男女の命を救けておやりなさい。さうすれや空助さまの怒りもとけ、お前さまの手柄も立つといふもの、どうぞです。一つ俠氣を出して決行する氣はありませぬかな」

梅公別は言靈別の化身で、高姫や妖幻坊の正體を感じしないはずはない。さうして魔の森に高姫に誑かされ、二人の若き男女が蟻に責められ蜘蛛の絲にまかれ苦しんでゐる事は、既にすでに常磐丸の船中において透視してゐるのである。それゆゑに梅公別は兩人を救ふべく、小舟を操つて一人此所に上陸したのである。梅公別は早速鎮魂の神業を魔の森に修し、強き神靈を送つてゐたから、蜘蛛も蟻も如何する事も出来ないのを知つてゐた。それゆゑ泰然自若として妖幻坊、高姫の船中の争ひを見物してゐたのである。いま高姫が俠氣を出して二人の男女を救

へと言つた心の奥底は、梅公別をあゝの蟻の魔の森に飛び込みしめ、喰ひ殺さしめむと企んでゐる事もよく承知してゐた。それゆゑ梅公別は二つ返事で承諾し、妖幻坊、高姫の目の前で泰然自若魔の森へ飛び込んでしまつた。妖幻坊、高姫は両手を拍つて高笑ひ、竹藪の入口に進みよつて腮を突出し尻を叩き、あらゆる罵詈訾を嘲笑を逞うし「ゆつくりお喰ねなれ」と捨臺詞を残し、再び船に身を任せ、何處ともなく浮かび行く。

梅公別は無事に二人を救ひ出し、暫し大銀杏の根下に腰打ちかけ、種々の成行き話を二人より聞き取りながら三人一つの小船に身を任せ、スガの港をさして進み行く。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一五・六・二九 舊五・二〇 於天之橋立なかや旅館 加藤明子録)

常磐丸の船中における玄眞坊、コブライ、コオ口の直接行動的争ひも無事に済んで、船端に鼓の波を打たせながら水上静かに迂り行く。船中の無聊を慰むるため、彼方此方に面白き國の俗謡が聞こえて来た。中にも最も著しきは恵比須祭の歎乃である。船頭は舷頭に立ちながら海に馴れたる爽かな聲で、節面白く唄ひ出した。

正月の朔日二日の初夢に  
如月山の楠の木を

舟に造り今おろす  
白銀柱押し立てて

黄金の富を積みませつつ  
綾や錦を帆にかけて

寶の島へと乗り込んで  
數多の寶を積み込んで

追手の風に任せつつ  
思ふ港へ馳せ込んで

これのお倉に納めおく  
ヨーンデーヤール

神の昔の二柱  
金輪際より揺るぎ出でたる此の島を

自轉倒島と言ふとかや  
山には常磐のいろいろ



黄金白銀花咲いて  
お山おろしが吹くとても

散らぬ盛りに國々は  
浦々までも豊かにて

五穀草木不足なく  
七珍萬寶倉に満ち

とざさぬ御代の恵みより  
長命無病と聞くからは

四方の國より船寄する  
綾や錦の下着より

縞に木綿の紅までも  
唐に大和を取りまぜて

商ふ店の賑やかさ  
獵漁りの里々は

山に雉鴨鶴もある  
裏の港の磯つづき

あけて恵比須の浪鹽は  
ヤンサ目出たやお鉢水

ヨーンデーヤール

玄眞坊はこの歌を聞いて飛び上り、自分も一つ負けぬ氣になり、貧弱な頭から、こぼれ出した歎乃は一寸變【ちきちん】なものである。

春の海面よく光る

大島小島数々と

碁石のやうに竝ぶ中

海賊船が右左

彼方此方と横行し

寶を積んだ船見れば

一目散にやつて来て

否應言はさずぼつたくり

ゴテゴテ言へば命まで

貰つて歸る凄い船

こんな手合に出會つたら

ヨーン デー ヤール

金鎚さまの川流れ

一生頭が上るまい

俺も昔は山賊の

大頭目と手を組んで

オーラの山に天降り

杉の梢をからくり

數多の火影を輝かし

天から星が下りまし

天帝の御化身救世主

玄眞如來の説法を

聽聞なさると觸れ込ませ

あなたこなたの村々ゆ

善男善女を誑かし

もう一息といふ處へ

三五教の梅公別

女房をつれて出で來たり

ふたり をんな 二人の女ともるともに

たこ あ 蛸の揚げ壺喰はされた

げ か 實にも甲斐なき蛸坊主

いま おも 今から思へば恐ろしや

てんち かみがみ ヨウマア天地の神々は

あくそつ おも この悪僧をいつまでも

い くだ 生かしておいて下さつたと

おも めうが 思へば冥加がつきるやうだ

ヨーン デー ヤール

あちら さんびやくにん 彼方こちらとさまよひつ

こと たく よからぬ事のみ企らみて

さんびやくにん ふりやうぶんし 三百人の不良分子

あちら こちら 彼方此方に振り向いて

じぶん ひとり 自分是一人タニグクの

やま いはや 山の岩窟にダリヤ姫

せしめん つ 物と連れ込めば

もぬ から 藻脱けの殻の馬鹿らしさ

いよいよ か それから愈【やけ】となり

かみたにむら りしやう 神谷村の里庄なる

たまきよわけ やかた 玉清別の館にと

しの こ 忍び込みたるダリヤをば

つば かへ 奪ひ返して吾が妻に

むりわうじやう おも 無理往生にせむものと

おも みづ 思ふたことも水の泡

わる こと まだまだ悪い事ばかり

おも だ やつて来たこと思ひ出しや

ぜんしん くま 全身隈なく冷汗が

ゆふだち わ 夕立のごとくに湧いて来る

ヨーン デー ヤール 今乗る船は常磐丸

齋苑の館の神様の御用を遊ばす宣傳使

照國別の師の君に 危ふき所を助けられ

心の底から立直し お伴に仕へ侍り行く

ヨーン デー ヤール サアこれからはこれからは

心の基礎をつき直し 神に刃向かふ仇あれば

鬼でも蛇でもかまはない 命を的に飛び込んで

今まで悪を盡したる その補ひをせにやならぬ

アア面白や面白や 面白狸の腹鼓

打つ波の上をスクスクと 狸坊主の蛸坊主

人が笑はうが誇らうが そんな事には構はない

これから世間に恥さらし 自分の罪の償ひを

天地の神にせにやならぬ 玄眞坊もこれからは

三五教の宣傳使 神の司の僕とし

一生此世を送りませう

ダリヤの姫やその外の

美人のことは思ひきり

一生懸命に神様の

誠の道を傳へませう

ヨーン デー ヤール

ああ惟神々々

神は吾等と共にあり

人は神の子神の宮

神に任せしこの體

虎狼も何かあらむ

上下揃うて世を圓く

治むる時をまつの世の

彌勒菩薩の再來と

仕へまつらむ齋苑館

神素盞鳴の大神の

御前に誓ひ願ぎ奉る

御前に誓ひ願ぎ奉る

ヨーン デー ヤール

盛んである。ちやうど常磐丸の着いたころ、網引きが始まつてゐた。この港には鰹の漁が  
常磐丸は漸くにして翌日の眞晝ごろスガの港に安着した。この港には鰹の漁が  
憂さを慰むるため漁師に頼んで引網の中に加はり、ともに面白可笑く歌をうたふ

こととなつた。

幾艘いくさうの船ふねは網あみの周圍まはりに集たかつて音頭おんどうをとりながら陸上りくじやうに向むかつて網あみを引ひき上あげる。  
親船おやぶねが先まづ歌うたの節々ふしぶしの初はじめを謠うたふと、他たの船ふねの漁師れふしたちはこれに和わして後あとをつぎ、  
以もつて力ちからの緩急くわんきふを等ひとしくする、その調子てうしはちやうど木遣節きやりぶしのやうである。

「せめて此この子こが男をとこの子こなら

權かいを持もたせて

ホラ ホーオ サツサア ヤツチンエエ

イヤンホ サツサー ヤツチンエエ。

スガは照てる照てる太魔たまの島曇しまくもる

あいの高山たかやま雨あめが降ふる。

大高おほたかお岩いはは二ふたつに割われて

割われて世よがよいヨヤハアサツサ。

引ひけよ若衆わかしうきれ否いな加勢かがせ

十二船魂勇ませて。

旦那大黒内儀さま惠比須

中の子供がお船魂。

船の艦艫へ鷺とめて

明日は大漁と鳴かせたい。

船は新造でも艫は新木でも

船頭さまが無けれや走りやせぬ。

ホラ ホーオ サツサ ヤツチンエエサツサ

ヤツチンエエ ヨイヤハアサツサ

照國別『これ照公さま、何と面白い綱引ぢやないか、澤山の船頭衆が黒いお尻を  
出し、眞裸の眞跣で黒い鉢巻を横ンチヨに絞めて、大きな網を海上一面に張り廻  
し、言靈を一齊に揃へて鯉を上げる處は何ともいへぬ壯觀の感に打たれるぢやな  
いか』

照公別「いかにも師の君の仰せの通り、壯絶快絶の極みですな。吾々宣傳使も、この引網に倣つて一遍に少なくとも數萬人の信者を引き寄せ、うまく宣傳をやつたら面白いでせうな。どうです先生、これからスガの町へ行つたら、大公會堂でも借り込んで、數萬の町民に一度に聽かせてやつたら、大神の神徳に浴する信者が澤山に出来るかも知れませぬ。勞少なくして效多き、最も文明式の方法ぢやありませんまいか」

「イヤイヤさうではないよ、公會堂なんかは神の道の宣傳には絶対に適しない。公會堂は政治家や主義者の私淑する處だ、そんな處で神聖な神様の教をしたところで、身魂に相應しないから、勞多くして功無しだ」

「そんなら先生、劇場は如何でせうか」

「なほなほ不可ない、劇場は遊覽客の集まる處だ。歌舞伎や淨瑠璃や浪花節、手品師、活動寫眞等やる處で、たとへ聽衆が幾らやつて來ても、遊山氣分で出て來るからチツとも耳へ這入らない。却つて神の御名を傷つけるやうなものだ」

「なるほど、さう聞けば仕方がありませんな、そんなら學校の講堂は如何でせう



か  
□

□ 學校の講堂は學問の研究をする處だ。深遠微妙な形而上の眞理や信仰は、たうてい學校の講堂で話したところで駄目だ。何人も研究心を基礎として聞くから、何人も眞の信仰には入れないよ。青年會館だの俱樂部だの公會堂だの、民衆の集まる處は凡て駄目だ。夜足で捕つた魚や網で捕つた魚は、同じ魚でも味が悪い。一匹一匹釣の先に餌つけて釣り上げた魚は味が良いごとく、神の道の宣傳は一人對一人が相應の理に適うとるのだ。やむを得ないなら五六人は仕方がないとしても、それが却つて駄目になる□

□ なるほど、さうすると仲々宣傳といふものは、容易に擴まらないものですな□  
□ 一人の誠の信者を神の道に引き入れた者は、神界においてはヒマラヤ山を千里の遠方へ一人して運んで行つたよりも、功名として褒めらるるのだからなア□  
□ さうすると先生は入信以來、どれくらみ誠の信者をお導きになりましたか□  
□ 残念ながら、未だ一人も誠の信者を、ようこしらへてゐないのだ□  
□ へーエ、さうすると、梅公別や吾々は宣傳使の試補となつて廻つてゐますが、

まだ信者の數には入つてはゐらないのですか」

「マアそんなものだな」

「何と心細いものぢやありませんか」

「さうだから心細いと何時も言ふのだ」

「この玄眞坊さまはさうすると、まだ信者の門口にも行かないのでせうね」

「ヤアこの玄眞坊殿はずるぶん悪い事も行つて來たが、お前に比べては餘程信仰

が進んでゐるよ、すでに天國へ一步を踏入れてゐる」

「それや又どうしたわけですか。吾々は未だ一度も大した嘘もつかず、泥棒もせ

ず嬢舎弟もやらず、正直一途に神のお道を歩んで來たぢやありませんか。それに

何ぞや大山子の張本、勿體なくも天帝の御名を騙る曲神の權化ともいふべき行爲

を敢てした玄眞坊殿が天國に足を踏込むとは、一向に合點が行きませぬ」

「大なる悪事を爲したる者は悔い改むる心もまた深い。眞劍味がある。それゆゑ

身魂相應の理によつて、直ちに掌をかへすごとく地獄は化して天國となるのだ。

沈香も焚かず庇も放らずといふ人間に限つて、自分は善人だ、決して悪い事はせ

ないから天國てんごくに上のぼれるだらうなどと慢心まんしんしてゐると、知らず識しらずに魂みたまが墮落だらくして地獄ぢごくに向かふものだ。悪い事わるいことをせないのは人間にんげんとして當然たうぜんの所業しよげふだ。人間にんげんは凡すべて天地經綸てんちけいりんの主宰者しゆさいしやだから、此世このよに生うまれて來た以上いじやうは、何なんなりと天地てんちのために神かみに代かはるだけの御用ごようを勤つとめ上げねばならない責任せきにんをもつてゐるのだ。その責任せきにんを果はたす事ことの出來ない人間にんげんは、たとへ悪事あくじをせなくとも、神かみの生宮いきみやとして地上ちじやうに産うみおとされた職責しよくせきが果はたされてゐない。それだから身魂みたまの故郷ふるさとたる天國てんごくに歸かへることが出で來きないのだ。』

照公てらこう 『天國てんごくに吾わが魂たま在ありと思おもひしに

地獄ぢごくに向かへる事ことの歎うたてさ

今いまよりは心こころの駒こまを立直たてなほし

神かみの任よさしの神業みわざ勵はげまむ』

玄眞げんしん 身みはたとへ根底ねそこの國くにに沈しづむとも

神かみの惠めぐみは忘わすれざるらむ

照國てるくに 千早ちはや振ふる神かみの惠めぐみは世よの人の

夢ゆめにも知しらぬ處ところに潛ひそむ

暗やみの夜よを照てり明あかさむと宣傳せんでん使し

よさし玉たまひぬ瑞みづの大神おほかみ

(大正一五・六・二九 舊五・二〇 於天之橋立なかや別館 北村隆光録)

第二篇 空迂拙婦もくうせつぷ

第八章 街宣〔一八一七〕

スガの港みなとに名なも高たかく  
百萬長者ひやくまんちやうじやと聞きこえたる

藥種問屋やくしゆどひやの主人しゆじんのアリス  
金かねと血氣けつきに任まかせつつ

強欲非道がうよくひだうのありたけを  
盡つくして人ひとの生血いきちをば

絞しほらむばかりの惡逆あくぎやくに  
遠とほき近ちかきの隔へだてなく

老若男女らうじやくなんによは聲々こゑこゑに  
鬼おによ大蛇をろちよ惡魔あくまよと

譏そしらぬ者ものこそなかりけり  
金かねと塵ちりとは澤山たくさんに

積つもれば汚きたなくなる譬たとへ  
出だすことなれば手ても舌したも

只ただでは出ださぬ強欲がうよくさ  
取とり込こむ事ことなら牛うしの骨ほね

犬いぬのそれでもかまやせぬ  
人ひとの恨うらみの金かねばかり

積つんで山やまなす塵ちりの峰みね  
親爺おやぢの罪つみが子こに報むくい

終つひにはダリヤの行衛ゆくゑさへ  
分わからずなりて遠とほにも

親子の情けのいや深く

忘れかねてか煩悶の

吐息つくづく病床に

呻吟する身となりけり

二男のイルクは妹の

所在を求めて遠方近方と

探ね廻りし折りもあれ

船の中にて出會し

三五教の神司

梅公別に助けられ

初めて神の道を聞き

妹引きつれ宣傳使

一行と共に吾が家路

いそいそ指して歸り來る

待ちに待ちたる父アリス

娘の無事を聞くよりも

喜び勇み狂ひ立ち

手の舞ひ足の踏むところ

知らず白髪之首ふりて

悲喜交々の爲態

梅公別の懇篤な

教の道の宣傳に

鬼のアルスも改心し

財産全部を大神に

捧げ奉りてスガ山の

老木茂れる聖場に

天地の神の鎮座ます

大宮柱太知りて

今いままで犯をかせし罪つみ科がの

贖あがなひとなし一つひとには

あらゆる世界せかいの民草たみぐさが

悪魔あくまの教をしへに惑まどはされ

憂うき瀨せに落おちて苦くるしめる

その惨状さんじやうを救すくはむと

決心けつしんしたるぞ殊勝しゆしやうなれ

梅公別うめこうわけは一夜ひとよの

假かりの宿やどりをなさむとて

夕飯ゆふげを終をはりし折をりもあれ

夕たラハじやうン城そらの空たか高く

雲くもを焦こがして燃もえ上あがる

大火たいくわの模も様やうを見みるよりも

後あとをヨリコはなや花な香か姫ひめ

二人ふたりに任まかせおきながら

栗毛くりげの駒こまに鞍くらおいて

威風凜々あふうりんりん大野原おほのほら

駒こまの嘶いななき鈴すずの音おと

ヒンヒンシヤンシヤンドウドウト

雲くもを霞かすみと驅かけて行くゆく

ああ惟かむ神な々々ながら

御靈みたま幸さちはへましませよ

神かみの教をしへにヨリコ姫ひめ

瑞みづの靈みたまの花はな香かる

月つきと花はなとの二人ふたり連れ

梅公別うめこうわけの旨むねを受け

スガの町々まちまち辻々つじつじを

白妙しろたへの衣きぬ纏まとひつつ

連錢葦毛の駒に乗り  
法螺貝吹き立て人集め

やさしき花の唇を  
静かに開き手をあげて

鞍上にすつくと立上がり

ヨリコ<sup>コ</sup>スガの港に住みたまふ  
老若男女の皆様よ

三千世界の救世主  
神素盞鳴の大神の

瑞の靈の御教を  
女ながらもお取次

致しますれば村肝の  
心静かに聞き召せ

そもそも此世は天地の  
元津祖なる生神が

ただ一柱坐し在して  
日月火水木金土

森羅万象創造し  
かつ人間を神様と

同じ形に造りまし  
嚴と瑞との精靈を

各自に宿しまし  
天と地との經綸に

仕へしめむとなし給ふ  
人の體はかくのごと

實にも尊きものですよ  
それをも知らず人間は



この世よに生うまれ來きた上うは 飲のめよ歌うたへよ寢ねよ起おきよ

お金かねがあれば酒さけ飲のんで 歌舞音曲かぶおんぎよくに戯たはむれる

これより外ほかに人生じんせいの 目的更もくてきさらにないものと

誤解ごかいしてゐる哀あはれさよ これこれで人生じんせいの本ほん分ぶんが

盡つくしをへたといふならば 人ひとは獸類けものと同じこと

萬よろの物ものの靈長れいちやうと どうして名な附づけられませうか

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや 尊たふとき神かみの宿やどとして

造つくらせ玉たまひしものなれば 衣食住居いしよくぢうきよその外ほかに

尊たふとき務つとめがなければならぬ そのまた尊たふとき神業しんげふは

如何いかにと言いはば人間にんげんは 天地てんちの神かみの御おんために

有あらむ限かぎりの赤心まごころを 盡つくし奉まつりて道みちのため

天國淨土てんごくじやうどの圓滿ゑんまんを はからむために靈魂れいこんの

魂たまをば研みがき開ひらかせつ この世よに住すめる同胞どうほうを

八衢地獄やちまたぢごくの境遇きやうぐうより 救すくひ出いだして天國てんごくの

常磐堅磐の花園に

導き渡す宣傳使

御伴に仕へ奉りつつ

その神業の一端に

仕へ奉るぞ人として

最大一の務なり

ああ惟神々々

御靈幸倍へまませよ

神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

ただ何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

世の過ちは宣り直せ

これぞ全く三五の

神の教の御言葉ぞ

敬ひ奉れ百の人

諾なひ奉れよ惟神

神の教に嘘は無

一二三つ四つ五つ六つ

七八九つ十百千

萬の國の民草を

一人も残らず三五の

神の教に導きて

天地にかはる大業を

盡さにやおかぬ神の御子

ヨリコの姫や花香姫

今<sup>いま</sup>まで犯<sup>をか</sup>せし罪<sup>つみ</sup>科<sup>とが</sup>の  
仕<sup>つか</sup>へむたための宣<sup>せんでん</sup>傳<sup>か</sup>歌<sup>か</sup>  
聞<sup>き</sup>かせたまへよ人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>よ  
偏<sup>ひとへ</sup>に祈<sup>いの</sup>りおきまする』

その贖<sup>あがな</sup>ひの一端<sup>いつたん</sup>に  
心<sup>こころ</sup>平<sup>ら</sup>らに安<sup>やす</sup>らかに

シヤンコシヤンコ シヤンシヤン シヤンコシヤンコ シヤンシヤン

馬<sup>うま</sup>の蹄<sup>ひづめ</sup>も夏<sup>か</sup>々<sup>かつ</sup>と  
手<sup>たづ</sup>綱<sup>な</sup>引き締<sup>し</sup>め鞭<sup>むち</sup>をあて

隣<sup>となり</sup>の町<sup>まち</sup>を指<sup>さ</sup>して行<sup>ゆ</sup>く  
梅<sup>うめ</sup>公<sup>こう</sup>別<sup>わけ</sup>に救<sup>すく</sup>はれし

梅<sup>うめ</sup>の花<sup>はな</sup>香<sup>か</sup>の宣<sup>せんでん</sup>傳<sup>か</sup>使<sup>し</sup>  
未<sup>ま</sup>だ稱<sup>しょう</sup>號<sup>ごう</sup>は無<sup>な</sup>けれども

世<sup>よ</sup>人<sup>びと</sup>を導<sup>みちび</sup>き救<sup>すく</sup>はむと  
思<sup>おも</sup>ふ心<sup>こころ</sup>は紅<sup>くれなゐ</sup>の

紅<sup>もみぢ</sup>葉<sup>は</sup>の照<sup>て</sup>れる如<sup>ごと</sup>くなり  
ヨリコの姉<sup>あね</sup>に從<sup>したが</sup>ひて

馬<sup>ば</sup>上<sup>じやう</sup>豊<sup>ゆた</sup>かにスガの町<sup>まち</sup>  
上<sup>うへ</sup>から下<sup>した</sup>まで和<sup>にぎ</sup>妙<sup>たへ</sup>の

美<sup>び</sup>々<sup>び</sup>しき宣<sup>せんでん</sup>傳<sup>か</sup>服<sup>ふく</sup>着<sup>つ</sup>けて  
本<sup>ほん</sup>町<sup>まち</sup>通<sup>どほ</sup>りの十<sup>じふ</sup>字<sup>じがい</sup>街<sup>がい</sup>

駒<sup>こま</sup>を留<sup>とど</sup>めて鞍<sup>あん</sup>上<sup>じやう</sup>に  
スツクと立<sup>た</sup>ちしスタイルは

三<sup>さん</sup>十<sup>じふ</sup>二<sup>に</sup>相<sup>さう</sup>を具<sup>ぐ</sup>備<sup>び</sup>したる  
聖<sup>しやう</sup>觀<sup>くわん</sup>音<sup>おん</sup>の生<sup>いき</sup>姿<sup>すがた</sup>

知<sup>し</sup>らず識<sup>し</sup>らずに町<sup>まち</sup>人<sup>びと</sup>は  
兩<sup>りやう</sup>手<sup>て</sup>を合<sup>あ</sup>せ伏<sup>ふ</sup>し拜<sup>をが</sup>み

生神様の御出現 如來の來降と喜びて

二人の前に寄り集ひ 蟻の這ひ出る隙もなく

人山築きし勇ましさ 花香は優しき聲を上げ

飽まで白き白魚の 優しき右手をさし上げて

花香 『ああ惟神々々 神が表に現はれて

誠の道を説き諭す 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも たとへ大地は沈むとも

曲津は如何に荒ぶとも 誠の力は世を救ふ

ああ惟神々々 御靈幸倍ましませよ

三五教の宣傳使 梅公別の神司

雲のごとくに降りまし 吾等二人の姉妹に

いとも尊き福音を 傳へ玉ひし嬉しさに

曇りし靈も澄みわたり 央ば身失せし魂は

高天原に甦り 再び花の咲く春に

遇へる心地の今日の旅　この嬉しさは言の葉に  
 かけて語らむ術もなし　かくも尊き御教を  
 一人の物となさずして　數多集へる皆様に  
 千別に千別き奉り　その喜びと樂しみを  
 共にせむとの吾が願ひ　いと平らけく安らけく  
 聞こし召さへと宣り奉る　バラモン軍に名も高き  
 大足別の軍勢が　トルマン城下に押し寄せて  
 民を塗炭の苦しみに　おとし入れむとする最中  
 見るに見兼ねて背の君の　梅公別の宣傳使  
 駒に鞭うち大野原　進ませ玉ひし留守の中  
 不束ながら女身を　かりて雨風苦にもせず  
 世人のために宣傳の　道に上つた次第です  
 詳き事が聞きたくば　スガの目抜の薬屋の  
 アリスの宅にお出でなさい　ああ惟神々々

恩頼みたまのふゆを賜たまへかし  
駒こまの嘶いななき鈴すずの音おと　　いと勇いさましく大道おほみちを  
緩歩くわんぼしながらスガの町まち　　目拔めぬきの場所ばしよと聞きこえたる  
百萬ひやくまんちやうじや長者くすりやの薬屋おせての表さを指さして歸かへり行ゆく  
ああかむながらかむながら惟神々々　　御靈みたまさち幸さちはへましませよ。

(大正一五・六・三〇　舊五・二一　於天之橋立なかや旅館　加藤明子録)

第九章　缺戀坊かくれんぼう〔一八一八〕

吾わが子この行衛ゆくゑは如何いかにぞと　　待まち焦こがれたる父親てておやの  
アリスの親爺おやぢは兩人りやうにんが　　三五教あななひけうの梅公別うめこうわけ

神かみの司つかさに送おくられて

二人ふたりニコニコ歸かへりしゆ

狂喜きやうきのあまり逆上さかし

いよいよ病やまひは重おもりつつ

頭痛あたまいたむと言いひながら

財産ざいさん全部ぜんぶを投なげ出だして

奥おくの間ま深く隠かくれけり

ダリヤの姫ひめは驚おどろいて

戀こひしき父ちちの病やまひをば

癒いやさむためにスガ山やまの

山王さんわう神社じんじやに夜密よるひそか

忍しのび忍しのびに參詣まゐまうで

眞心まごころ籠こめて祈いのりある

時ときしもあれや薄暗うすやみを

ばかして又またツと現あらはれし

白髮はくはつ異様いやうの物影ものかげは

祠ほこらの前まへに悠々いういうと

近ちかより來きたり嚴おごそかに

聲こゑを静しづめて告つぐるやう

吾われは尊たふとき三五あななひの

瑞みづの柱はしらと聞きこえたる

神素かむすさ盞さ鳴の尊みことぞや

汝なんぢの家いへは昔むかしより

スガの港みなとに隠かくれなき

百萬ひやくまん長者ちやうじやと聞きこえたる

萬よろづの民たみの怨府えんぷぞや

その罪つみ今いまに報むくい來きて

汝の母は逸早く この世の中ゆ身を隠し

ある山里へ救はれて 細き煙を立てながら

尼僧生活營みつ 汝が家の冥福を

祈りあるこそ憐れなる しかのみならず汝が父の

アリスは今や重病に 罹りて生命危篤なり

この難關を恙なく 切り抜けなむと思ふなら

吾の教に従ひて 大谷山の谷間に

神代の昔ゆ降り在す 榮えの神の御前に

一日も早く詣で見よ 吾は汝の案内して

人目を忍び夜の道 助け行かなむダリヤ姫

答いかにと嚴かに 宣ればダリヤは首傾げ

怪しみながら言葉なく 思案にくれてゐたりしが

パツと輝く火の光 ハツと驚き眺むれば

又もや火影はパツと消ゆ この不思議なる出來事に



ダリヤの心は動きつつ 心定めて答へらく

神素盞鳴大神か 山王神社の御化身か

妾にや少しも分らねど 人間離れのしたお方

たとへ鬼神であらうとも かかる妙術ある上は

如何なる願ひもスクスクに 叶はせ玉ふ事ならむ

御身の後に従ひて 何處どこまでも参りませう

導き玉へ〆と手を合す 神素盞鳴の大神に

化けたる妖僧はオーラ山 岩窟の中に立籠り

善男善女を歎きて 謀反を企みし玄眞坊

偽天帝の化身なる 偽の救主の成れの果

山子坊主と知られたり 玄眞坊は胸の裡

雀躍りしながら言霊も いと莊重に宣らすらく

善哉善哉ダリヤ姫 汝の母は三年前

この世を已に去りし如 思ひをれども左にあらず

吾が眷族を遣はして 墓場の土を掘り出し

甦生らせて山奥に 庵を結び隠しあり

まづ第一に汝が母に 面會させたその上に

汝が父の重病を 救はむための吾が仕組

従ひ來たれ」と言ひながら 暗の山道スタスタと

ダリヤの姫の手を引いて 人跡稀なる大野原

怪しき聲を絞りつつ 般若心經波羅蜜經

普門品まで唱へつつ 夕ラハン城下をさして行く。

ダリヤ姫は稀代の賣僧、オーラ山の惡黨玄眞坊とは夢にも知らず、吾が家にヨリコ姫、花香の逗留しをる事も忘れてしまひ、死んだと思つた母上は、ある山奥に生きてゐますと聞きしより虚實を調ぶる餘裕もなく、この妖僧を神素盞鳴の神の化身と深く信じて、夜陰にまぎれ夕ラハン城下を指して出て來たのである。玄眞坊は口から出任せの事を言つて噂に高い藥屋の娘をこの美人をうまく、ちよる

まかして自分に靡かせ女房に爲しおかば、百萬長者の財産は二人の兄はあつても、そこは何とか、彼とか文句をつけ、自分が一人のものにせむと色と欲との二道かけ、此處までつり出して來るは來たものの、さて何處へ連れて行かうか……と心の裡に惱んでゐた。

タラハン川の岸に沿ひたる常磐木の、かなり廣い森林がある。この森林は一方は川邊の事とて、千疊敷の岩が竝んでゐた。二人はこの岩の上に座を占め、川の流れを眺めながら休息した。

ダリヤ「モシ、大神の化身様、母の居ります山はどの方面でございますか、一寸お知らせ下さいませ」

玄眞「ウンウンヨシヨシ、エー……コーツト……あの峰がエー高満山、それから、その向かふが、エー岸山、川竝山、エー、その向かふがタニグク山、ウンあのタニグク山の一寸後ろに、コバルト色に霞んである峰が見えるだらう。あれが大谷山といつて、あの麓に、何でエー、汝のお母さまが居られるのだ。そして、其處に榮えの神様の祠がある。その神様が願ひ事を何でも聞いて下さるのだ。今そこ

へ案内しやうが、何分道が悪いから、お前も難澁すると思つて、休み休み行くことにしたのだ」

「何とマア高い山でございませうこと、まだ彼處までは大分道程がございませうね」

「さうだ、一寸三十里ばかりあるだらう、女の足弱を連れて行くのだから、先づ

三日はかかる事と思はねばならぬ」

「アア左様でございませうか、たとへ三日が十日ぐらゐかかつてもお母さまに會へ

たり、お父さまの病氣が癒えましたら一寸も厭ひませぬ。どうかお願ひ申します」

「これ、ダリヤさま、お前は俺を本當の神の化身と思つてゐるか、それとも賣僧

坊主だと思つてゐるか、本當の事を聞かしてもらひたいものだな」

「ハイ、大神様の御化身にしてはチツとばかり……かう申すとすみませぬが、お

軽いやうでもあり、俗人にしては凡ての點に秀でてござるなり、山子坊主では到

底出来ない妙術を持つてござるなり、とても妾のごとき凡眼では龍の片鱗でも掴

むことが出来ませぬ。たとへ山子坊主にしたところで、暗夜に體から光を出した

り、四邊を輝かしたりなさる御神徳を持つたお方ゆゑ、お言葉に従つておけばキ

ツと望みを叶へて下さるだらうと信じまして、御案内を願つたのでございます」  
「ハハアなるほど、其方はよほどの才媛だ。拙者を神の化身と信じて跟いて來たのならば、一向面白くないが、たとへ山子坊主にもせよ、不思議の術を有つてゐるその點に憧憬して、跟いて來たとあれやますます頼もしい。それぢや一つ何もかも打明けて言ふが、拙僧こそは天帝の化身、天來の救世主、天下一の名僧知識と自稱する智謀絶倫の英僧だ、否マハトマの聖雄だ、どうぢやダリヤ姫殿、驚いたであらうなア」

「ホツホホホ、まるつきり、オーラ山の玄眞坊見たいなお方ですな」  
「オーサ、さうぢや、拙僧こそはオーラの山に年古く住む大天狗の化身、玄眞坊でござるぞや」

「ホツホホホ、何とマア、えらい馬力ですこと、大變なメートルが上つてゐますよ。さうすると玄眞さま、お前は美人と見れば岩窟へ引張り込んで、否應なしに獸欲を遂げる淫亂上人でせう。母上に會はしてやらうなんて、うまく妾を騙かし、何處の岩窟へ連れ込む算段でせうがなア。もうこれから御免を蒙ります。たとへ

烏からすにこつかせても賣僧坊主まいすぼうずさまにやこつかせませぬワ。エー、マーマア、人ひとを馬ば鹿かにして下くださつた。今時いまどきの女をんなに、そんな偽いつはりを喰くふ馬鹿ばかはございませぬよ。口惜くやしいと思召おほしめすなら、目めなつと噛かんで死しになさい、左様さやうなら」  
と捨臺詞すてげりふを残のこし逃げ出ださむとした。玄眞坊げんしんぼうは、ヒューヒューと口笛くちぶえを三四回さんしくわい吹ふくや否いなや、七八人しちはちにんの覆面ふくめんした荒男あらををとこ、森もりの茂しげみより現あらはれ來きたり、手てとり足あしとり否應いなおう言いはさず、玄眞坊げんしんぼうと共に野中のなかの道みちをトントンと、タニグク山やまの方面目ほうめんめがけて擔かつぎ行ゆく。

スガの港みなとのアリスの宅うちでは、ダリヤ姫ひめが山王さんわうの森もりに夜中やちう參拜さんぱいした限きり、夜明よあけになつても歸かへつて來こないので、門番もんばんのアル、エスに命めいじスガの山やまの木この間まを隈くまなく搜索そうさくせしめたが、いくら探さがしても、影かげも形かたちも見みえぬのに力ちからを落おとし、その日ひの日ひの暮くれごろ、青あをい顔かほして歸かへつて來きた。兄あにのイルクはこんな事ことを重病ぢゆうびやうの父ちちに聞きかしではまますます病やまひが重おもるばかりと、召使めしつかひどもによく言いひ聞きかせ、病父びやうふのアリスにはダリヤ姫ひめの事ことは少しも話はなさないことに口止くちどめをしてしまった。イルクはヨリコ姫ひめ、花香姫はなかひめの居間ゐまを訪たづね、

「モシ、ヨリコ姫様、最早お寢みでございますか、夜分遅くお邪魔いたしますが」と伺へば中より、優しきヨリコ姫の聲、

ヨリコ「ハイ、未だ寢んでをりませぬ。さういふ聲はイルクさまでございますか、まづまづお這入り下さいませ。妹は宣傳の草臥で已に寢んでをりますが、お構ひなくお這入り下さいませ」

イルク「ハイ、有難う、然らば御免を蒙ります。エー突然ながら、一寸お智慧を貸して貰ひに参りました。といふのは外でもございませぬ、妹のダリヤ姫が昨夜半頃、父の重病を苦しめて、スガ山の山王の祠に参拜いたしました限り、今朝になつても歸り来ず、私も非常に心配をいたしましたして門番のアル、エスを遣はし、山中隈なく搜索をさせましたが、呼べど叫べど何の音沙汰もなしの礫、日の暮頃力なげに歸つて参りました。もしや悪者にでも拐されたのぢやございませぬまいかなア」

「ヤ、初めて承り實に驚きました、さぞさぞ御心配でございませう。妾は未だ靈眼が開けてをりませぬので、何うの、かうのといふお指圖も出来ませぬが、コレ

ヤ、キツと悪い奴に誑され、何處の山奥へ連れて行かれたのでせう。然しながら必ず御心配なさいますな、神様のお守護ある以上は滅多の事はありませぬからなア」

「左様でございませうかね、せつかく梅公別の宣傳使様に助けられたと思へば、また悪者に攫はれるとは、よくよく運の悪い妹でございませう」  
と男泣きに泣く。今までスヤスヤ眠つてゐた花香はフツと目を醒まし、  
「アア姉さまですか、いやイルク様、ようお出でなさいませ。貴方のお出ましも知らずウツカリと寝てしまひまして、エライ失禮いたしました。ダリヤ姫さまの行衛について、御相談してゐられますやうですが、必ず御心配なさいますな。ダリヤ様は屹度二ヶ月の後にはお歸りになります。妾はいま夢を見ましたが、あのオーラ山に立籠つてをつた玄眞坊に拐され、何處かの山奥へ連れ行かれ、玄眞坊は自分の女房にしようとして、いろいろと骨を折つてをりますが、ダリヤ姫様は決して彼に汚され給ふやうな事なく、立派な人に送られてお歸りになつた夢を見ました」



イル「ヤア、そのお夢はキツと正夢でございませう、六十日といへば長いやうで  
すが直ぐに經ちます。どうか其時まで父が生きてをつてくれれば宜しいがな」  
ヨリ「一切を神様に任したお父上、たとへ御病氣でもお命に別條はございませぬ。  
お宮の普請が立派に出来上がった上に、ダリヤ姫さまはお歸り、お父上は御本復  
といふ事になるでせう。お宮の出来上がりとダリヤさまのお歸りとお父上の御全  
快と「目出度目出度が三つ重なつて鶴が御門に巢をかける」といふ瑞祥がやがて  
参りませう。何事も神様にお任せして時節をお待ち下さいませ」

イルクは、

「ハイ、有難う、夜分にお邪魔致しました、何分よろしう願ひ申します  
と吾が居室さして歸り行く。」

(大正一五・六・三〇 舊五・二一 於天之橋立なかや旅館 北村隆光録)

第一〇章 清の歌〔一八一九〕

夜は久方の空高く  
輝き照らす月の國

トルマン國のスガの山  
千歳の老松苔蒸して

百鳥千鳥朝夕に  
御代を壽ぎ千代千代と

轉る聲の勇ましく  
樟の古木の梢には

鷺が出て來る巢を造る  
常磐の松の色深く

田鶴なき渡り巢をかける  
山水明媚の神の山

山王神社の御祠  
幾千年の雨風に

破れ歪めど神徳は  
七千餘國の月の國

隈なく輝き渡りけり  
ハルの海洋々と

浪を湛へて吹き來たる  
風の香りも馨く

稲麥豆粟よく實り  
牛馬羊豚駱駝

家畜一切よく育つ  
神の恵みの足ひたる

珍神國と知られける  
この國中に聳り立つ

大高山の峰續き  
スガの神山鬱蒼と

茂れる見ればトルマンの 國の榮えのほの見えて  
 神代の姿俣ばるる ヨリコの姫や花香姫  
 主のイルクと諸共に 村人多く呼び集へ  
 心の色もスガ山の 大峽小峽の木を伐りて  
 本と末とは山口の 皇大神に奉り  
 朝から晩までチヨンチヨンと 削る忌斧忌鉋  
 鋸の聲勇ましく 木を切りこなす面白さ  
 山王の宮の大前に 展開したる廣庭の  
 岩切り開き清めつつ 五色の幣を立て竝べ  
 石搗祭を始めたり 石搗祭の神歌は  
 今左に述ぶる如くなり。

石搗歌

スガの町まちの薬種問屋やくしゅどひや ヨーイヨーイ ドンと打うて

地獄ぢごくの底そこまで打うち抜ぬけよ スガの神山かみやま切り開ひらき

土つちひきならし鹽撒しほまいて 上津岩根うはついはねに搗つきこらし

下津岩根したついはねに搗つき固かため ヨーイヨーイ ドンと打うて

龍宮りうぐうの底そこの抜ぬけるまで スガの港みなとの薬種問屋やくしゅどひや

天地てんちを創つ造くり玉たまひたる 仁慈無限じんじむげんの大神おほかみが

常磐堅磐ときはかきはの御舍みあらかと 仕つかへ奉まつるぞ尊たふとけれ

ヨーイヨーイ ドンと打うて 地獄ぢごくの釜かまの割われるまで

スガの港みなとの薬種問屋やくしゅどひや ヨーイヨーイ ドンと打うて

産砂山うぶすなやまの聖場せいぢやうに 天降あもりましたる瑞靈みづみたま

神素盞鳴かむすさのをの大神おほかみの 嚴いづの御言みことを畏かしこみて

月第一つきだいいちの景勝地けいしやうち バラモン教けうやウラル教けう

神かみの司つかさが幾度いくたびも 尋たづね來きたりて求もとめたる

この聖場せいぢやうも今いまは早はや 輝かがやき渡わたる世よとなりぬ

ヨーイヨーイ ドンと打て 龍宮の底の抜けるまで

スガの港の薬種問屋 ヨーイヨーイ ドンと打て

三五教の宣傳使 梅公別の神司

オーラの山に立ち向かひ 玄眞坊やシーゴート

名も怖ろしき強賊や 賣僧坊主を言向けて

凱歌をあげつつ梓弓 ハルの湖渡らしつ

乗合船のその中で ダリヤの姫の危急をば

救ひ給ひし聖雄ぞ この神司在す上は

スガの神山雲深く 包みて悪魔の襲ふとも

鬼や大蛇の攻め來とも 如何でか恐れむ惟神

神の光に消え失せむ ヨーイヨーイ ドンと打て

龍宮の底の抜けるまで スガの港の薬種問屋

ヨーイヨーイ ドンと打て ヨリコの姫や花香姫

天より降りし七夕の 栲機姫か千々姫か

天てん教けう山ざんに現あれませる 咲さ耶くの姫ひめの再さい來らいか

面おもては白しろく眉まゆ細ほそく 髪かみは烏からすの濡ぬ羽ばい色いろ

一ひと目め拜をがむも氣きがうとく 眼まなこもかすむ艷あ姿すがた

ヨーイヨーイ ドンと打うて 地ぢ獄じくの釜かまの割われるまで

スガの港みなとの薬やく種しゆ問とひ屋や ヨーイヨーイ ドンと打うて

辨べん天てん様さまの御ご化け身しんが 二ふた人たりも天あ降もります限かぎり

この大おほ宮みやは神しん徳とくも 日ひに夜よに月つきに輝かがきて

月つきの御み國くにの闇やみの空そら 清きよく晴はれなむ惟かむ神ながら

神かみの御み稜い威づぞかしこけれ ヨーイヨーイ ドンと打うて

地ぢ獄じくの釜かまの割われるまで スガの港みなとの薬やく種しゆ問とひ屋や

ヨーイヨーイ ドンと打うて。

かくして地ぢ鎮ちん祭さいも濟すみ、次ついで立りつ柱ちう式しき、上じやう棟とう式しき、完くわん成せい式しきなど僅わづか六ろく十じふ日にちの間あひだに  
大だい工いく、左さく官わん、手て傳つた人ひなどの精せい勵れいの結けつ果くわ、遷せん座ざ式しきを行おこふこととなつた。待まちに待まつ

たる五月五日、いよいよスガの宮の完成式を舉行することとなり、神谷村の玉清別を齋主となし、主人のイルクは神饌長となり、ヨリコ、花香、ダリヤの三人の姫御子は手長をつとめ、八雲琴、箏、箏、太鼓の聲も賑々しく、無事遷座式を終了した。これよりスガ山の山下なる、神饌田において田植式の祭典を行ふこととなつた。祭典の次第を略述すれば、

五月五日早朝祭員一同神の座に着く。土地の農夫ら神饌田の畔に列立し、次いで神饌を供し祝詞を奏上し、次に祭員、参詣者一同禮拜し、終つて祭員は撒饌に移る。農夫は神酒を戴き、次に田植畝の行事に着手す。齋主の玉清別は音頭の發聲をなし、謳歌者聲を次ぐ。農夫たち神饌田に入りて耕しの式をなし、道歌を歌ひながら神饌田を東西南北に列を作つて進行し、鋤を揃へて神田を耕し、終つて神饌田の正中に幣を立ておく儀式である。

## 音頭

あれみさい　スガの山やまのー横よこー雲ぐもー

ホーイ　ホーイ　ヤーアホイ　横雲下よこぐもしたこそ

私等わしらが祖國おやぐくにー　ホーイ　ホーイ　ヤーアホイ

ヤレー見み上あげて見みれば　オホー（大）カン（寒）鳥とり

ホーイ　ホーイ　ヤーアホイ　見みおるせば

スガの名所めいしよは船着ふなつき　ホーイ　ホーイ　ヤーアホイ

ヤレー吾わが夫つまは　河鹿かしかの濱はまで網あみを曳ひく

ホーイ　ホーイ　ヤーアホイ　かかれかし

九反くだんの網あみの目毎めごとに　ホーイ　ホーイ　ヤーアホイ

ヤレー目め出でたいものは芋いもの種たね　ホーイ　ホーイ　ヤーアホイ

莖長くきなく葉は廣ひろく子こ供どもあまたにー　ホーイ　ホーイ　ヤーアホイ



此様の床の間にかけし掛物　　ホーイ　　ホーイ　　ヤーアホイ

鴛鴦に千鳥に梅に鶯　　ホーイ　　ホーイ　　ヤーアホイ

此様の七つの倉の倉開き　　ホーイ　　ホーイ　　ヤーアホイ

白銀や黄金の徳利杯々　　ホーイ　　ホーイ　　ヤーアホイ

ヤレー十や七つが柳の下で　　芹を摘む

ホーイ　　ホーイ　　ヤーアホイ　　芹はなし柳は燃れてからまゝる

ホーイ　　ホーイ　　ヤーアホイ　　十よ七つが待てならレードの出先で

ホーイ　　ホーイ　　ヤーアホイ　　ヤマ（山）を見てやれ、それでは早い

早ければー、爺の息が切れ候。

いよいよ耕し濟み、水が入ると、此度は早乙女が赤襷十文字に綾どり、美々し  
き衣服を着飾つて水田に下りる。

早乙女の歌

代田は富士の山ほどござる 日は【しんとう】と山の端にかかる

オーラ（俺）の所の小旦那は うす田をこのむ  
うす田千石厚田も千石

十よ七つ八つ諸舞なれば 月星出でて蚊のなくまでも

私と汝と何處で田を植ゑ初めた 九下八つのおよし家のもとで

十よ七つ八つ細田の清水 見る人達が手をかけたがる

十よ七つの腰は品よい腰よ 品よい腰に鳴子をつけて

日暮し鳥は汚い鳥よ 上ねや終へと笠の上を廻る

雷かみなりさまは浮氣うはきな神かみよ  
色町いろまちがよ通とひをするさうだ。

太鼓たいこの撥ばちを質しちにおき

スガの港みなとの薬種問屋やくしゆどひやのアリスの家いへは俄にはかに一陽來復いちやうらいふくの春はるが來きた。スガの宮みやは無ぶ  
事建設じけんせつを終をはり、アリスの病やまひは拭ぬぐふがごとく癒いえ、行衛不明ゆくゑふめいとなつてゐたダリヤ姫ひめ  
は、神谷村かみたにむらの玉清別たまきよわけに送おくられて祭典さいてんの二日前ふつかまへに歸かへつて來きた。ただ恨うらむらくは、梅うめ  
公別宣傳使こうわけせんでんしの未だいま到着たうちやくなきことであつた。  
アリスは日ひの丸まるの扇あふぎを開ひらきながら喜よろこび祝しゆくして酒宴しゆえんの席せきにて舞まふ。

謡曲えつきよく

アリスアリス世よは久方ひさかたの空高そらたかく  
スガの御山みやまの奥深おくふかく  
天降あまりましたる木この花姫はなひめの  
天あまの羽衣はごろもふりはへて

神の姿に似たるかな

ヨリコの姫や花香姫

ダリヤの姫の顔は

瑞の靈の帯ばせ給ふ

十束の劍を三段折り

天の安河を中におき

天の眞奈井にふりすぎ

ぬなとももゆらに取りゆらし

さがみにかみて吹き打ち給ふ

伊吹きの狭霧になりませる

市岐島姫多紀理姫

多紀都の姫のあて姿

今眼の當り拜がむ心地

木枯しすさぶ冬の夜に

まがふべらなる老いの身の春に遇ひたる心地かな

仰ぎ敬へ天地の神の功のただならず

月の御國の空高く輝き渡る日月の

光にまさる如くなり イーイー

そもそもスガの山元は遠き昔の神代より

皇大神の御舎と言ひ次ぎ傳へ來たりし

珍の御里なれば 北に清けきハルの湖

第一章 問答所〔一八二〇〕

南 <small>みなみ</small> に高 <small>たか</small> き大 <small>おほ</small> 高 <small>たか</small> の峰 <small>みね</small>	東 <small>ひがし</small> に聳 <small>そび</small> ゆる鐘 <small>かね</small> ヶ嶽 <small>だけ</small>
西 <small>にし</small> に聳 <small>そび</small> ぬる青雲山 <small>せいうんざん</small>	山 <small>やま</small> の屏風 <small>びやうぶ</small> を立て竝 <small>なら</small> べ
天津御神 <small>あまつみかみ</small> や國津神 <small>くにつかみ</small>	集 <small>あつ</small> まり玉 <small>たま</small> ふ珍宮 <small>うづみや</small> と
仕 <small>つか</small> へ奉 <small>まつ</small> りし嬉 <small>うれ</small> しさは	はや天國 <small>てんごく</small> に住 <small>す</small> む心地 <small>こち</small>
あな有難 <small>ありがた</small> や尊 <small>たふと</small> やな	勇 <small>いさ</small> めよ勇 <small>いさ</small> めよ家 <small>いへ</small> の子 <small>こ</small> よ
祝 <small>いは</small> へよ祝 <small>いは</small> へよ國人 <small>くにびと</small> よ	千秋萬歳 <small>せんしゅうばんざい</small> 限りなく
國 <small>くに</small> の榮 <small>さか</small> えも松翠 <small>まつみどり</small>	果 <small>は</small> てしも知らぬ白雲 <small>しらくも</small> の
國 <small>くに</small> の外 <small>そと</small> まで御惠 <small>みめぐ</small> みの	露 <small>つゆ</small> に霑 <small>うるほ</small> ふ神代 <small>かみよ</small> かな
露 <small>つゆ</small> に霑 <small>うるほ</small> ふ神代 <small>かみよ</small> かな	

（大正一五・六・三〇 舊五・二一 於天之橋立なかや旅館 加藤明子録）

スガの宮の廣い境内の片隈に問答所といふ建物を新築し、ヨリコ姫、花香、ダ  
リヤ姫の三人が晝夜出勤してゐた。さうして表の大看板に「宗教一切の問答所」  
と筆太に書き記し、その傍に細字にて、  
「如何なる、宣傳使、修驗者と雖もお相手仕るべく候。萬々一妾が説き伏せられ  
し曉はスガの宮の宮仕を辭し、妾に勝ちしお方に役目をお譲り可申候也。無冠の  
女帝ヨリコ姫」  
と書き記しておきたりける。

大膽至極のヨリコ姫 猪喰た犬のどこまでも  
人をば何とも思はない その心根はありありと  
大看板に現はれぬ 五月雨の空低うして  
山時鳥啼き渡り 若葉も老いし夕間暮  
異様の服装身にまとひ 錫杖ついた修驗者  
網笠目深にかぶりつつ 問答所の玄關に

立塞がりて聲高く  
頼まう頼まうと訪へば

花香の姫は立出でて  
いと丁寧に敬禮し

見れば貴方は修験者  
いづれの方かは知らねども

ヨリコの女帝がお待ちかね  
定めて問答せむために

お運びなさつたに違ひない  
先頭一のお前様

シツカリおやりなさいませ  
妾は側に侍りて

高論卓説一々に  
拜聴さしてもらひませう

それが妾の第一の  
大修業となるのです

早くお上がりなされよ  
盥に清水を汲み來たり

草鞋とくとく脚絆まで  
脱がせて足を洗ひやり

庭下駄渡せば修験者  
案に相違の面持ちで

ニツコと笑ひ庭下駄を  
足に引掛け悠々と

境内隈なく經めぐりつ  
如何なる事の質問を

出してやらうかと首ひねり  
時を移すぞ抜目なき

ヨリコの姫は窓開けて  
今訪ひ來たりし修験者の

變姿怪態打ち眺め  
思はず知らずホホホと

笑ひこけては起き上がり  
覗きあるこそあどけなき

修験者心に思ふやう  
大膽不敵の女奴が

大看板を掲げつつ  
人を煙りに巻いてゐる

どんな奴かは知らねども  
吾が足洗うた女奴は

チヨイと澁皮むけてゐる  
どことはなしに香しき

匂ひが鼻にプンと來た  
どうしても斯しても彼奴をば

俺の女房にせにやおかぬ  
さはさりながら今晚の

問答にもしや負けたなら  
赤恥かいて男さげ

スゴスゴ歸らにやならうまい  
寶の山に入りながら

手ぶらで歸るも氣がきかぬ  
何とか工夫をめぐらして

ヨリコの姫とかいふ奴を  
木端微塵に説きくだき

往生させてキューバーが  
威勢をあつぱれ輝かし



あななひけう 三五教の聖場を うまうま占領した上で

スコブツツエン宗の本山に 立替へすればそれでよい

トルマン國では下手を打ち 千草の姫には生き別れ

男を下げたその揚句 青竹拂ひを喰はされし

風の神でも追ふやうに 田吾作空兵衛おかめ等に

おつ拂らはれし無念さよ あつぱれ此處で旗をあげ

會稽の恥を雪がねば 大黒主の御前に

出でて言譯立たうまい 大足別の將軍も

定めて怒つてゐるだらう 何か一つの手柄をば

やつて見せねば救世主 教祖の光も暗雲だ

などと自己愛利己主義の 勝手なことを考へつ

襟をば正し目をすゑて 玄關さして歸り來る

そのスタイルの可笑しさに ヨリコの姫は窓の内

又もや笑ひこけながら 一室に入りて顔貌

鏡かがみに向むかつて髪かみの風ふう

繕つくろひをへて白妙しろたへの

衣ころもを長ながく身みにまとひ

問答もんだふせき席せきに立たち出いでて

四邊あたりまはゆ眩くらく坐ざしむたり

花はな香かの姫ひめの案内あんないに

ついで出でて來くる修驗しゅげん者じゃ

ヨリコを一目ひとめ見みるよりも

眼まなこは眩くらみ胸むねをどり

舌したの自由じいうを失うしなひて

宣のる言靈ことたまも口籠くちごもり

體内たいないぢしん地震ときは時ときじくに

勃發ぼつぱつしたるあさましさ

かくてはならじと修驗しゅげん者じゃ

吾われと心こころを取直とりなほし

臍下せいかたんでん丹田きもだまに膽玉たまを

グツと据すえつけやや反そり身み

ヨリコの女帝にょていを睨ねめつけて

輕かるく目禮施もくれいほごしつ

不恰ぶかつかう好こうにできた口許くちもとを

パツと開ひらいて「某それがしは

ハルナの都みやこに名なも高たかき

大黒主おほくろぬしの片腕かたうでと

世よに聞きこえたるキューバーぞや

そも大黒主おほくろぬしの神様かみさまは

七千餘しちせんよこく國くにの月つきの國くに

片手かたてに握にぎる聖雄せいゆうぞ

普天ふてんの下もとや率土そつどの濱ひん

これみな大黒主のもの

その領分に住む汝

女帝と名のるは何故ぞ

事と品によつたなら

スコブツツエン宗の法力で

汝を厳しく捕縛して

ハルナの都へ送らうか

いかなる悪魔の化身かは

探りかぬれど汝こそ

この世を誑る探女なり

天人天女にまがふなる

美貌を楯に世の中の

有情男子の肝をぬき

おのれ女帝となりすまし

七千餘國の月の國

掌握せむとの下企み

それと覺つた修驗者

返答聞かむ』と詰めよれば

ヨリコの姫は高笑ひ

『ホホホホツホ　ホホホホ　どこの坊主が知らねども

キューバーといふ名は聞いてゐる　見ると聞くとは大違ひ

ようマアそんな面をして　世界が渡れて来たものだ

これを思へば世の中は　ホントに廣いものですな

お前まへのやうな醜面しこうらも 下品げひんな姿すがたも世よの人は

盲千めくらせん人の例たとへにもれず 教祖けうそ様さまよ救世きうせい主しゆ

などと喜よび渴仰かつがうする その心根こころねがいぢらしい

スコブツツエン宗しうといふ宗旨しうし 女をんなの乳房ちぶさをえぐり出だし

要塞地帯えうさいちたいまでくりぬいて 神かみの御前みまへに奉たてまつる

蒙迷頑固もうめいぐわんこの偽宗にせしうけう教 其方そなたの顔かほを一目ひとめ見て

宗旨しうしの全豹ぜんべう分わかりました とるにも足たらぬお前まへさまと

問答もんたふしたとて是非ぜひはない 一時いちじも早はやく尻しりからげ

尻尾しつぽを股またに挟はさみつつ 逃にげて歸かへるがためだらう

グツグツしてると野狐のぎつねの 尾尾しつぽが現あらはれまするぞや

スガの宮みやにや鼻はなの利きく 澤山たくさんな犬いぬがをりますぞ

ホホホホホ ホホホホ あまり可笑をかしうて腸はらわたが

燃よれますぞや 嘲弄からかへば キューバーは團栗眼どんくりまなこに角かどをたて

肩かたを四角しかくに聳そびやかし 鼻息はないき荒あらく腕うでまくり

握り拳を固めつつ 力限りに卓を打ち

コツプの水を踊らせつつ 一口飲んで息をつぎ

ヨリコの顔をいやらしく 下からグツと睨め上げて

「ホんに素敵な女郎だなア 俺も諸國を遍歴し

澤山な女に會うたれど お前のやうな奴轉婆を

一度も見付けた事はない それだけ度胸があるならば

神さま等に仕へずと オーラ山へでも飛んで行て

ホントのヨリコに面會し お弟子になつて泥棒の

飯焚きなりとするがよい ホンニ呆れてもの言へぬ

愛想もこそ月の國 七千餘國のその中に

これほどきつい女郎あらうか ハツハハハハハハと苦笑ひ

すればヨリコはキツとなり

「玄眞坊やシーゴ一の 三千人の泥棒の

大頭目をこの腮で しゃくつて使つたヨリコとは

この姐さままでござるぞや 驚くなかれ驚くな

オーラの山を解散し 悪魔の道を廢業して

水さへ清きハルの湖 吹き來る風に魂を

清めすましてスガの山 神の誠の取次と

忽ち變るヨリコ姫 如何なる惡人なればとて

神に貰うた魂は 至善至美なる増鏡

研けば光る人の魂 あまり輕蔑なさいますな

はじめて明かすその素性 聞くよりキューバーは仰天し

呆れて椅子からドツと落ち 尻餅ついて腰痛め

アイタタタツアア痛い 薬よ水よ繃帶と

ワザとに駄々をこねまわし 何とかなしてこの美人

住まへる宿に一夜の 伽をなさむと企むこそ

大膽不敵の曲者ぞ ヨリコの姫はキューバーが

心の底まで探知して そしらぬ顔を粧ひつつ

煙草をスパスパ輪に吹きつ

「これこれ花香よダリヤさま　ここに一人の行倒れ

賣僧坊主が居りまする　蓆の破れでも持つて来て

頭から尻までよく包み　雪隠の側へ持ち行きて

其處に寝かして置きなされ　スコブツツエン宗の小便使

天下を騙詐る糞坊主　雪隠の側が性に合ふ

ホホホツホ　ホホホホ　笑ひ残り悠々と

扇に片頬あほぎつつ　吾が居間さして入りにけり

キューバーこの態見るよりも　剛腹立ちて堪り得ず

ムツクと起きて胸倉を　掴み懲らしめやらむとは

思ひ焦れど肝腎の　腰の蝶番脱骨し

無念をのんで兩眼を　剥き出しながら時ならぬ

涙の雨に浸りける　夜はシンシンと更け渡り

夜半を報ずる太鼓の音　七五三と聞こえ来る

花香はなかダリヤの兩人りやうにんは　　しづしづ夜具やぐをとり出だし  
キューバーの上うへに被かぶせつつ　　各自おのおの寢室ねやに入りいにける  
ああかむながらかむながら惟神かみ々々　　神かみの仕組しぐみぞ面白おもしろき。

(大正一五・六・三〇　舊五・二一　於天之橋立なかや旅館　北村隆光録)

第一二章　懺悔ざんげの生活せいくわつ（一八二一）

大黒主おほくろぬしを笠かさに被きて　　七千餘國しちせんよこくの月つきの國くに  
吾わが物顔ものがほに振舞ふるまひつ　　大足別おほだるわけの軍勢ぐんぜいを  
片手かたてに握にぎり片手かたてには　　スコブツツエンの經典きやうてんを  
力ちからとなしてトルマンの　　神かみの國くにをば振り出だしに



タラハン城じやうやデカタンの

大高原だいかうげんに散布さんぷせる

數多あまたの國々くにくにことごとく

吾われの掌裡しやうりに握にぎらむと

心驕こころおこりしキューバーも

天運てんうん茲ここに盡つきたるか

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

梅公別うめこうわけの神力しんりきに

千辛萬苦せんしんばんくの計畫けいかくも

根本こんぽん的に破壊はくわいされ

寄邊よるべなくなく大野原おほのほら

雨あめに衣ころもはそぼち濡ぬれ

吹ふき來くる風かぜに髮かみの毛けを

梳くしりつつ漸やうやくに

スガの港みなとに來きて見みれば

前代ぜんだい未聞みもんの大慶事だいけいじ

山王さんわうの神かみの舊跡きうせきに

三五教あななひけうの大神おほかみの

珍うづの御舍みあらか千木ちぎ高たかく

鯉木かつをぎさへもきらきらと

ハルの湖邊うみべに影寫かげうつし

眩まばゆきばかりの光景くわうけいに

舌したを捲まきつつすたすたと

この世よを忍しのぶ蓑笠みのかさの

輕かるき扮装いでたち草鞋わらぢばき

手被ておひ脚絆きやはんを身みに纏まとひ

金剛杖こんごうじやうをつきなながら

爪先つまさき上がりの山道やまみちを

あえぎあえぎで上り見れば 社の傍に建てられし

さも宏壯な大道場 宗教問答所と筆太に

書き記したるに目をつけて 思はず【にやり】とほくそ笑み

宗教問答に對しては これだけ廣い月の國

キューバーの右に出づるもの ただの一人もなかるべし

いよいよ天運循環し 一陽來復時到る

神の光もいや長く 八千代の椿優曇華の

花咲く春に遇ふ心地 ああ面白し面白し

坊主鉢巻締め直し いかなる奴かは知らねども

高が知れたる女ども 奮戦激闘秘術をば

盡して挑み戦へば 何の手間暇要るものか

風に木の葉の散るごとく 旭に露の消ゆるごと

春の氷の解くるごとく スカ屁を放つたるその如く

影も形もなき崩れ 尻はし折つて一散に

雲を霞と逃げ出すは  
今目の當り見るやうだ

いかなる女か知らねども  
天下唯一の救世主

神徳無雙のキューバーが  
舌鋒にかかつちや耐るまい

相格崩して笏を捨て  
大地にバツたと鱗伏して

謝り入つて吾が弟子に  
どうぞ加へて下さいと

歎願いたすに違ひない  
アア面白い面白い

五月の空は曇れども  
キューバーの心の空晴れて

日月天に照るごとく  
スガの山下宮の棟

輝き渡らむ神の國  
占領なさむは案の内

なぞと高をばくくりつつ  
問答所の玄關に

立ちて様子を窺へば  
花に嘘つく美婦人の

花香の姫に迎へられ  
ハツと驚き眉を寄せ

ハートに波は打ちながら  
素知らぬ顔を装ひつ

庭下駄覆いて境内を  
參拜すると言ひながら

作戦計畫備へつつ　いよいよこれから正念場しやうねんば

舌端火を吐きヨリコ姫　煙けむりに巻まいてくれむずと

いきまきゐたる可笑をかさよ　案内あないにつれて奥おくの間まの

問答椅子もんだふいすによりかかり　ヨリコの姿すがたを眺ながむれば

案あんに相違さうゐの氣高けだかさに　魂消たまげんばかり驚おどろけど

元もとより曲者くせもの胴どうを据すゑ　二口三口戰ふたくちみくちたたかへど

元もとより蝟螂たうちらうの斧のをもて　龍車りゅうしゃに向むかふごとくなる

話はなしにならぬ勝敗しょうばいに　腰こしを抜ぬかして打うち倒たふれ

二人ふたりの姫ひめに介抱かいほうされ　夜具やぐを着きせられ一夜ひとよさを

これこのの館やかたに明あかしける　明あくれば女帝にょていのヨリコ姫ひめ

キューバーの傍そばに立たち寄よりて

スコブツツエン宗しゅうの教祖けうそさま　昨夜さくやは誠まことに御失禮ごしつれい

直日なほひに見直みなほし聞き直なほし　宣のり直なほされて悠ゆつくと

これこのの館やかたに投宿とうしゆくし　妾わらわの下僕しもべとなりなさい

女をんなばかりの此この館やかた 男をとこがなくては仕しやう様やうがない

風呂ふろも焚たかして上げあませう お飯まんまも炊たかして上げあませう

下駄げたの齒は入いれは言いふもさら 雑巾ざぶきんもつて床とこの間まの

掃除さうぢはおろか竹箒たけばつぎ 手てに携たづさへてお屋敷やしきの

隅々すみずみまでも清きよらかに 木この葉はや塵ちりを掃はきなされ

それが嫌いやなら便所はばかりの お掃除さうぢさして上げあませう

女をんなばかりの行ゆく雪隠せんち 香かしい匂におひがしますぞや

言いへばキューバーは諾うなづいて

「いかにによていさまも女帝様もつとご尤もつとも 私わたしは偉えらい男をとこだと

今いままで思おもうてゐたけれど 女をんなのお前まへにへこまされ

口くちさへ開あかぬ不甲斐がひなさ もちつと修業しゆげふが足たらないと

ボツボツ悟さとらして貰もらひました いよいよこれから私わたくしは

懺悔ざんげの生活せいくわつじ營いとなんで 人ひとの嫌いやがる便所はばかりの

掃除さうぢを大だい事に勤つとめませう 太閤たいかふさまでも初はじまりは

信長公の草履持ち 下から上つた出世なら

基礎はなかなか固けれど 雲を渡るよな計畫は

危険の伴ふものと知り すつかり改心いたしました

なにとぞ私に目をかけて 氣長く使つて下さんせ

天晴れ修業が出来たなら 三五教の神様の

御用の端でも務めます 言へばヨリコは諾づいて

「汝の言葉に偽りが なければそれで宜しかる

これから確り氣をつけて お便所の掃除をなさいませ

これこれ花香よダリヤさま 今日からキューバーのお爺さま

ここの下僕と定まりました 遠慮會釋は要らないで

ひどく使つてやりなさい などと得意の面持を

二人の前に輝かし 吾が居室さして入りにける

ああ惟神々々 神の光に恐れたか

但しは思ふことありて キューバーが一時呆けたか

雲の上から地の底へ 下つたやうな境遇に

甘んじ暮すはずはない 雨か暴風雨が將風か

地震雷洪水か 神ならぬ身の知るよしもなく

花香の姫やダリヤ姫 不安の色を浮べつつ

ヨリコの言葉に従ひて キューバーを下僕と使ひける

ああ惟神々々 神の經綸の面白さ。

玉清別の神司 ダリヤの姫ともろともに

宮の階段刻みつつ 神の御前に額づきて

祝詞を唱ふる折りもあれ 箒を持ちしキューバーは

ダリヤの姫の後姿 穴の開くほど打ち眺め

「アーアほんに何とまあ 姿の綺麗な淑やかな

どこに缺點ない娘 俺も男の端だもの

女の持てない事あるか トルマン城に乗り込んで

天下の美人と聞こえたる 千草の姫さへ惚かした

腕うでに覺おぼえのある男をとこ

高たかが知しれたる藥屋くすりやの

娘むすめぢやないか赤心まごころを

盡つくしてかかれれば譯わけもなく

俺おれに靡なびくに違ちがひない

女護にょごの鳥しまか龍宮りゅうぐうの

乙姫館おとひめやかたに住すみながら

女をんなの尻しりの大掃除おほさうじ

朝あさから晩ばんまで柔順おとなしう

やつてゐるのも氣きが利きかぬ

エーエ思おもへばじれつたい

心猿意馬しんゑんいば奴めが狂くるひ出だし

何どうしても斯かうしても耐たまらない とは言いふもの今いま暫しばし

辛抱しんぼうしなくてはならうまい こんな所ところで襪は襪ろ出だして

追放ついほうされやうものならば 肝腎要かんじんかなめの吾わが企たくみ

又またもや畫餅くわへいになるだらう 恥はぢを忍しのんで朝夕あさゆふに

苦勞くらうするのち後のちのため 今いまに見みてをれヨリコ姫ひめ

花香はなかの姫ひめやダリヤ姫ひめ 俺おれに秋波しゅうはを送おくらねば

ならないやうにしてやらう それが男をとこの腕前うでまえだ

先さきの百ひゃくより今いま五十ごじふ などと短氣たんきな事ことはせぬ



大望抱へしキューバーの身 大器晩成といふことは

吾には尊き金言だ 戀雲しばし吹き散れ」と

吾と吾が身を伊吹きしつ 箒で拂ふ可笑さよ

玉清別はダリヤ姫 後に從へ階段を

下りて見ればキューバーは 箒を持ちて庭に立ち

空行く雲を打ち眺め 感慨無量の爲體

見るよりダリヤは傍に寄り 「キューバーさまえ」と背叩き

笑へばキューバーは吃驚し 揉手をしながら腰屈め

「ハイハイ誠に御失禮 お二人さまの言靈の

清き響に憧れて 思はず知らず恍惚と

靈を抜かれてをりました サアサア私がお館へ

お伴をさして貰ひませう 言へば玉清別司

右手を振りつつ「キューバーさま 決して心配要りませぬ

ダリヤの姫と二人連れ 滅多の事はありません

左様ならば』と言ひ捨てて  
 神館さして歸り行く  
 後見送りてキューバーは  
 舌をチヨンチヨン打ち鳴らし  
 『チエー畜生馬鹿にすな  
 睦まじさうに二人連れ  
 甘き囁きつづけつつ  
 これ見よがしに行きよつた  
 怪體が悪いと思へども  
 ここをも一つ耐へねば  
 肝腎要の大望が  
 成就せないと思へばこそ  
 齒ぎりを噛んで辛抱する  
 アア叶はぬ叶はぬ耐らない  
 目玉飛び出すやうだワイ』

(大正一五・六・三〇 舊五・二一 於天之橋立なかや旅館 加藤明子録)

第一三章 捨臺演 (一八二二)

雪隠掃除を引受けた 偽改心のキューバーは

玉清別の神司 だりやの姫と相並び

祝詞をあげる姿見て 心猿意馬が狂ひ出し

睦まじさうな様子見て やけてたまらず地團太を

踏んでは見たが今少時 館の様子を考へて

その上何とかせむものと いろいろ雑多とすみずみに

心を配りみたるこそ スガの宮居の館には

剣呑至極の代物ぞ 五日六日と経つ中に

キューバーは戀の焔をば 胸に燃やしてだりや姫

何とか物にせむものと 考へすます折りもあれ

便所掃除の其の際に 廁に入りしだりや姫

これ幸ひ屈強の場合ぞと 手洗鉢の前に立ち

柄杓に水を汲みながら だりやの両手に注ぎつつ

隙を覗ひ白魚の 織手をグツと握りしめ

「これこれもうしダリヤさま　私は貴女に眞劍だ

私の願ひを今一度　聞いてもらはにや死にまする

鞆丸さげた大丈夫　纖弱き女に手を合し

頼むは畢竟戀ゆゑぞ　戀に上下の隔てない

主人僕といろいろに　名は變れども人間は

何れも天帝の分靈　尊い卑しいなどと言ふ

そんな區別があるものか　雪隠掃除と侮つて

私の言ふこと聞かぬなら　此方も一つ思案する

後日に臍をかまぬやう　性念をすゑて御返答

天晴れなされよキューバーが　乗るか反るかの境目だ

一人の男を生かさうと　殺さうとお前の胸次第

醜い男と言つたとて　虎や熊ではあるまいし

目鼻口耳眉毛まで　立派についてゐる男

手足の指も五本ある　お前も美人と言つたとて

道具だうぐに變かはりはあらうまい 早くはや思案しあんを定きめてくれ

私も男をとこの意地いぢだもの 言いひ出だしたことア後あとに引ひかぬ

サアサア返答へんたふ』と詰寄つめよれば ダリヤの姫ひめは打うち笑わらひ

『これこれキューバーのお爺ぢいさま お前まへは本氣ほんきで言いふのかい

お酒さけに酔ようて言いふのだろ 道理だうりで顔かほがチト赤あかい

そんな下くだらぬ囁言たはごとを 言いふ間まがあつたら逸いち早く

屋敷やしきの掃除さうぢをするがよい ヨリコの姫ひめさまが聞きいたなら

えらいお目玉めだま喰くふだらう 決けつして悪わるいこと言いひませぬ

その手てを放はなして下くださんせ』 言いへばキューバーは目めを剥むいて

『どうしてどうして放はなさうか この手てを放はなした事ことならば

お前まへは直すぐさまヨリコ姫ひめ 女帝にょていの前まへに飛とび出だして

俺おれのしたこと告つげるだらう さうなりや俺おれもこの館たちに

お尻しりを据すゑてゐられない 一旦いったん弓ゆみを放はなれたる

征矢そやは元もとへは歸かへらない 良よき返答へんたふ』と詰寄つめよれば

ダリヤ金切聲を出し

「あれあれ怖い助けて」と 息を限りに呼ばはれば

花香は驚き馳せ來たり この有様を打眺め

「誰かと思へばキューバーどの ふざけた事をするでない

ここは尊き神館 心得なさが宜しからう

澁紙見たやうな面をして 天下の美人の手を握り

戀の鮎の何のこと お前の面と御相談

した上その手を放さんせ 本當に呆れた賣僧だな

改心すると詐つて 少時館に忍び込み

まめまめしくも見せかけて 戀の欲望を達せむと

企らみゐたる猫かぶり お前のやうな悪黨は

一時も早く去犬がよい しつこうその手を放さねば

ヨリコの女帝に告げるぞや 言へばキューバーは胴を据ゑ

大口開けて高笑ひ

アツハハハハハツツツ　こらこら小女章魚バイタ

俺を何方と心得る　大黒主の御信任

最も厚き救世主　スコブツツエン宗の大教祖

キューバーの君でござるぞや　高が知れたる薬屋の

一人娘や空兵衛の　はした娘の身をもつて

頬桁たたくおとましや　ヨリコの姫が何怖い

オーラの山に立籠り　山賊稼いだ兇状持ち

バラモン署に出頭して　恐れながらと出かけたなら

一網打盡貴様等も　同類仲間と見做されて

暗い牢獄に打ち込まれ　日の目も見ずに呻吟し

啣ち嘆けど是非もなく　忽ち日陰の罪人と

なつて行くのは目のあたり　それでもキューバーの要求を

拒絶するの如花香姫　ダリヤの姫のあまつちよよ

俺もかうなりや自暴自棄だ　スガの御殿を根底から

でんぐり返し宮司

玉清別のデレ親爺

吠面かわかし見せてやらう

などと傍若無人なる

キューバーの言葉に呆れ果て

花香は直ちに奥の間に

駆け込みヨリコの前に出で

キューバーの暴状逐一に

話せばヨリコは打ち笑ひ

衣紋繕ひ悠々と

便所の近くに寄り來たり

「ホツホホキューバーさま

誠に親切有難う

お尻の掃除をした上に

お手まで握つて洗うとは

ようマア念の入つたこと

御親切感じ入りました

これこれそこなダリヤさま

キューバーさまの言ふことを

心よく聞いて上げなされ

言へばダリヤは涙聲

「何ほど私がスベタでも

卑しい身分であらうとも

便所掃除をするやうな

爺さまに言葉をかけるさへ

汚れるやうな氣がします

まして妾を女房に



なつてくれとはあんまりだ  
腹立ち涙が乾き果て

呆れてものが言へませぬ  
なにとぞ許して下さんせ

ワツとばかりに泣き入れば  
さすがのキューバーも手を放し

ヨリコの方に打ち向かひ

「これこれヨリコの女帝さま  
猫を被つてゐた私

かく現はれし上からは  
破れかぶれだお前さまの

首玉一つをもらはうか  
それが嫌なら直様に

バラモン署へと駆け込んで  
お前の素性を素破抜き

縄目の恥をかかさうか  
如何でござる」と洩すすり

肩肱怒らし詰寄れば  
ヨリコの姫は打ち笑ひ

「妾が今まで悪行を  
稼いだ證據がどこにある

分らぬことを仰有ると  
正反對に此方から

お前をバラモンのお役所へ  
訴へませうかキューバーさま

如何に如何に」と反對に  
逆捻喰はせばキューバーは

少時躊躇ひ息こらし 默然として打ち沈む

ああ惟神々々 この顛末は如何にして

落着するか此の先の 成行こそは面白き。

キユーバーは戀の情火に包まれ耐へきれずなり、ダリヤ姫の手を握つて、威しつ瞞しつ口説いて見たが、挺子でも棒でも動かないダリヤの強情にヤケを起し、バラモン署に訴へるなどと脅喝を試みた。されどもキユーバーのごとき賣僧、しかも念入りに出來た醜男には横丁の牝犬にケシかけても飛びつかない面構へ、まして絶世の美人が秋波を送る道理なく、三人の美人に寄つて集つて恥づかしめられ、無念骨髓に徹し、……もう此の上は破れかぶれた、ヨリコの素性を素破抜き、バラモン署に訴へ、この怨みを晴らさにやおかぬ……と言ひながら問答所の看板を睨めつけ、それに啖唾をはきかけ、後足で砂をひっかけ夜叉のごとき相好を現はし、ダリヤ姫の兄イルクに會つて目的を達せむものと、一言の挨拶もなく、厭らしい捨臺詞を残して此の場を立ち去つた。

キユーバーは直ちに薬屋の表門を潜り玄關に立ち塞がり銅羅聲を出して、  
七千餘國の月の國を御支配遊ばす大黒主の神司のお見出しに預かつたるスコブツ  
ツエン宗の教祖キユーバーの君でござる、是非主人に面會ないたしたい』  
と呼ばはる聲に番頭のアルは慇懃に出で迎へ、  
『ヤア何方かと思へばお前さまは、お館の掃除番ぢやないか、ナーンぢや吃驚し  
た。大黒主だの、スコブツツエン宗の教祖だなど大變な大法螺を吹くものだから、  
いかなる貴顯紳士がお出でかと思つたのに、何のことだ、よい加減に御冗談  
をしておかつしやい、サア早くお館へ歸つたり歸つたり』  
『黙れ番頭、この方は大黒主の片腕、天然坊のキユーバーといふ大救世主だぞ、  
スガの館の様子を覗ふべく掃除番となつて入込んでをつたのだ。今に見ておれ、  
貴様の主人も老耄も貴様も共にフン縛つて、暗い暗い牢獄へブチ込んでやるぞ。  
早くこの方を立派な座敷へ導け、老耄や主人へ言ひ聞かすことがある』  
アル『嘘か本眞か知りませぬが、一寸この由を主人に傳へて來ますから、待つて  
ゐて下さい』

キユ「グツグツしてゐると承知ならぬぞ、早く奥に行け」

と叱りつける。アルは舌打ちしながら、

「チエツ、賣僧坊主奴が」

と小言呟きつつ主人の居間に駆け込んだ。少時するとイルクはスタスタ入り来た

り、

「ヤア誰かと思へば掃除番のキューバーだな、何の用だ。俺も忙がしいから長つ

たらしい話は面倒だ、手取り早く言つてくれ」

キユ「こりやイルク、勿體なくも大黒主様の寵臣キューバーの君に向かつて、立

ちはだかつて物申すといふ失禮なことがあるか、控へをらうぞ」

イル「何のことぢや、テンと譯が分らぬ。オイ、アル、横町の精神病院へ行つて

院長さまを頼んで来い」

「馬鹿を申せ、グツグツいたすと當家は斷絶の憂目に會ふぞ、今まで大黒主の命

によつて三五教の内幕を探るべく忍び込んでみたのだ。探れば探るほどいよいよ

怪しからぬ事をいたしてをる。大黒主様に對して少しも敬意を拂つてゐない、こ

の方がこの次第を詳さに言上しやうものなら、大變なことになるぞよ」

「ハイ、いかなる悪い事があるかも知れませぬが、信仰はもとより自由でござい  
ます。キューバーさまでも大黒主さまでも、悪い事さへなけりやチツとも恐れま  
せぬ、何卒お構ひ下さいませすな」

「よし、構うてくれなと申したな、後で吠面かわくな」

と言ひながら足の運びも荒々しく、其處邊り金剛杖にて打壊しながら、大手を振  
つて表門をくぐり何處ともなく姿を隠した。

（大正一五・六・三〇 舊五・二一 於天之橋立なかや旅館 北村隆光録）

第一四章 新宅入（一八二三）

ハルの湖水を渡るをり

にはかに吹き来る暴風に

高砂丸は沈没し 妖幻坊の空助は

高姫背に負ひながら 浪の間にまに漂ひつ

漸く湖中に浮びたる 竹生ひ茂る太魔の島

銀杏の濱邊に着きにけり ここに二人は種々の

良からぬ事をなし終へて 濱邊の船を奪ひとり

空助艦をば操つりつ もとより慣れぬ海の上

浪のまにまにくるくると 彼方や此方に流されつ

終日終夜を水の上 腹を減かして彷徨ひつ

やうやうスガの港まで 命からがら着きにける

高姫空助兩人は 湖邊に沿ひし鯉鈍屋に

ちよつと立ち寄り減腹を 癒せる折りしも道を往く

人の噂にスガの山 三五教の大宮が

千木高知りて新しく 建てられたりと聞くよりも

食指は大いに動き出し 何とか工夫を廻らして

その聖場を奪はむと 考へみるこそ蟲の良き  
日も黄昏になりければ 目抜き場所なる中の町  
タルヤ旅館に乗り込んで 一夜の宿を求めつつ  
二人は此處にやすやすと 甘き睡りにつきにけり。

高姫、空助は朝早くから起き出でて宿屋の様子を考へてみると、見た割合とは  
廣い屋敷で新しい別館が建つてゐる。さうして其の別館は北町の街道に面し、布  
教や宣傳には極めて可い家構へであつた。妖幻坊は曲輪の術を使ひ、庭先の木の  
葉を七八枚拾つて来て何かムサムサ文言を唱へると、それが忽ち百圓札に變つて  
しまつた。そつと懷中に祕めおき素知らぬ顔して高姫の前にどつかと坐し、  
「オイ、千草の高チヤン、何と此處は良い家構へぢやないか。お前の得意な布教  
宣傳とやらを此處で行つたら面白からうよ」  
高「なるほど、さすがは空助さまだ。よう氣がつきますこと、妾も一つ三五教の  
奴がスガの山で立派なお宮を建て、大變にえらい勢ひで宣傳してゐるといふ事だ

から、何だか知らぬ氣色が悪くてたまらぬので、直ぐさまスガの山に乗り込んで、神司の面の皮をひん剥き、道場破りをやつてやらうかとも考へましたが、それは餘りあどけない、無理に占領したと町人にでも思はれちゃ後の信用に關するの  
で、如何しやうかなアと今考へてゐたところですよ。しかし何ほど結構な都合の  
よい家だといつても、一旦湖にはまつて眞裸となり、旅費も何もなくなつてしま  
つたのだから、家を借りやうもなく仕方がないぢやありませんか。かうして偉さ  
うに宿屋に泊つてゐるものの、サア御勘定といふ時は如何しやうかと思つて、さ  
う思ひ出すと宿屋の飯も甘く喉を通らないのですもの、今晚は甘く夜抜けをしな  
いと、グツグツしてゐると無錢飲食とか何とかいつて、バラモンの役所に引張ら  
れますからなア」  
妖「ハハハハ御心配御無用だ。そんな事に抜目のある空助だないよ。一層のこと、  
あの別館を主人に相談して買取つたらどうだらう」  
「買取るといつたつてお金がなければ仕様がなないぢやありませんか。せめて手附  
金でもあれば話も出来ませんが、昨夜の宿料もないやうなことで、どうしてそんな



ことが出来ませうか。アアかうなれやお金が欲しいワイ」

「俺もお金が欲しいのだけれど、お札はあつてもお金は些しもないのだから、

札や手形は澤山あれど

どうか（銅貨） どうか（硬貨） に苦勞する

とか何とかいつてな、硬貨が無けれや矢張り話しても効果が無いといふものだ。

しかし「どうか」（銅貨）してあの家を手に入れたいものだな」

「硬貨がなくても紙幣されあれば結構ですが、紙らしいものは鼻紙一つ無いのだ

もの、仕方がないワ」

空助はニツコと笑ひ懐を三つ四つ叩きながら、

「オイ、高チヤン、ここに一寸手を入れて御覽。お前の大好物が目を剥いてある

よ

高姫は訝かりながら矢庭に妖幻坊の懐に右手を挿し込むと、切れるやうな百圓

札さつが七八枚しちはちまい手に觸さはつた。アツと驚おどろき尻餅しりもちをつき、

「ヤアヤアヤアこれこれ空もくチヤン、危あぶない事ことをしなさるなや。お前まへさまは昨夜ゆうべ妾わたしの寢ねてゐる間まを考かんがへて何處どこかで何々なになにして來きたのだらう、ほんたうに怖おそろしい人ひとだ

ワ

妖えう「ハハハ、さう驚おどろくものぢやない、この空助もくすけは決けつして泥棒どろぼうなんかしないよ。曲まが

輪わの術じゆつをもつて庭先にはさきの木この葉はを拾ひろひちよつと紙幣しへいに化ばかしたのだ」

高姫たかひめは曲輪まがわの術じゆつといへば一いちも二にもなく信しんずる癖くせがある。

「マアマア、えらいお方かただこと、それでこそ日出神ひのでのかみの生宮いきみやの夫をつとですワ。この金かねさへあれば一ひとつ主人しゆじんに交かけあつて、あの家いえを手てに入いれるやうにせうぢやありませんか。裏うらにはまた離棟はなれも建たつてゐますなり、お前まへさまがお休やすみになるには大變たいへん都合つがふがよろしいからなア」

妖えう「ウンさうだ。どうも別棟べつむねがないと俺おれはとつくり休やすめないからのう、どうだい、

お前まへ主人しゆじんに交かけあつてくれないか」

高たか「ハイ、承知しょうちいたしました」

と言ひながらポンポンと手を拍ち鳴らす。暫くあつて一人の下女、襖をソツと開き淑やかに兩手をつき、

「お召しになりましたのは此方でございますか」

高「アアさうだよ、お前は此家の下女と見えるが、下女には用がない、ちよつと御亭主を呼んで来て下さい、さうして序に昨夜の勘定書をね」

下女は「ハイ畏まりました」と言ひながら、足早に出でて行く。高姫は空助の懐から出た紙幣を引繰かへし引繰かへし眺めたが、どうしても贋物とは見えぬ。勇氣百倍して主人の來たるのを今や遅しと待つてゐると、顔中に「みつちや」の出來た五十恰好の爺、テカテカ光つた頭を又ツと出し、

「ハイ私は當家の主人でございます、お召しによりまして罷り【つん】出ました」

高「勘定書は幾らだな」

亭「ハイ、お二人様で一圓五十錢頂戴いたします」

高「そんなら、これは茶代と一緒だよ」

と言ひながら百圓紙幣を投げ出せば、亭主は驚いて二人の顔を見詰めながら、

「こんな大きなお金を頂戴いたしましたしても剩錢がございませぬ、どうぞ小かいの  
でお願ひいたします」

高「イヤ剩錢が無けりや宜しい、一圓五十錢は昨夜の宿泊料、九十八圓五十錢は  
お茶代だよ」

亭「宿屋業組合の規則で茶代を廢止してゐる今日、こんな物を頂戴しましては仲  
間を「はね」られますから、どうぞお納め下さいませ」

「アア茶代が悪けれや、お土産として上げておかう、それなら好いだらう」

「ハイ、お土産なら幾らでも頂戴いたします。有難うございます。どうぞゆるゆ  
るお宿り下さいませ、どうも不都合でございますが暫く御辛抱願ひます」

「時に亭主殿、旦那様の思召したが、あの庭先の向かふに建つてゐる別館は當家  
の所有物かえ」

「ハイ、左様でございます。漸く建ち上がり畳や襖を入れたところですが未だ誰  
も入つてをりませぬ、ほんたうに新しい所です」

「お金は幾何でも出すから、あの家を使はしてもらへますまいかな」

「ハイ、毎度御鼻屑に預かりまする外ならぬお客様のことですから、お言葉通り、譲りでもお貸しでもいたします」

「同じことなら譲ってもらひたいのだがな、借家は雑作するのにも一々お答へをせにやならないからな」

「一々ご尤もでございます、何ならお譲りいたしませう」

「幾何でわけて呉れますか、お金は幾何いつてもかまはぬのですから」

「ちつとお高いか知れませぬが、五百圓で願ひたいものです」

「サアそんなら五百圓受け取つて下さい。さうしてこの百圓は、何かとお世話にならねばならぬから、お心づけとして上げておきませう」

亭主は實のところ別館は、借家人が首を吊つて死んだため、夜な夜な幽霊が出るとか、化物が出るとか噂が高くなり、家の借り手もなく、家内の者さへも氣味悪がつて入らないので持てあましてをつたところ、大枚五百圓、しかも即金で買ってやらうといふのだから、棚から牡丹餅でも落ちて来たやうに「ハイハイ」と二つ返事で其の場で賣渡證を書いてしまった。これより空助、高姫は其の日の内

に別館に引き移り、ウラナイ教の大看板を掲げて、宣傳の準備に取りかかった。  
高「サア空チヤン、氣樂な自分の巢が出来たから、ゆつくり休んで下さい。そして明日からは大いに活動をして大勢の信者を集め、スガの山の三五教に一泡吹かせにやなりませぬぞや」

妖「アアまたしても明日から耳が蛸になるほど第一靈國の天人、日出神の生宮、底津岩根の大ミロク、三千世界の救世主、ヘグレのヘグレ武者ヘグレ神社の大神、リントウビテンの大神、木曾義姫の命、ジヨウドウ行成、地上丸、地上姫、耕大臣、定子姫の命、杵築姫、言上姫とか何とかいふ【やくざ】神さまの名を聞くのかと思へば、今から頭が痛むやうだワイ」

「これ空チヤン、これほど妾が一生懸命になつて神様のお道を開かうとしてゐるのに、何時も何時も妾を嘲弄するのですか。神様の名を聞いて頭が痛い、目が眩ふのと言ふ人は罰當りですよ」

「さうだから、ウラナイ教はお前様にお任せ申して、この空兵衛さまは離棟の一室に立籠り上げ股うつて休ましてもらふのだ。宣傳の邪魔をしても濟まないから

なア<sup>㊦</sup>

「お前さまは餘り人物が大きい過ぎて人民に直接の布教は不適當だから、晝の間は離棟でお休みなさい、そのかはり夜分になつたら御用を仰せつけて上げますからねえ、ほんとに嬉しいでせう、可愛いでせう<sup>㊦</sup>」

「まるで俺を種馬と間違へてゐるやうだなア。どれどれ山の神様の御機嫌のよい中に離棟に参りませう。サアこれから日出神の生宮、大ミロクさまを賣り出しなさい<sup>㊦</sup>」

と言ひながらドシンドシンと床板をしわらせながら離棟座敷へ大きな圖體を運び、中から錠「まい」を卸し元の怪物と還元し大鼾聲をかき寝てしまった。妖幻坊は人間に化けてゐるのが非常に苦しいので、外から見えない一室を何時も必要としてゐるのである。

高姫はいよいよ一陽來復春陽到れりと太いお尻を振りながら、大道を聲張り上げて宣傳しはじめた。尻は大きいが何といつても千草姫の肉體、どことはなしに氣品も高く器量もよし、物さへ言はねば何處の貴夫人か、辨天様の再來かと疑は

るるばかりの美貌であつた。高姫の必死の宣傳は忽ち功を奏したと見え、その翌日からはワイワイと老若男女が詰めかけて鮮詰の大繁昌、スガ山の神殿よりも参詣者が幾層倍増へるやうになつて來た。

(大正一五・六・三〇 舊五・二一 於天之橋立なかや旅館 加藤明子録)

## 第一五章 災會(一八二四)

トルマン國の王妃なる

千草の姫の體をかり

ふたたび娑婆に甦り

千草の高姫と名を變へて

曲の精靈に沁み込んだ

ウラナイ教をどこまでも

たてにやおかぬと雄猛びし

前世に契りを結びたる

大雲山の洞穴に

棲へる大蛇の乾兒なる



妖幻坊に再會し　またもや夫婦の縁結び

彼方こなたと彷徨ひつ　スガの港の北町に

やうやく吾が家を買ひ求め　スガの聖地に建てられし

三五教の神殿を　向かふに廻して勢力を

比べむものと雄猛びし　立派な神殿造り上げ

俄か役員二三人　雇ひ來たりて嚴かな

口調をもつて寄り來たる　善男善女に相向かひ

四脚の机を前に置き　椅子に腰かけ悠然と

コップの水を啜りつつ　エヘンと一聲咳拂ひ

扇片手に持ちながら　信者の上に目を注ぎ

花を欺く美貌もて　涼しき聲にて語るらく

「皆さまようこそお詣りよ　妾は人間に見ゆれども

決して俗人ぢやありません　第一靈國天人の

靈を受けて生れたる　日出神の生宮で

底津岩根の大彌勒

三千世界の救世主

千草の高姫と申します

妾の教ふる御教は

ウラナイ教と言ひまして

天下に比類のない教

盲は目が開き聾は聞こえ

躄は立つて歩きます

肺病腎臓心臓病

胃病は愚か十二指腸

盲腸炎に神経痛

気管支加答兒に肺加答兒

流行性感冒コレラ病

猩紅熱にパラチブス

横根や疳瘡や骨うづき

陰辜田蟲に疥癬蟲

如何なる病も高姫が

心に叶うた人ならば

即座に癒して上げますよ

それぢやといつてウラナイの

誠の教の分らない

お方にや神徳やりませぬ

三五教の神様と

どちらが偉いといふやうな

比較研究の信者には

罰こそあたれ神徳ない

ここの道理を聞きわけて

絶対服従の信仰を

皆さま勵んでなさいませ  
齋苑の館に總務をば

務めてござつた空助さま  
神素盞鳴の大神の

三羽鳥と言はれたる  
天下唯一の宣傳使

三五教に愛想をば  
おつかしなさつて高姫が

教の道に贊同し  
遂に進んで背の君と

おなり遊ばし御教を  
天下に開いて御座るといふ

珍現象になつたのも  
決して不思議なことでない

メツキは直ぐに剥げるぞや  
正真正銘のウラナイ教

擦れば擦るほど光り出す  
鋭敏の頭腦の持主の

空助さまは逸早く  
ウラナイ教の誠をば

感得されて三五の  
曲津の教を捨てられた

これだけ見ても分るだらう  
スガの宮居の神司

玉清別といふ人は  
何處の馬骨か牛骨か

あるひは狐の容器か  
狸のお化か知らねども

どうしてあのやうなスタイルで 神の聖場が保てませう

見てみて下され一月も 経たない中にメチャメチャに

壊れてしまふは目のあたり 鏡にかけしごとくです

誠の救ひの神様は ウラナイ教より外にない

ヨリコの姫や花香姫 ダリヤの姫とかいふ女

何をしとるか知らねども 清浄無垢の神館

月に七日の不浄ある 女を三人も泊らせて

どうして神が喜ばう もしも喜ぶ神なれば

必ず曲津に違ひない 妾も最早四十三

若い姿はしてをれど 月に七日のお客さま

宿泊なさるやうな身ではない これを思つてもウラナイの

神の教は誠ぞや 氣をつけなされよ皆の人

必ず曲津の御教に 迷つて地獄の先駆けを

なさらぬやうにと氣をつける ああ惟神々々

ウラナイ教の大御神  
ヘグレのヘグレのヘグレ武者

ヘグレ神社の大御神  
リントウビテンの大御神

地上大臣地上姫  
地上丸さま行成さま

定子の姫さま杵築姫  
彌勒成就の大御神

貞彦姫の大御神  
言上姫さま春子さま

その外百の神様の  
御前に謹み高姫が

日出神と現はれて  
この場に集ふ人々の

守護を命じおきます  
ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ  
かかるところへ修験者

錫杖左手につきながら  
深網笠に顔隠し

いと莊重な言靈を  
張り上げながら入り來たり

「ウラナイ教の大本部  
教祖の君に御面會

お願ひ申す」と言ひながら  
群集の中をかき分けて

演壇目がけて進みより  
高姫司の前に立ち

「拙僧こそは月の國　ハルナの都に現れませる

大黒主の御寵臣　スコブツツエン宗の大教祖

キユーバーと申す僧でござる　どうか一場の演説を

許させ玉へ」と呼ばはれば　高姫不審の眉ひそめ

どこかで聞いた聲の色　面は笠で見えねども

もしや自分の戀ひ慕ふ　キユーバーの君ではあるまいか

「なにはともあれ御登壇　結構なお話し頼みます

これこれ皆の御信者よ　妾はこれから降壇し

奥の一室で休みます　この御方は修験者

必ず尊いお話を　して下さるに違ひない

神妙にお聞きなされや」と　言ひつつ人をかき分けて

隣りの部屋に身を潜め　様子いかにと窺ひぬ

キユーバーも千草の高姫の　顔を見るより仰天し

ハートに浪は騒げども　そしらぬ顔を装ひつ

贊成演説はじめける  
キユーバーはコップに水をつぎ

オホンと一聲咳拂ひ  
神官扇を斜に構へ

笠抜き捨てて群集を  
ジロジロ見廻し聲高く

『拙僧こそはウラナイの  
道に永年苦勞した

諸國巡禮の行者です  
今現はれた高姫の

教主の君は人でない  
天津空より雲に乗り

小北の山の聖場に  
天降り玉ひし生神ぞ

皆さま喜びなさいませ  
この神様を信じなば

壽命長久福德圓滿  
五穀豐穰息災延命まがひなし

そもそも神には正神と  
邪神の二つの區別あり

神を信仰するならば  
誠の神を敬うて

邪神を捨てなされ  
誠の神は生命を與へ

病を癒やし福德を  
授け玉ふ仁慈無限のおやり方

曲津の神は病氣を起し  
貧乏を齎し命を縮め

大雨大風地震まで

人の嫌がる事ばかり

一生懸命にするものだ

スガの御山に建てられし

三五教もその通り

善の假面を被りつつ

悪魔の神を呼び集へ

此世の中を亂さむと

朝な夕なに念じてる

何とぞ皆さま氣をつけて

スガの山へは行かぬやう

近所合壁いましめて

ウラナイ教の神様の

おかげを頂きなされませ

ああ惟神々々

私も教主に用がある

一先づ御免」と言ひながら

悠々演壇降りつつ

高姫司の潛みたる

隣の部屋をさして行く

數多の信者は怪訝顔

何が何やら分らぬと

たがひに小言をつきながら

ボツボツ家路に歸り行く

ああ惟神々々

目玉飛び出す面白さ。



高姫は一室に隠れてキューバーの演説を聞いてゐたが、  
背恰好といひ、顔の形といひ、聲色といひ、トルマン城で會つたキューバーに  
少しも違はない。ハテ妙な事になつて來たワイ、悋氣の深い空助さまは別館に寢  
てゐらつしやるから、いいやうなもの何時目が醒めるか分らない。もしキュー  
バーさまであつたなら、如何しやうかな  
と胸を抱いて考へてゐる。そこへキューバーが足音忍ばせ入り來たり小聲になつ  
て、

「これ、千草姫どの、この面を覚えてゐますか」

高「ハイ、そのお顔を忘れてなりませうか、天下に類例のない御容貌ですもの。

そして貴方、ひどいぢやありませんか、どこをうるついでゐらつしやつたのです」

キユ「時に千草殿、スガ山の神館にはヨリコ姫といふ山賊上がりの女が傲然と構

へ込み、宗教問答所と大看板を掲げ、「妾を説き伏せた人には此の館の役目をお

渡し申す」と圖々しくも掲げてゐるのだ。どうだ、お前は一つ問答に行く氣はな

いか」

「ナニ、ヨリコ姫がそんな事を書いてをりますか、何といふ馬鹿でせう、己が刀で己が首、飛んで火に入る夏の蟲とは此事でせう。ヤア面白い、それぢや今日から準備しておいて、明日は出かけてやりませう」

「ヤ、早速の御承知有難い、及ばずながら拙者もお伴いたしませう。しかし千草姫さま、お前さまに【これ】はあるのかい」

と親指をつき出す。

高姫はやや口ごもりながら思ひきつて、

「ハイ、時置師の神の空助さまといふ立派な夫がございます。大きな聲で仰有ると目が醒めますから、どうか小聲で言つて下さい」

キユ「誠の夫が来てゐるのに、誠の夫の俺が何遠慮する必要があるか、その空助とかいふ奴、俺の女房を横取りしよつた曲者だ。ヨ一シ、奥へ踏み込んで談判をやつてやらう」

と立ち上がらうとする、高姫は矢庭に胸倉をグツと取り、喉を締め、あて身をくわし、床の下にソツと投げ込んでしまつた。アアキューバーの運命は如何なるで

あらうか。

（大正一五・六・三〇 舊五・二一 於天之橋立なかや旅館 北村隆光録）

第一六章 東西奔走（一八二五）

妖幻坊は別館の戸を開け、ズシンズシンと床を響かせながら現はれ來たり、

「ヤア高チヤン、御苦勞だつたな、ヤ、信者が最早皆歸んだと見えるな」

高「ハイ、みな歸しましたよ、これから貴方と妾と二人の舞臺ですワ、酒でも爛して上げませうか」

妖「ウン一杯つけてもらつても好いが、しかし何だか妙な香がするぢやないか、どこともなしに男臭くて仕方がないがのう」

高姫は素知らぬ顔で、

「ハイ、それやさうでせうよ、ここに猪が一匹絞めてございますもの、ちよつと

御覽なさい、床の下に放り込んでおきましたよ」

妖「何だ、これや人間ぢやないか、ひどい事したものでぢやないか」

高「人間の猪（死體）ですよ、此奴はね、妾がトルマン城にをつた時からスコブツ

ツエン宗の教主だと威張り散らし、大黒主を笠に着たり、一方では大足別をかつ

ぎ、どうにもかうにも仕方がないので、妾の美貌を幸ひ此奴をちよるまかせ、ト

ルマン城の危急を救うたのですよ」

「なるほど、しかしながら、スコブツツエン宗の教祖といへば大黒主様のお片腕

だ。大蛇様の兄弟分、……ウンとどつこい、大蛇のやうな勢ひを持つてゐる立派

な宣傳使だ。どうだ高姫、この坊主に活を入れて生きかへらし、お前の方から色

仕掛けて親切に待遇し、此奴を手蔓として大黒主に取り入り、トルマン國の政權

を握つて了はうぢやないか。さうすりや、スガの宮なんか叩き潰さうと、どうせ

うと此方の勝手だからなア」

「さすがは空助様、よい所に氣がつかれました。どれだけ知恵があるか知れませぬ

ねえ、そんなら此のキューバーを助けても宜いのですか」

「アー、いいとも好いとも、併しながら色をもつて、ちよろまかしてもよいが、要領を得さしては不可ないよ、ちつと俺も妬けるからのう」

「そんな事は御心配下さいませ、へん、それほど安っぽい高姫と思つてもらつちや片腹痛うございますワ」

「俺が此處にゐると話が仕難いかも知れぬ、別室に入つて休むから、そこはお前の力で旨く取り込んでおけ」

「何ほど甘つたるい事を言つても決して怒りませぬね」

「口先ばかりなら、どんなこと言つてもよい。つまりお前が甘く操つて下僕代りに使ひさへすればよいのだ」

と言ひながら別館に姿を隠してしまつた。高姫はキューバーを床下より引き上げ活を入れ、天の數歌を奏上した。ウンと一聲息吹き返し四邊きよろきよる見廻しながら、

「ヤアお前は千草ぢやないか、人の喉を締めたりして氣絶さすとは甚いぢやないか」

高たか 「そんな事は當然あたりまへですよ、よう考かんがへて御覽ごらんなさい。焼餅やきもち焼きの嫌いやな嫌いやな爺おやぢが裏うらに寝ねてゐるのに、お前まへさまが談判だんぱんするなんて出て行きゆなさるものだから、喧嘩けんかしては近所きんじよに「なり」が悪いわると思おもうて一寸ちよつと喉のどに手てをあてただけですよ。息いきを止とめたの殺ころさうのと、そんな大袈裟おほげさな事ことをした覺おぼえはございませぬよ」

キユ 「本當ほんたうにお前まへは今の夫をつとが嫌いやなのか」

「それやさうですとも、好きすだつたらどうして貴方あなたの目めを眩くらまして氣絶きぜつしてゐるのを生きかへらしませうか。妾わたしの今の夫をつとは怒おこるのも甚ひどいけれど又また機嫌きげんの直なほるのも早いはや、アツサリした人ひとですからア。それで今いまも今いまとて夫をつとに相談さうだんしましたら、俺おれに心配しんぱいは要いらない、キューバーさまを可愛かはいがつて上あげるが好よいと言いふのです、何なんと今の男をこいは開ひらけてゐませうがな」

「どちらが開ひらけてゐるのか、弄もてあそばれてゐるのか、テンと譯わけが分わからぬワイ。しかし一旦いつたん氣絶きぜつしてゐたところを呼よびいけたところを見みれば些すこしは信用しんようしてもよいワイ。そんなら今いまの夫をつとには濟すまないが、時々ときどきは御無ごむしん心を言いうても宜よいか、その時ときは頼たのむ

『よ』

「それやさうですとも、貴方の口で貴方が仰有るのですもの、貴方の御自由ですワ。それはさうと、明日はスガの宮に乗り込み、ヨリコ姫と一生一代の問答をやらうと思ふのですが、妾も些つとばかり心許ないやうな気がしてなりませぬ。一つ今晚の間に練習しておきたいと思ひますがなア」

「サア、お前もなかなかの雄辨家だが、ヨリコといふ奴はまた稀代の雄辨家だ。懸河の辨を振つて滔々とやり出す時は、如何なる雄辨家も旗を捲き鋒を収めて逃げ出すのだからう。一つ夜分の宣傳かたがた練習するのも宜からう、本町に出てやつて見たら如何だい。俺は見え隠れに跟いて行つてやるからう」

聞くより高姫雀躍し  
顔に塗つたる薄化粧  
老海茶袴を穿ちつつ  
神官扇を手にとって  
太夫の道中よろしくの

頭の髪を撫で上げて  
派出な単衣を身に纏い  
桐の下駄をば足にかけ  
ソロリソロリと門の口  
肩と尻とを振りながら

そ 反り身になつて本町の

ひとどほ 人通り多き十字街

つき ひかり 月の光を浴びながら

キユーバーを後に従へて

いっとうぜん 悠々然と出で來たり

みち かたへ たたず 道の傍に佇んで

すず ふ 鈴を振るよな聲絞り

「これこれ申し皆の人

けう 大教主

ちぐさ ひめ 千草の姫の演説を

ひととほ 一通りお聞きなされませ

わたし もと 妾は元はトルマン國の

わうひ 王妃と仕へし身の上ぞ

しゅじやうさいど 衆生濟度のそのために

くも お 雲を押し分けて天降り

しせい ちまた 市井の巷に往き來して

てんち つく たま 天地を創り給ひたる

まこと おや 誠の親の御神徳

むげん ぜつたい むし むしう 無限絶對無始無終

あつ めぐ 厚き恵みの御由來を

よ ひとびと 世の人々に宣り傳へ

やちまたぢごく 八衢地獄の苦しみを

たす かみ とこしへ 助けて神の永久に

しづ 鎮まりぬます天國の

たかあまはら 高天原の樂園に

すく みちび とことは 救ひ導き永久に

かは うご たの 變らず動かぬ樂しみを



與へむためのこの旅出

悪く思つたり疑がつて

神をなみしちやいけませぬ

妾は王妃の身であれば

この世に何の不自由も

不足もないのでございます

大慈大悲の吾が心

世界の人の苦しみを

見るに忍びず此の通り

女の纖弱き身をもつて

寒さ暑さの嫌ひなく

世のため神の道のため

難行苦行をしてゐます

皆さまお聞きでありますうが

此のごろ建つたスガ山の

神の館に三五の

教の射場が出来ました

そこを守る神司

玉清別といふ人は

どこの馬骨か知らねども

千草の姫に比ぶれば

まだまだ苦勞が足りませぬ

苦勞もなしに眞實の

香ばし花は咲きませぬ

そののみならずスガ館

傍に建ちし大道場

預かる女はヨリコ姫

花香にダリヤといふ女

問答所の看板を 臆面もなく掲げ出し

世人を煙にまいてゐる そもそも人間といふものは

一寸先の見えぬもの どうして宗教の眞諦が

分る道理がありませんか 天から下つた生身魂

日出神の永久に 宿らせ玉ふ肉の宮

高姫でなくては分るまい これから皆さま見てござれ

明日は館に乗り込んで ヨリコの姫を相手取り

宗教問答おつ始め 誠の道に歸順させ

天晴れ勝つて見せませう 何ほど偉そに言つたとて

オーラの山に立て籠り 泥棒の手下の奴輩に

姐貴姐貴と立てられて 威張つてをつたよな代物が

どうして誠の神の道 完全に委曲に説けませう

皆さま今から言うておく 何ほど仕事かせわしくも

明日一日は張り込んで この方とヨリコの問答を

何方どちらがよいか虚きよか實じつか  
よい判断はんだんをなさいませ  
ああ惟かむながらかむながら神々々 神かみが表おもてに現あらはれて  
善ぜんと惡あくとを立別たてわける ヨリコの姫ひめもさぞやさぞ  
明日あす一日いちにちが斷末魔だんまつま 思おもへば思おもへば氣きの毒どくで  
個人こじんとしては耐たまらねど お道みちのためと人ひとのため  
神かみのおんため國くにのため 往ゆかねばならぬ吾わが思おもひ  
皆みなさま察さつして下くださんせ 何なにも好このんで爭論さうろんを  
やりたい事ことはなけれども 弱よわきを助たすけ強つよきをば  
挫くじかにやおかぬ義侠心ぎけふしん これが黙だまつてをられうか  
此方こちらの説せつが勝かつたなら ヨリコの姫ひめを叩たたき出だし  
その跡釜あとがまに千草姫ちくさひめ 神かみの司つかさとなりすまし  
誠まことの教をしへを宣傳せんでんし スガのお宮みやを祀まつりかへ  
へグレ神社じんじやといたすぞや へグレのへグレのへグレ武むしや者

へグレ神社の大神は 三十三相は未だ愚か

五十六億七千萬 ミロクの活動遊ばして

此世の中を天國の 常磐堅磐の樂園と

立替へ遊ばす經綸ぞや 喜び遊ばせ人々よ

神の言葉に嘘はない きつと成就さして見せう

此世を創りし神直日 心も廣き大直日

ただ何事も人の世は 直日に見直し聞き直し

世の過ちは宣り直す 神の教をかしこみて

此世を亂し世の人を 誤らしむるヨリコ姫

それに従ふ奴輩を 片つぱしから言向けて

改心さして見せませう アア勇ましや勇ましや

明日の吉き日ぞ待たれける

キューバーは後ろの方から、蟻が風を引いたやうな響のある聲を出して、

神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立たて別わける

此この世よを創つく造くりし神かみ直なほ日ひ 心こころも廣ひろき大おほ直なほ日ひ

ただ何なに事ことも人ひとの世よは 直なほ日ひに見み直なほし聞きき直なほす

ウラナイ教けうの御おん教を 皆みなさま耳みみを掃さう除ぢして

一いち言ごん半はん句くも漏もらさずに 生いき宮みやさまの御ご託たく宣せん

しつかりお聞きき遊あそばせよ 下したつ岩いは根ねの大おほミロク

日ひ出で神のかみの生いき宮みやと 現あらはれたまひし千ち草くさ姫ひめ

へグレのへグレのへグレ武むし者や へグレ神じん社しゃの大おほ神かみと

現あらはれ此こ處こに下くだりまし 鬼おにや大を蛇ろちの魂たましひに

とりつかれたる憐あはれなる 人ひとの難なん儀ぎを救すくはむと

大だい慈じ大だい悲いひの心こころもて 現あらはれたまひし有あり難がたさ

スガの宮みや居あの神しん館くわんに 頑ぐわん張んばり暮くらすヨリコとは

天地てんち雲うん泥でいの違ちがひぞや めつたにこんな生いき神がみが

再ふたび下くだることはない 時ときは來きたれり時ときは今いま

爺さまも婆さまも孫つれて 近所合壁誘ひ合せ

明日の大事な談判を お聞きにお出でなさいませ

よい後學になりまする そののみならず神様に

尊い御縁が結ばれて 萬劫末代永久に

おかげの泉に浸りつつ 此世このまま天國の

生存權が得られます 必ず疑ひ遊ばすな

スコブツツエン宗の大教主 キューバーでさへも尾をまいて

生宮様の後につき お伴に仕へてをりまする

これだけ見ても皆さまよ 生宮さまの御神徳

ただでないのが分るだろ ああ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

と歌ひながら、スガの町々を 残る隈なく東西屋もどきに歩いてしまつた。

(大正一五・六・三〇 舊五・二一 於天之橋立なかや別館 加藤明子録)

第三篇 轉化退閑

第一七章 六櫂問答（一八二六）

懺悔生活の僞君子、スコブツツエン宗の教祖と名乗る妖僧キユーバーは、ダリヤ姫に對する戀衣のすげなくも破れしより、もとより心の汚い便所掃除、糞度胸を据ゑ、捨臺詞を残して、問答所より屁のごとく消え去つた。あとはヨリコ、花香、ダリヤの三人は、なにほど女丈夫でも男の受持つべき掃除は永く續かないとて、藥種問屋の主人イルクに掛合ひ、門番のアル、エスを臨時掃除番として、手傳はしむることとなつた。朝も早うから、新參者の掃除番はキユーバー、ダリヤが奮戦苦闘の古戦場、上雪隠の掃除しながら、アル「オイ、エス、主人の言付けだから是非もなく、エースといつて返事はしたものの、本當に糞忌々しい、バカ臭い目に遇ふぢやないか、エー、これだから人

に使はれるのは辛いといふのだ」

エス「何ほど辛いといつても仕方がないぢやないか、何一つ人に勝れた藝能が

「アル」といふでもなし、雪隠の蟲のやうに、ババの尻ばかり狙つてゐるやうな

事で、氣の利いた大役も勤まりさうなことがないぢやないか。いつも雪隠といふ

やつは、紛擾の種を蒔く奴だ。昨日もスコブツツエン宗の小便使、キューバーと

かキュー「フン」とかいふ糞坊主が、ダリヤさまに糞糟にこきおろされ、犬の糞

のやうに言はれ、終ひの果にや、糞然として屁つ放り腰で雲を霞と逃げ散つたり

といふ爲體、その跡釜に据ゑられた俺たちアまるつきり雪隠蟲だ。しかし雪隠蟲

だつて落膽するにや及ばないよ、しばし糞壺の中でウヨウヨしてる間に羽が生え、

立派な金襴の衣を着けて、金蠅となり、ヨリコ姫の頭へでも止つて糞小便を放り

かけるやうになるのだからのう」

アル「門番も今日はお尻の門番と

成り下がりけり糞忌々し



仰あふぎ見みて穴あな恐おそろしと雪せん隠ちむ蟲むし

泣なくに泣なかれぬ糞くそを被かぶりつ

世よの中なかの臭くさい味あぢはひ【しり】の穴あな

やがて羽は衣ごろも着つくる雪せん隠ちむ蟲むし

金きん欄らんの衣ころもまとへば糞くそ蟲むしも

人ひとの頭あたまにとまり糞くそ放ひる

エスヨリコ姫ひめダリヤと【しり】(知あひ)合あひの穴あななれば

肥こえ(【光くわう榮えい】)ならむと糞くそ蟲むしいふらむ

美うるはしき乙をとめ女の尻しりはよけれども

糞くそ婆ばばの尻しりいと臭くさきかな

天てん香かうは雪せん隠ちむ空むなしうせぬといふ

日ひに三さん回くわいの飯はん禮れいありせば

かく話してゐるところへヨリコ女帝が盲腸、結腸、直腸邊りの大清潔法を施行すべく、やつて來た。アルはこれを見て、

「あな尊とひ【しり】の君の御降臨

【アル】にあらぬ恥を見しかは

ヨリコ「雪隠といふ字は雪に隠るなり

白妙の衣まとふ糞蟲

エス「白妙の衣をまとひて糞蟲は

黄金の餌朝夕に喰ふ

ヨリコヨリコアル エスの二人ふたりの君きみよ心こころして  
黄金佛わうごんぶつにならぬやうにせよ

アルアル【アル】望のぞみ抱かかへし吾われは糞度胸くそどきよう  
すゑてかかりぬ便所掃除はばかりさうぢに

エスエス【アル】望のぞみなどと【しり】顔がほするでない  
糞奴くそやつこめが【いばり】散ちらすな

ヨリコヨリコアル エスの二人ふたりの君きみよ今いま少しば時し  
はばかり玉たまへ吾わが歸かへるまで

アル『はばかりの掃除はすれどこの男』

はばかりながら腕に骨あり』

エス『えらさうに【しり】顔なしてブツブツと

口先過ぎてババ垂れるなよ』

兩人はヨリコ姫の用を足す間、便所遠く庭の隅のパインの下にクルツプ砲の難  
を避けた。

アル『いかほどに容姿美はしき女帝さへ

下から見れば愛想やつきむ』

エス ㊦ 裏門うらもんを開ひらいて出いづる兵卒へいそつの  
ラツパの聲こゑも勇いさましきかな ㊦

㊦ バカいふな〔ばば〕垂たれ腰こしを眺ながめたら  
かたい約束やくそくも小便せうべんしたくならむ ㊦

㊦ 草木くさきもゆる谷たにの流ながれをピューピューと  
鶉越ひよどりこえの進すすむよしなし  
谷たにの戸とを開ひらいて出でるは鶯うぐいすの  
聲こゑならずして鶉ひよどりの聲こゑ ㊦

□ おも 思うたよりヨリコの姫の長雪隠

□ 心短き俺はたまらぬ

□ こんなことヨリコの姫に聞こえたら

糞腹立てて尻や持て来む

何事も皆しりの穴ヨリコ姫

尻もて来れば猫婆きめる

猫婆をきめる積りでキューバーが

便所掃除請合しならむ

こつぴどくこき卸されて糞腹立て

糞垂れ腰の糞坊主去ぬ

ヨリコ姫は便所から、しとやかに出て来た。アル、エスは先を争うて手洗鉢の

前まへにより、柄杓ひしやくの柄えをとり水みづを無暗むやみやたらにかけながら、

アルべんてん 辨天けんてんの化身けしんのやうな女帝にょてい様のさま

お手洗てあらふさへ【しやく】の種たねなる』

エス『このやうな美人びじんを妻つまにする男をとこ

面つら見るさへも小こ【しやく】にさはる』

ヨリコ『八尺はちしやくの二人ふたりの男をとこが漸やっやくに

五勺ごしやくばかりの水みづを呉くれたり

雪隠せつちんの掃除さうぢも神かみの御恵みめぐみよ

天香てんかうさまの出世しゅつせ見みたまへ』

アル「何ほどに出世したとて何時までも

屍掃除とはバツとしませぬ」

ヨリコ「左様ならアルさまエスさま別れませう

また明日の朝會ふを楽しみに」

と言ひながらヨリコ姫は吾が居室に歸つて行く。

ヨリコ姫、花香、ダリヤ、アル、エスの聯合家族は、食堂に集まつて四方山の話にふけりながら朝飯を喫してゐると、表の玄關に向かつて甲走つた女の聲が聞こえて來た。

高姫「ハイ、御免なさいませ、ちよつと物をお尋ね申します。ヨリコさまといふ無冠の女帝さまはお宅でございませうかな、宗教問答のためにウラナイ教の教主千



草の高姫が参りました。別に驚くやうな女ぢやございませぬ、第一靈國の身魂、日出神の生宮、下津岩根の大彌勒の化身でございますよ』  
と呼ばはつてゐる。

ヨリコ「ホッホホホ、朝つばらから、どこの狂人か知らないが、妙な事を言うて來よつたものだ。ダリヤさま、妾の代理となつて少時相手になつてやつて下さいな』

ダリヤ「女帝様の仰せではございますが、狂者を相手にすることは眞平御免を蒙りたうございます』

ヨリコ「第一線に貴女出て下さい、もしも戦況危ふしと見た時は第二線として花香に行つてもらひます。その第二線が破れました時、殿としてこのヨリコが大獅子吼をいたしますからね』

アル「もしも女帝様、あんな狂者にダリヤ姫さまなんか出すのは勿體ないぢやありませぬか。先陣は私が勤めますから、何卒この役目をアルに譲つて下さいませ、タカが知れた狂者ぢやありませんか』

ヨリコ「お前さまは決して相手になつちやいけませぬよ。いくつくらゐの女か、ちよつと様子を調べて来てもらひさへすれば宜しい」

アル「ハイ、承知いたしました。オイ、エス、お前は俺の副將軍だ、ソツと後から従いて来い」

と言ひながら、早くも玄關口に立ち塞がり、

「イヨー！ 何とマアチツとばかり年はよつてゐるが、ステキなものだなア」

高「これ奴さま、ナインぢやいな、失禮な、お客さまの前で立ちはだかつて、挨拶一つ知らない穀潰しだな、僕のやり方を見りや大抵主人の性質が分るものだ。

この下駄の脱ぎ方といひ、亂離骨灰、まるつきりなつちやゐないぢやないか。へんえらさうに宗教問答所なんて、まるつきり狂者の沙汰だ」

アル「オイ、高姫とかいふ中婆さま、人の所の宅へ出て来て、履物の小言まで言うてくれな、俺たちの悪口をつくのならまだ蟲を堪へておくが、天下無雙の才女、ヨリコ姫女帝の悪口まで吐かすにおいては、斷じてこの玄關は通さない。エー糞忌々しい、婆の来る所ぢやない、屁なつと嗅いで去んでくれ」

「ホツホホホ、お前がさう言はいでも、この高姫がヨリコ姫の膏をしぼり、蛸を釣り灸をすゑ、鼬の最後屁を放らして往生さしてやるから臭い顔して待つてみなさい、ド奴の糞奴め。こんなガラクタ男を使うて、えらさうに構へ込んでゐるとは誠にもつて噴飯の至りだ、ホツホホホ」

「エー、とても、こんな氣違ひ婆は俺たちの挺棒に合はない、サア第一線だ第一線だ」

と言ひながら奥に飛び込み、

アル「もしもし女帝様、竹に、鶯、梅に雀といふやうな婆が來ましたよ」

ヨリコ「ホツホホホそれは木違ひ鳥違ひと言ふのだらう、サアこれから梅に雀の婆さまに向かつて、戦闘開始をやつて下さい」

ダリヤ「ハイ、及ばずながら第一線に立ちませう、どうか後援を頼みます」と言ひながら玄關口に出た。

ダリヤ「玉鉾の道の問答せむものと

遙々尋ね來たりし君はも

いざさらば問答席へ通りまし

及ばずながら案内申さむ

高たか「むづかしき歌よみかけて高姫を

困こまらさむとす猾ずるさに呆あきれし

ともかくも此この家の奥おくへ踏ふん込んで

狸たぬきの化ばけの皮かはむいて見みむ

と言いひながら、ダリヤ姫ひめに従したがひ問答席もんだいせきについた。

ダリヤ「いざさらば寛くわんぎ給たまへ椅子いすの上へに

世よのことごとは【しり】の穴あなの君きみ」

高姫たかひめ 賢さかしげな事ことを言いへども何處どこやらに

息いきのぬけたる汝なれの顔かほかも

汝なれこそはヨリコの姫ひめの身代みがはりと

吾わが慧眼けいがんに見みえたり如何いかにや

妾わらわこそヨリコの姫ひめの妹いもうとよ

ダリヤの花はなの名なを負おひし姫ひめ

何なんなりと問答遊もんたふあそばせ立板たていたに

水みづの流ながるごとく答こたへむ

美うつくはしき女をんなにも似にず出だし拔ぬけに

大法螺おほほらを吹ふく【しり】の太ふとさよ

いざさらば吾が問ふことに答へかし

今日こそ汝が生死の境ぞ

如何ならむ賢き人の來たるとも

後へはひかぬ弦離れたる征矢

高姫いかい目をむいて  
ダリヤの姫の面上を

ハツタと睨み大口を  
斜めに開き白齒をば

むき出しながら手を振つて  
演説口調で語り出す

高姫「お前はヨリコの妹と  
名乗つたからは高姫が

宣る言靈を  
川瀬の水の流る如

答へて裁くでござらうな  
よしよしそんなら高姫が

ひとつの問題出しませう この世の中を造りたる

誠の神は何神か 何とぞ聞かしてもらひませう

それが分らぬやうな事で 問答所の役員と言へませうか

サアサア如何に」と詰寄れば ダリヤは二ツコと打ち笑ひ

ダリヤ「いかなる難しいお尋ねと 思つてゐたのに何のこと

この世の御先祖は言はいでも 世界に知れた嚴靈

國常立の神様よ この神様は泥海を

造り固めて山川や 草木の神まで生みました

吾らの誠の親です」と 言へば高姫反りかへり

フフンと笑ふ鼻の先

「三五教のトチ呆け 大根本の根本の

誠の神は大彌勒 底津岩根の神様よ

人間姿の分際で 誠の神は分らうまい

そんな下らぬ事いうて 澤山の人を欺すより

早くすつこんでをりなされ お前ぢや事が分らない

肝腎要の當の主 ヨリコの姫を呼んでおいで

あまりに相撲が違ふので 阿呆らしくて話になりませぬ

言へばダリヤはうつ向いて 顔を眞赤に染めながら

すごすご立つて奥に入る つづいて出て来る美婦人は

天女にまがふ花香姫 千草の高姫見るよりも

いと慇懃に會釋して 靜かに梅花の口開き

聲しとやかに 妾こそ ヨリコの姫に仕へたる

梅の花香と申します 何とぞお見知りおかれませ

いかなる問答か知らねども 即座にお答へ申しませう

遠慮會釋は要りませぬ 何なとお尋ねなさいませ

言へば高姫反りかへり

「妾こそ誠の救世主 高天原の靈國の

第一天人の靈魂ぞや 下津岩根の大彌勒



三千世界の救世主  
日出神と現はれて

トルマン國のスタガの町  
天降りたるウラナイの

教の道の神柱  
必ず粗相のないやうに

謹み敬ひ吾が言葉  
胸にたたんでトツクリと

考へなされよ花香さま  
サアサアこれから高姫が

貴女に質問いたすぞや  
そもそも天地の根本の

大根本の根本の  
そのまた根本の根本の

まだまだ根本の根本の  
昔の昔のさる昔

ま一つの昔のまた昔  
ま一つの昔の大昔

またも昔のその昔  
ドツと張込んでその昔

猿が三匹飛んで来て  
三千世界を掻きまはし

この世に暗と明りと雨降り  
来たした譯は如何ですか

この譯聞かしてもらひませう  
言へば花香は噴き出だし

彌勒の彌勒のまだ彌勒  
ま一つ彌勒のその彌勒

日の出の日の出のまだ日の出 も一つ日の出のその日の出

昔の昔の大昔 猿が六匹飛んで来て

一つは雪隠を掻きまはす 一つは頭をかきまはす

一つは恥をかきまはす 一つは借用證文書きまはす

一つはお粥をかきまはす 一つはそこらをかきまはす

も一つお尻をかきまはす こいつの謎がとけたなら

お前さまの問題に答へませう 〇 などと分らぬ豫防線

鐵條網を張りまはし 用心堅固に備へしは

さすがはヨリコの妹と 生れし甲斐ぞ見えにける

高姫拳を固めつつ 力限りに卓を打ち

「これやこれや女つちよ瘦せ女郎 そんな事言うて高姫を

煙りに捲かうとはづうづうしい お前のやうな分らない

女を相手にやしてをれぬ 當の主人のヨリコ姫

早く此の場へ引き出せよ この高姫の辨舌で

道場破りをして見せる  
アア面白い面白い

いよいよこれから正念場  
氣の毒なのはお前たち

折角建てた神館  
城明け渡しスゴスゴと

逃げねばならぬ断末魔  
いよいよこれが悪神の

世の持ち終りとなつたのだ  
ああ惟神々々

ウラナイ教の御神徳  
今更感じ入りました

花香姫は高姫のあまりの強情に呆れ果て、暗に打ち出す鐵砲玉に持てあましてつ  
つ匆々としてヨリコの居室に駆け込んでしまった。

（大正一五・七・一 舊五・二二 於天之橋立文珠なかや別館 北村隆光録）

第一八章 法城渡（一八二七）

ヨリコ姫は訪ね來し高姫の、酢でも蒟蒻でも、一條繩ではいけぬ【やんちや】  
牛たることを看破し、下から上まで白綾子づくめの衣装を着、髪を長う後ろに垂  
れ、中啓を手に持ち、絹摺れの音サラサラと、廊下を寛歩しながら悠悠然と問答  
椅子に寄りかかり、

ヨリコ 何神の化身にますか白梅の

花の薰も高姫の君

久方の天より高く咲く花も

君の装に及ばざるらむ

君こそはウライナイ教の神柱

日の出の神と聞くぞ尊き

高姫 〇お世辭をばならべて稜威高姫を

からか  
擲揄ひたまふ面の憎さよ

つみしやう  
追従を喰ふよな神でござらぬぞ

ひめ  
ヨリコの姫よその顔洗へ

けふ  
今日こそは汝が生死のさかひ目ぞ

ぜんあくわ  
善惡別ける神のおでまし

これはしたり高姫様の御言葉

ひめ  
ヨリコの姫もあきれかへりぬ

わじは  
妾こそ誠の神にヨリコ姫

しこ  
醜の荒風いかで恐れむ

おそ  
恐ろしきその顔は奥山の

いはや  
岩窟に住める鬼かとぞ思ふ

何なんといふ失禮しつれいなことを吐ぬかすのだ

泥棒どろぼう上がりの山やま子女こをんな奴め

みやびなる歌うたよみかけて神かみの宮みや

汚けがさむとするずるさに呆あきれし

これからまことは誠まことの日ひの出でが現あらはれて

汝なれが心こころの闇やみを照てらさむ

吾わが靈たまは晝夜ひるよるさへも白雲しらくもの

空そらに輝かがやく月つき日ひなりけり

久方ひさかたの天あめより下くだるエンゼルの

内流ないりゅう受けし吾われぞ生神いきがみ

㊦ 猪ちよこざい口くち才さいな泥どろぼう棒ぼう上あがりの分ぶんざい際さいで

生いきがみ神がみなどとは尻けつが呆あきれる

尻けつ喰くらへ觀くわんのん音ん様さまの眞ま似ねをして

装よそほひばかり胸むねの狼おほかみ ㊦

㊦ 狼おほかみか大神おほかみさま様さまか知しらねども

吾われの靈みたまはいつも輝かがやく

吾わが靈たまは空そらに輝かがやく日月じつげつの

光ひかりにまして四よ方もを照てらさむ ㊦

㊦ ぬかしたり曲まがつ津つの巢すぐふ靈たましひで

尻しりもちつきひ餅もちつきひ月つきひ日の螢ほたるの光ひかり奴め ㊦

五月雨の闇を縫ひゆく螢火も

夜往く人のしるべとぞなる

螢火を數多集めて文をよみ

國の柱となりし人あり

えらさうに理窟ばかりを夕月夜

山にかくれてすぐ闇とならむ

大空に神の御稜威も高姫の

光を見れば目も眩むらむ

君こそは大高山の山伏か

朝な夕なに大法螺吹くなり



☞ 法螺貝ほらがひは此世このよの邪氣じやきを拂はらふてふ

誠まことの神かみの神器しんきなりけり

法螺ほら一ひとつ吹ふけないやうな弱蟲よわむしは

この世よの中なかに生いきて甲斐かひなし  
☞

☞ 魂たましひはよしや死しすとも法螺ほらの貝かひ

音高おとたか姫ひめになりわたるかな  
☞

☞ 玄眞坊げんしんぼう法螺貝ほらがひ吹ふきの妻つまとなり

世よを亂みだしたる汝なれぞ惡神あくがみ

法螺ほら吹ふいて錫杖しやくぢやうをふり村々むらむらを

かたつて廻まはる乞食こじき祭文さいもん

オーラ山さん大法螺おほほら吹ふきの山やまの神かみ  
スガの宮みやにてまた法螺ほらを吹ふく

何なんなりと勝手かっな熱ねつを吹ふきたまへ  
科戸しなどの風かぜに伊吹いぶきはらへば

伊吹山鬼いぶきやまおにの再さい來らいと聞きこえたる  
汝なれは此この世よの曲津神まがつかみなる

汝なれこそはミロクミロクと大法螺おほほらを  
吹ふきまくるなる醜しこの曲神まがつかみ

□ こりやヨリコ口くちに番所ばんしよがないかとて  
この生神いきがみに楯たてをつくのか□

□ たてつくか嘘うそをつくかは知らねども  
汝なれがほこには手答てごたへもなし□

□ 手答てごたへのなき歌垣うたがきに立つよりも  
言靈車ことたまぐるまめぐらして見みむ  
いざさらば吾わが訊問しんもんに答こたへかし  
汝なれが生死せいしの別わかるるところぞ□

□ いかならむ問ひにも答へまつるべし

早河の瀬の流るる如くに□

高姫拳を握りつつ

雄猛びなして立ち上がり

ヨリコの姫を睨つけて

聲の調子もいと荒く

面上朱をば注ぎつつ

扇パチパチ卓を打ち

□ これこれヨリコの女帝さま これから直接問答だ

天地の元を創りたる

大根本の根本の

生神様の名は如何に□

言へばヨリコは笑たたへ

□ 如何なる難題ならむかと 思へばそんな事ですか

天地の元は無終無始

無限絶對永劫に

静まりぬます國の祖

國常立の神様よ

この一柱の神おきて

外に誠の神はない

如何でござる高姫たかひめと

顔さしのぞけば高姫たかひめは

フフンと笑ふ鼻はなの先さき

何なんと分わからぬ神司かむつかさ

あきれて物が言へませぬ

大慈大悲だいじだいひの神様かみさまは

天下萬民てんかばんみんことごとく

安養淨土あんやうじやうどに救すくはむと

心こころをくばりたまひつつ

底津岩根そこついはねに身みをかくし

時節じせつを待つて種々いろいろの

艱難苦勞かんなんくろうのそのあげく

いよいよミロクおほかみの大神おほかみと

ここに現あらはれましますぞ

その神様かみさまの生宮いきみやは

どこにござるかヨリコさま

すつかり當あてて下くださんせ

もしも妾わたしが負まけたなら

現げんざい在まへにお前まへさまの目めの前まへで

生いきたり死しんだりして見みせる

言いへばヨリコは嘲笑あざわらひ

貴女あなたの仰おほせは違ちがひます

神かみの御書みふみを調しらぶれば

此世このよの初はじめと在ます神かみは

國常立くにとこたちの大神おほかみぞ

その他の百ももの神々かみがみは

皆みなエンゼルの又またの御名みな

これより外ほかにありませぬ  
言いへば高姫たかひめグツと反そり

「ホホホホホホホホホホ  
これや面白おもしろい面白おもしろい

三五教あななひけつの盲神めくらがみ　こんな事ことをば偉えらさうに

世よの人々ひとびとに打ち向むかひ　誠まことしやかに教をしへるのか

國常立くにとこたちの大神おほかみが　もしも此この國くにに御座ござるなら

妾わたしの前まへに連れ參まゐれ　それが出來できない事ことなれば

空想理想くうさうりさうの神かみでせう　この高姫たかひめの問とふ神かみは

生いきた肉體にくたい持もちながら　生いきて働はたらき生いきながら

人ひとを救すくる神かみですよ　その神様かみさまはどこにある

それを知しらしてもらひたい  
言いへばヨリコは打うち笑わらひ

「肉體にくたいもつてます神かみは　産土山うぶすなやまの聖場せいぢやうに

千木高知ちぎたかしりてはおはします　神かみ素盞鳴かむすさのをの大御神おほみかみ

三千世界さんぜんせかいの太柱ふとばしら　これより外ほかにはありませぬ

貴女あなたの守まもるウライナイの　お道みちの神かみは何神なにがみか

確しつり妾わたしは知しらねども  
大たいした神かみではござるまい』

言いへば高たか姫ひめ腹はらを立たて

神かみは清せい淨じやう潔けつ白ぱくで  
仁じん慈じ無む限げんに在ましませば

兔うの毛けの露つゆの惡あくもな  
人ひとを殺ころして金かねを奪とり

數あまた多たの男だん女ぢよを誑たぶらかし  
泥どろ棒ぼう稼かせぎをするやうな

輩やからを使つかふ神かみならば  
誠まことの神かみではござるまい

お前まへの素す性じやうを調しらぶれば  
オーラの山やまの山さん賊ぞくの

親おや分ぶんしてゐた曲まが津つか神かみ  
神かみ素す盞さん鳴なるの大神おほかみの

正ただしく清きよく鎮ちん座ざます  
この聖せい場ぢやうに腰こし据すゑて

神かみをば汚けがす曲まが津つか神かみ  
早はやく改かい心しんした上うへで

一いち時じも早はやくこの席せきを  
退しりぞきなされヨリコさま

何なにほど改かい心しんしたとて  
白はく布ふに墨すみがついたなら

洗あらうても洗あらうても洗あらうても  
墨すみのおちないその如ごとく

どうせ貴あなた女めは傷きず者ものよ  
傷きずある身み靈たまが神しん業げふに

奉仕ほうしするとは理りに合あはぬ　　これでも返答へんたふござるかな

この高姫たかひめは濟すまないが　　泥棒どろぼうなどはやりませぬ

大根本だいこんぼんの根本こんぼんの　　誠まことの神かみの太柱ふとばしら

妾わたしに傷きずが若もしあれば　　どうぞ探さがして下くださんせ

そもそも誠まことの神様かみさまは　　身靈みたま相應さうおうの理りによつて

善ぜんには善ぜんの神守かみまもり　　惡あくには惡あくの神かみがつく

傷きずある身靈みたまにや傷きずの神かみ　　清きよい身靈みたまにや清きよい神かみ

これが天地てんちの相應さうおうだ　　言いへばヨリコは俯うつむいて

高姫たかひめ一人ひとりのこ　　すごすご一室ひとまに入りいにける

高姫たかひめ後あとを見送みおくつて　　大口おほぐち開あけて高笑たかわらひ

「オホホホオホオホホ　　狐きつねや狸たぬきの正體しやうたいを

日出神ひのでのかみの御前おんまへに　　包つつむよしなく現あらはして

尻尾しつぽを股またに挟はさみつつ　　すごすご奥おくへ逃にげ込こんだ

ほんに小氣味こきみのよい事ことよ　　もうこの上うへはヨリコとて



この高姫に打ち向かひ  
楯つく勇氣は御座るまい

誤り證文認めて  
今日から貴女にこの館

お任せ申し奉る  
罪ある妾の身の素性

何とぞ隠して下されと  
哀訴歎願と來るだらう

アア面白や心地よや  
今日からこれの神館

棚の上から牡丹餅が  
落ちて來たよな鹽梅に

吾が手に入るは知れたこと  
もしも問答に負けたなら

妾の役目を渡すぞと  
書いた看板が證據ぞよ

待てば海路の風が吹く  
神が表に現はれて

善惡正邪を立て別ける  
この御教は三五の

決して神の教でない  
今日の當り高姫が

實行なしたる生言葉  
生證文のウラナイ教

千秋萬歳萬々歳  
ウラナイ教の大神の

御前に謹み畏みて  
今日の生日の足る時の

成功守り玉ひたる 恵みに感謝し奉る

ああ惟神々々 御靈幸倍ましませ」と

四邊かまはず大聲を 張り上げながら唯一人

傍若無人の振舞ひは よその見る目も憎らしき。

話變つて玄關口には、アル、エス、キューバーの三人がしきりに口論を始めて

ゐる。

アル「こりや、便所掃除の糞坊主奴、バラモン署へ訴へるなんて脅喝文句を竝べ立て、犬の遠吠的に逃げ失せながら、づうづうしくも何しにやつて來やがったのだ。エエ汚ない汚ない臭い、糞の臭氣が鼻をついて耐らないワ、サア去んだり去んだり」

キユ「ハハハハハ、馬鹿いふな、ここは今日から俺の領分だ。貴様こそ何處かへ出て往け、今奥で高姫さまと女帝との大問答が始まつてゐるやうだが、きつと高姫さまの勝ちだ。これやこの看板を見い、今にこの看板通り勵行するのだ」

エス「ハハハハハこの糞坊主奴。高姫とかいふ婆に泣きついて應援を頼んで来よつたのだな、何と見下げ果てた腰抜け野郎だな。八尺の褌をかいた男が何だい、女の加勢を頼んで来るとは卑怯にも程があるではないか、糞垂れ坊主奴。まごまごしてゐると笠の臺が無くなるぞ、サアサア足許の明るいうち股に尾を挟んで歸つたり歸つたり」

キユ「ハハハハハ馬鹿だのう。足許に火が就て、尻が熱うなつてゐるのにまだ貴様達は氣がつかぬのか。まあ見てをれ、今に法城の開け渡しと来るから、その時は吠面かわくな。また藥屋の門番に逆轉して番犬の境遇に甘んじ、ワンワン吠えながら勤めるのが關の山だ。何とあはれな代物だな、ウフフフ」

問答席にはヨリコ、花香、ダリヤ姫の三人が高姫とさし向かひになり、法城開け渡しの掛合中である。

ヨリコ「千草の高姫様、すつぱりと法城を開け渡しますから受け取つて下さい。貴女の問答には決して負けるやうな女ぢやありませんが、妾も一つ感じた事がございます。何ほど立派な器でも焼きつぎにした器はやつぱり傷物です。貴女の最

前おつしやつた通り、いかにもオーラ山の山賊の女頭目として世人を苦しめ、あらゆる罪惡を犯して來ました。かやうな罪深い身靈をもつて、至粹至純なる大神様の前に仕へまつるのは冥加の程が恐ろしいございます。たうてい妾は汚れた罪の重い體、神様の御前に出る資格はございません。貴女は今日までどんな事を遊ばしたか神ならぬ身の妾、すこしも存じませぬが、妾に比べては餘ほど清らかなお身靈と拜察いたします。これから一まづスガの藥屋に引き取りますから、後は御勝手になさいませ」

高姫 「ホホホホ、なるほど、お前さまも比較的よく物の分る人だ。最前生宮の言うた言葉に感激して身の罪を恥ぢ、法城を開け渡す、その御精神、實に見上げたものですよ。しかし傷物はどこまでも傷物ですから、足許の明るい中、トツトとお歸りなさるがよからう」

「妾の妹の花香、ダリヤも妾に殉じて退席すると言ひますから、どうかこれも御承知を願ひたうございます」

「なにほど上面は綺麗でも傷物のお前さまに使はれてをつた代物だから、どうせ

完全な器ぢやあるまい。自發的に退かうといふのはこれも感心の至りだ。何とまあ神界の御經綸といふものは偉いものだな、ホホホホと笑壺に入つてゐる。そこへキューバーが得意面を晒し肩肱を怒らし、大手を振つて四人の前に入り來たり、

「千草の高姫どの天晴れ天晴れ、功名手柄お祝ひ申します。ヤイ、ヨリコ、花香、ダリヤの阿魔女さまア見やがれ。俺の權勢はこの通りだ。サアこれから玉清別の野郎も、アルもエスも叩き拂ひだ。エエ、臭い臭い、鼻が汚れるワ、腐り女、腐り野郎奴、一刻も早く出て失せろ」

と仁王立ちになり、蜥蜴が立ち上がったやうなスタイルで四邊キヨロキヨロ睨め廻してゐる。

(大正一五・新七・一 舊五・二二 於天之橋立なかや別館 加藤明子録)

## 第一九章

舊場歸(一八二八)

千草の高姫、キューバーの兩人は意氣衝天、猛火の燎原を焼くがごとき荒つばい鼻息で、玉清別以下、スガの宮の關係者一人も残らず叩き出し、天から降つて湧いたる儲ものに、嬉しさあまつて現三太郎となり、空助が北町のウライナイ教本部に寝てゐる事も打ち忘れ、あまり蟲は好かねども、言靈戦の大勝利を得せしめた原動力ともいふべき天然坊のキューバーを此上なきものと褒めそやし、聖場に立籠つて天下併呑の夢をむさぼつてゐた。

キユ「モシ、生宮様、キューバーの働きはチツとばかり腕が冴えてゐるでせう、決して生宮様御一人のお手柄ぢやござりますまい」  
高姫「そら、さうだとも、車も兩輪なければ運轉しない、人間も二本の脚がなければ歩けない道理だからな」

「そら、さうでせうとも、お飯食べる時でも片手ぢや駄目ですから。箸だつて二本なくちや、香の物だつて、はさむ事は出来ませぬ。神代の昔、那岐那美二尊は天浮橋に立つて陰陽の息を合せて、いろいろの神様をお造り遊ばしたものですもの。どうです、ここで舊交を温めて拙僧は伊邪那岐命となり、生宮様は伊邪那

美命みこととなり、トルマン國こくを振りだしに印度七千餘國いんどしちせんよこくは申すもさらなり、この地ちのあらむ限り鵬翼ほうよくを伸ばさうぢやありませんか。あなたもトルマン國こくの王妃わうひとなり遊あそばした腕利うでききだから、そのくらゐの事は、お考かんがへでせうな」

「そんなことア、キューバーさま、いふだけ野暮やぼだよ。三千世界さんぜんせかいの救世主きうせいしゆ、底津そこつ岩根いはねの大彌勒おほみろくぢやないか、この生宮いきみやは天てんもかまへば地ちもかまふ、五十六億七千萬ごじふろくおくしちせんまんの小宇宙せううちうをも統一とういつする天來てんらいの神柱かむばしらだもの、このチツポケな地球ちきうぐらゐ、統一とういつしたつて、廣大無遍くわうだいむへんの宇宙うちうに比ぶれば蟲むしの眉毛まゆげに生わいた蟲むしの放つた糞くそに生わいた蟲むしの、その蟲むしの糞くそに生わいた蟲むしの放つた糞くそぐらゐのものだよ」

「何なんとマア大きな事ことを仰有おつしやるかと思へば、小ちひさい事ことまで御説法遊ごせつぽふあそばすのですな」  
「きまつた事ことだよ、至大無外しだいむくわい、至小無内しせうむないの彌勒みろくの御神權ごしんけんを具備くびしてゐる救世主きうせいしゆですもの」

「生宮いきみやさまの廣大無遍くわうだいむへんな抱負ほうふには、いかなこのキューバーも舌したをまきましたよ。このキューバーだつてハルナの都みやこに權勢けんせい並びなき七千餘國しちせんよこくの大棟梁だいてうりやう、大黒主様おほくろぬしさまの片腕かたうでですもの」

「これこれキューバーさま、大彌勒さまの前まへでそんな小ちつぽけな事ことはやめて下ください。この神かみは小ちひさい事ことは嫌きらひであるぞよ。大おほきな事ことをいたす神かみであるぞよ、昔むかしからまだ此世このよにない事ことをいたす神かみであるぞよ」

「三あななひけう五ふでさき教けうのお筆先ふでさきそつくりぢやありませんか、フツフツフ。時ときに生宮いきみやさま、あの空助もくすけとかいふ第二號だいにがうをどうするつもりですか」

「ア、あまり嬉うれしくつて、時置師ときおかしの神様かみさまを念頭ねんとうから遺失あしつしてをつた。ヤアこりやかうしてはをられませぬ、キューバーさま、お前まへさまここに待まつてをつて下ください。この成功せいこうを夫をとこに聞きかして喜よろこばすため、ちよつと北町きたまちまで行いつて來きますから」

「モシモシ高姫たかひめさま、私わたしの前まへであまりひどいぢやありませんか。第一號だいいちがうをほつたらかしておいて、第二號だいにがうに秋波しゅうはを送おくるなんて、チツとばかり聞きこえませぬな。何なんぼ行ゆかうと仰有おつしやつても、このキューバーが放はなしませぬよ」

「お前まへさま、自惚うぬぼれもいい加減かげんにしておきなさい、一號いちがうどころか、八號はちがうですよ、要えうするに天保錢てんぼせんだからな」

「こいつアひどい、二文にもん足たらぬと仰有おつしやるのですか、貴女あなたの目めには、それほどこの



キユーバーが馬鹿に見えますかい」

「なに、馬鹿どこかいな、八文といつたら大變立派な人だといふ事だよ、ダンダ  
ン筋の法被を着た仲仕や労働者や、旗持ちを一文奴といふだらう。一文奴で普通の  
人間だ。小説を作つたり、新聞の記事を書いたり、雑誌を著す學者を三文文士  
と言ふだらう。三文文士にならうと思へば大學の門をくぐつて來にや、さう安々  
とはなれませぬからな。それから、ハルナの都のお役所にも諮問（四文）機關と  
いふものがあるだらう、諮問機關に集まつてゐる人は大黒主さまのお尋ねに  
答へるといふ智者學者だ。それから、も一文上に顧問（五文）官といふのがある」

「モシモシ高姫さま、顧問と五文とは違ひますぜ」

「顧問でも五文でも、いいぢやないか、甲も乙も互ひに勝敗、優劣、高下のない  
相手同志をさして五文と五文といふぢやないか、さうだから五文の人間は最も立  
派なものだ。その上が六文だ、六文錢は、軍術の達人眞田幸村の旗印だよ。眞田  
といふ人物は後世まで名を轟かした大坂陣の參謀長だ。七文といふのはなア、昨  
日俺がヨリコ姫をこつぴどく問ひつめただらう、あれが七文だ」

「そら、質問と違ひますか」

「質問でも七文でも【ツ】と【チ】のと違ひぢやないか、そんな【七六】つかしい質問はやめて下さい。その一文上が八文だ、八文が一番結構だよ。も一文やすすと、苦悶といつて苦しみ悶えねばならぬからな、も一文ふやすと、十文だ、銃文といつたら鐵砲の穴だ、尻の穴もヤツパリ銃門の中だよ」

「何とマアお前さまの口にかつたらこのキューバーも盾つけませぬワ、しかしこの八文をどうして下さるつもりですか。よもや八門遁甲の術をもつて拙僧を、埒外へ放逐するやうな事はありませんまいね」

「マア心配しなさんな。今回の功勞に免じてチヨイチヨイお尻くらゐは、ふかしてあげますワ、大彌勒さまのお尻をふかうと思へば竝や大抵のことでは拭きませぬぞや。ヨリコ女帝のお前さまはお尻の掃除をやつてをつたさうだが、あのやうな、アタ汚いお尻の掃除をしてゐるより、大彌勒さまの神徳の籠つた御肥料さまの掃除をさしてもらふ方が、何ほど光榮だか出世だか知れませぬよ、ホツホホホ」

「エー、人をお前さまは馬鹿にしてゐるのだな」

かく話してゐるところへ空助の妖幻坊は高姫の歸りが遅いので、スガ山のト口坂をエチエチ上りながら館の前までやつて來た。

玄關口に佇んで様子を聞けば、境内はシンとして人影もなく、静まり返り、閑古鳥が鳴いてゐる。しかしながら館の奥の方にコソコソと囁く聲が聞こゆるやうにもあるので、ソツと館の裏へまはり、窓から中を覗いて見ると酒肴を眞中におき、高姫、キューバーが意茶ついたり擲掬つたり、面白さうに話し合つてゐる。妖幻坊は腹が立つてたまらず、雷のやうな聲を出して窓の外から、

「コラッ」

と一聲叫ぶや否や、キューバーは驚いて一閃ばかりも飛び上がり、天井裏で禿頭をカツンと打ち、再び板の間に蛙をぶつつけたやうになつて、手足をピリピリとふるはせ、ふんのびてしまつた。さすが、高姫はビクとも動かず靜かに窓の外を覗き、

「ホッホホ何ですか空ちゃん、そんな大きな聲を出したつて、鬻はみやしま

せぬよ。高姫の耳は蚯蚓の泣聲でも聞こえるのですからね、どうか騒がないで  
て下さい。今この坊主をうまくちよろまかして、三五教が百日百夜の丹精を凝ら  
し、建て上げたこの神館を、スツカリと證文つきでもらつたのですからね、マア  
お這入りなさい、人が見たら、見つともないから」  
と平氣な顔で構へてゐる。空助は表にまわり玄關口より大手を振つて入り來たり、  
「一昨日の日の暮に、この坊主と出たぎり、今日になつても歸つて來ないものだ  
から、チツとばかり氣がかりでならないので、スガの町々を尋ねまはり、もう尋  
ねる處がないものだから、ここへやつて來れや、キューバーの野郎をつかまへて、  
何だか妙な目つかひをやつてゐたぢやないか」  
高「空チヤン、そんな野暮なことを言ふのぢやありません。この間も貴方に言  
つた通り、このキューバーといふ山子坊主は、一寸ばかり小利口な奴だから、う  
まくちよろまかして使ひ倒し、今日の成功を勝ち得たのですからね。まだまだ此  
奴を使はにやならぬ用がありますので、一寸いやな奴だけど色目をつかつて、  
【つらく】つてゐるのですよ。天下無雙の英雄豪傑時置師の神さまのやうな立派

な夫があるのに、どうしてこんな蛙の泣き損ねたやうな面した賣僧坊主に、指一本でも支へさす氣遣ひがありますか。そこは貴方の御判断に任せますから、マア御機嫌を直して一杯飲んで下さい。今日からこの館は時置師の神さまの領有權が出来たのですから、高姫の腕前もずるぶん凄いいものでせう。ホツホホホ

空「オイ、このキューバーをこのままにしておけば穢切れてしまふぞ、お前の得意な活とかを入れて、蘇生さしてやつたらどうだい」

「空チヤン、そんな心配要りませぬよ、田圃の蛙を掴んで大地で投げて御覽なさい。丁度この通り手足をのばしてビリビリとふるひ一時は目をまはかしますが、暫くすると目を開け、古池の中へドンブリコと飛び入り、アナタガタガタ オレキレキと泣くぢやありませんか」

「キューバーも蛙にたとへられや、チツとばかり可哀さうだ。命に別條さへなけれや、いいやうなもの、あまり殺生ぢやないか」

「何が殺生ですか、自分が勝手に飛び上がって勝手にフン伸びたのですもの、チツとも吾々にかかり合はないのですから。キューバーが自由の權利を振つて空

中舞ひ上がりちゅうまあがりの術じゆつを演じ、吾々夫婦われわれふうふの酒さけの肴さかなになつてゐるのですもの」

かく話はなすをりしも死眞似しにまねをしてゐたキューバーはムクムクと起き上がり、ワザと空そらとぼけたやうな顔かほして、

「アア、飛行機ひかうきに乗つて大空中たいくうちうを巡行じゆんかうしてゐたと思へば、にはかに雷鳴轟らいめいとどろき暴風ぼうふう吹きまくり、飛行機ひかうきもろとも地上ちじやうへ轉落てんらくし、五體ごたいは滅茶々めちやめちやになつたと思へばヤツパリ夢ゆめだつたかな。これも全く生宮様いきみやさまと時置師ときおかしの神様かみさまの恩頼みたまのふゆだ、南無生神大なむいきがみだいみ明神やうじん歸命頂禮きめうちやうらい謹請再拜こんじやうさいはい謹請再拜こんじやうさいはい」

空もく「ウツフフフ何なんとマア、怪體けたいな坊主ぼうずだのう、一種異様いっしゆいやうの奇病きびやうがあると見える。かういふ病氣びやうきは親おやのある間うちに癒なほしておかぬと一生不治いっしやうふぢの難病なんびやうになるかも知れないよ、ワツハハハハ」

高たか「ホツホホホこれキューバーさま、本當ほんたうにお前まへさまは身みの輕かるい方かたですね。妾わたしまた、お神かむがかりかと思つてをりましたよ」

妖幻坊えうげんぼうは膝ひざを立直たてなほし、居直ゐなほり氣味きみになつて、

「オイ、天然坊てんねんぼうのキューバー、俺おれの女房にようぼうを掴つかまへて何を言いつてゐたのだ、三文さんもんだ

の、五文だの、八文だのと、何のことだい。其方の出やうによつては俺にも一つの蟲がある、サアきつぱりとこの空助の前で白状せい」

キユ「メメメめつさうな、尊い尊い、結構な結構な、生宮さまに對し、私のやうな下劣な貧僧が戀の鮎のと、そんな大それたことが出來ますか、お言葉交すも恐れ多いと存じ忠實に勤めてゐますよ。どうぞ悪くはとらないやうにして下さいませ。何はともあれ千草の高姫さまに、うまくたらし使ひにされてゐるのですからな。いづれ行先はお拂ひ箱だと覺悟を定めてをります」

妖「こりや、高姫、キユバーの申すことに、間違ひなけりや今日はこれで忘れて遣はず。然しながら、此奴を此處においてはチツとばかり都合が悪い。幸ひ北町の本部が空くことになるから、あれをキユバーに呉れてやつたらどうだ」

高「空助さまさへ御承知なら、呉れてやりませう、この館を占領したのもその一部分はキユバーさまの斡旋努力與かつて功ありといふものですからな」

空「オイ、キユバー、お前の功勞に免じて北町の神館を與へるから、すぐさま歸つて休息したが宜からう。神殿も諸道具一切も附け與へるから有難く頂戴せい」

キユ「ハイ、有難うございます。それでは頂戴いたしませう。十分に念入りに掃除をしておきますから、どうぞ、時折りはお遊びにお出で下さいませ」  
妖「いや、これほど立派な神館が手に入った以上は最早必要を認めぬ、また行く必要もない、お前の勝手にしたが宜からう」

言へばキユーバーは喜んで頭ペコペコ下げながら

「ウラナイ教の神館 有難く頂戴いたします」

左様御座ればお二人さま 後でゆるゆるお楽しみ」

などと言葉を残しつつ 北町さしていそいそと

大手を振つて歸り行く。

(大正一五・七・一 舊五・二二 於天之橋立なかや旅館 北村隆光録)



第二〇章 九官鳥（一八二九）

キユーバーは、空助に呶鳴りつけられ、高姫には嘲笑され、お爲ごかしに五百圓で買った北町の家を貰ったことは貰ったものの、空助、高姫のことだから、いつ變替へを言うて来るかも分らない。

キユーバー「エエ本當につまらない、高姫さまの提燈持ちをして町々をふれ廻り、空助の奴は手を濡さずして結構な神館を占領し、千草姫と喋々喃喃、意茶ついてゐるかと思へば、ごふ腹でたまらないワ。待て待て、ここが一つ辛抱のしどころだ、時節を待つて空助を叩き出し、完全に高姫を此方の物となし、スガの神館の神司となつて一つ羽振りを利かしてやらう」

と伊萬里焼の達磨の出来損なひのやうな面構へを晒しながら悄悄と歸つて行く。

北町の神館に歸つて見れば「きちん」と錠が卸り、こじても捻ぢてもちつとも開かない。

キユー「エエ空助の奴、人を馬鹿にしてゐやがる。待て待て、ひよつとしたら隣の

元の家主に鍵を預けておきやがったかも知れぬ」

と呟きながら樽屋の表へ立ちはだかり、

キユ「御免なさい、拙僧はウラナイ教本部の高等役員キユーバーですが、もしや

空助さまが鍵でも預けてはおかなかつたでせうか、一寸お尋ねいたします」

主人の久助は蛙の鳴くやうな妙な聲がするので表へ来て見ると妖僧が立つてゐ

る。

「ヤ、御用でございますかな」

キユ「別に用といふやうな事はありませんが、今日からあの神館は拙僧の所有物

となり居住するつもりです。空助さまが鍵でも預けておきはしませぬかな」

久「たしかに預かつてありますが、……この鍵は誰が来ても渡してくれな……との

仰せ、たとへ貴方がお買ひになつても滅多にお渡し申すわけには参りませぬ」

「元來この家の代金は拙者が三百圓、空助さまが三百圓出して買ったのですから、

當然半分は拙者の物、しかしながら、お前さまも聞いてみられるだらうが、スガ

の宮の神館は問答の結果、空助さまの領有となり、最早この神館は不需用となつ

たので、拙僧せつそうに買かつてくれぬかとお頼たのみだから、残りのこ三百圓さんびやくえんをおつ放ほり出だし今いま買かつて來きたのですよ。怪あやしう思おもはれるのなら、あまり遠とほくもないからスガの神館かむやかたまで行いつて調しらべて來きて下ください」

「あのお金かねはさうすると貴方あなたが半分はんぶんお出だしなすつたのですか、へエー」

「さうですとも、拙僧せつそうはスコブツツエン宗しゅうの教祖けうそ大黒主様おほくろぬしさまの片腕かたうでともいふべき豪僧がうそうだ、いつもお金かねが懐ふところに目めを剥むいてゐる。空助もくすけごときは諸國しよこく修業しうげふの遍歴者へんれきしやだから

お金の有あらう筈はずはなし、話はなしに聞きけば、ハルの湖みづうみで高砂丸たかさこまるに乘のり込み、高姫たかひめが暴風しけ雨あめに遇あつて沈没ちんぼつしたので、夫婦ふうふとも眞裸まっぱだかとなり、命いのちからがらスガの港みなとに着ついたくらゐだから、一文半錢いちもんきなかも金かねを持もつてゐる道理だうりがないのだ。あの三百圓さんびやくえんも實じつは怪あやしいものだよ。どこかで何々なになにして來きよつたのかも知しれたものぢやない」

「アア左様さやうでございますか。そんなら如才じよさいはございますまいから鍵かぎをお渡わたし申まをします」

と懐ふところより取とり出だしキューバーに渡わたした。キューバーは機嫌きげんを直なほしながら肩かたを四角しかくにゆすり、北町きたまちの小路こうぢを大股おほまたに跨またげて歸かへり行ゆく。

キユ「ヤア久し振りに俺の巢が出来たワイ、ヤ巢ではない、御本丸が出来たのだ。いよいよ今日から北町城の城主天然坊キューバーの君様だ。かうなると第一に必要なものはお嬢村屋だ、いな女帝様だ。いづれこの神館へはちつとは美しい女も参つて来るだらう、四五日の間に物色して、これぞといふ奴を選び出し、當座の鼻ふさぎに引つ張り込んでおかう、その間に千草姫が何とかならうから」  
などと獨り言をほざきながら、押入れから夜具を引っぱり出し、揚股をうつつて寝てしまった。暫くすると、トントンと表戸を叩いて隣のお三がやつて来た。  
「御免なさいませ、キューバー様はお宅でございませうか」

武士の子は轡の音に目を醒まし  
乞食の子は茶碗の音に目を醒まし  
キューバーは女の聲に目を醒ます  
寝呆けた顔を撫でながら  
響きのいつた濁聲で

「ハイハイハイハイようお出で  
何用あつてござつたか  
御用の赴き聞きませう」と  
寢床を立つて上り口

火鉢ひばちの前にまへ四角しかくばり　　お三さんの顔かほを睨ねつける

お三さんはぎよつとしながらも　　揉手もみでをなして丁寧ていねいに

鈴すずの鳴なるよな聲こゑ出して

「これはこれは當家たうけの主あるじのキューバー様さま　　お寢やすみ中ちゆうを驚おどろかしまして

誠まことに申まをし譯わけございませぬ　　妾わたしは主人しゆじんの言いひつけで

お伺うかがひ申まをしに參まゐりました　　やがて主人しゆじんが見みえますから

何處どこへも往いつては下くださるな」　　言いへばキューバーは禿頭はげあたま

縦たてに揺ゆすぶつて涎よだれくり

「てもまア綺麗きれいな女をんなだな　　俺おれもお前まへの知しる通とほり

今日けふから此所ここの主あるじとはなつたれど　　飯めしたく女をんなもない始末しまつ

お前まへのやうな澁皮しぶかはの　　剥むけた女をんなをいつまでも

宿屋やどやの下女げぢよにしておくは　　可あつたら惜もつたいものよ勿體もつたいない

おほかたお前まへを俺おれの女房にようぼうに　　貰もらうてくれとの掛合かけあひに

久助きうすけさまがエチエチと　　媒なかつど介せうとて來くるのだらう

お前まへも俺おれに添そうたなら

今日けふから此方こゝの奥様おくさまだ

この家屋敷いへやしきもすつかりと

お前まへと俺おれの共有物きょうゆうぶつ

にはかに蠨螋いもりが龍りゅうとなり

天上てんじやうしたよな出世しゅつせぞや

キューバーつかさ司きうせいしゆの救世主きうせいしゆは

お前まへのためには福ふくの神かみ

あまり憎にくうはあるまい」と

曲まがつた口くちから吹ふき立たてる

お三さんは顔かほを赤あかくして

「これこれ申しキューバーさま そんな話はなしぢやありません

深い様子ふかやうすは知らねども

空助もくすけさまが渡わたされた

お金かねがさつぱり夜よるの間に

木この葉はになつてしまつたと

親方おやかたさまの御立腹ごりつぷく

これやかうしてはゐられない

お役人衆やくにんしゆうに訴うったへて

お前まへと空助もくすけ夫婦ふうふをば

縛しばつてもらふかと御相談ごさうだん

妾わたしは聞きくに聞きき兼ねかねて

まうしまうし御主人様ごしゆじんさま

御立腹遊ごりつぷくあそばすは尤もつともなれど

短氣たんきは損氣そんきと申まをします

一ひとまづ隣となりのキューバーさまに

實じつ否びを糺ただした其その上うへで 訴うへなさるが宜よからうと

申まし上あげたら御ご主人しゅじんは 小まへならお前まへに任まかすから

キユーバーが居をるか居をらないか 調しらべて來こいとの御ご命めい令れい

よもや如じよ才さいはありますまいが 贖にせ札さつなどを使つかうたら

お上かみの規き則そくに照てらされて 臭くさいお飯まん食まはにやならむ

それが氣きの毒どくと思おもうた故ゆゑ 主しゅ人じんの銳えい鋒ほう止とめおいて

親しん切せつづくで來きましたよ 言いへばキユーバーは驚おどろいて

「そんな怪け體たいの事ことあるか 正しやう眞しん銘めいの百ひゃく圓えん札さつ

手ての切きれさうな新あたらしい 立りつ派ぱなお金かねぢやなかつたか

昨さく夜やの間あひだに泥どろ棒ぼうが 小まへ前の家うちへ飛とび込こんで

お金かねをすつかりかつ攫さらへ 木この葉はとかへておいたのだらう

そんな馬ば鹿からしい出で來き事ことが 三さん千ぜん世せ界かいにあるものか

何なにはともかく久きう助すけを 連つれて出でて來こいキユーバーが

天てん地ちの道だう理りを説とき聞きかせ 疑うたが念ひ晴はらしてやるほどに

アハハハハハハハハハハわけもない　しやつちもない事言うて来る』

などと嘯き取り合はぬ　お三は止むなく立ち歸り

主人の前に両手つき　キューバーの言葉そのままに

委曲に談れば久助は　しきりに首を振りながら

キューバー館をさして行く　キューバーは又もや揚股を

打つて鼻歌謠ひつつ　冥想に耽るをりもあれ

表戸ガラリと引開けて　血相荒く入り來たる

樽屋の主久助は　御免なさいと慳貪な

言葉の端も荒らかに　庭にすつくと立つたまま

『山子坊主のキューバーさま　お前はよつぽど悪黨だ

空助夫婦と腹合せ　魔法を使つて木の落葉

金と見せかけ甘々と　大事の大事の吾が家を

横領いたした曲者よ　もう了簡はならないほどに

どんな言ひ譯なさるとも　決して耳はかしませぬ



バラモン役所へ訴へて

私が白いかお前等の

腹が黒いかきつぱりと

分けてもらはにやおきませぬ

覺悟を定めてみて下されよ

いま番頭をお役所へ

出頭さしておきました

やがて繩目の恥をかき

町内隈なく籐丸籠に乗せられて

詐欺横領の罪人と

引き廻されて町人の

笑ひの種となつた上

お前の命は風前の

燈火となつて消えるだろ

南無阿彌陀佛阿彌陀佛

頓生菩提惟神

目玉飛び出しましたと

體をぷりぷりゆすりつつ

鬨を蹴たてて歸り行く

後にキューバーは手を組んで

自分の金でもないものを

自分の金だと法螺吹いた

その天罰が報い來て

空助夫婦の罪科の

相伴せなくちやならないか

ほんに思へば口惜しい

昔の聖人の教にも

口は禍ひの門とやら

もうこれからは心得て

決して嘘は言はうまい

とは言ふもののこの證り

どしたらはつきり立つたらう』

などと青息吐息つき

表戸ぴしやりと引きしめて

離棟の館に立籠り

中から錠を卸しおき

長持開けて中に入り

布團被つて慄ひゐる

キューバーの身こそ憐れなり。

(大正一五・七・一 舊五・二二 於天之橋立なかや別館 加藤明子録)

第二章 大會合(一八三〇)

スガの港の百萬長者と聞こえたる藥種問屋の奥の室には、若主人のイルクをは  
じめ老父のアリスにダリヤ姫、ヨリコ姫、花香姫、門番のアル、エスおよびスガ

の宮みやの神司かむつかさたりし玉清たまきよ別わけまでが首くびを鳩あつめて密談みつだんに耽ふけつてゐる。

ヨリコ「アリス様、イルク様、その他みな皆みなさまに、妾わらははお詫わびをいたさねばなりません。せつかく大枚たいまいなお金かねを出だして、立派りっぱなお宮みやを造つくつて頂きいただき、道場だうぢやうの主あるじとまで任まけられまして、身みに餘あまる光榮くわうえいに浴よくしてをりましたが、ツイ妾わらはの慢心まんしんより宗教問答しうけうもんたふど所ところなどと看板かんばんを掲かかげたのが災わざはひの因もととなり、妾わらはを初はじめ玉清別様たまきよわけさま、ダリヤ姫様ひめさま、および御一門ごいちもんに對たいし、非常ひじやうの損害そんがいをおかけ致いたしその罪つみまことに萬死ばんしに値あたひいたします。熟々つらつらんが考かんがへますれば、オーラ山さんに立籠たてこもり泥棒どろぼうの親分おやぶんとまでなつて惡事あくじ惡行あくかうを敢行かんかうしてきた罪深つみふかい體からだ、どうして神様かみさまのお屋敷やしきに勤つとめることが出來ませう。折角せつかくの聖地せいちもウラナイ教けうの高姫たかひめさまに渡わたさねばならないやうな破目はめになりました。これ皆妾みなわらはの至いたらぬ罪つみでございますから、何なにとぞ何なにとぞ思おもふ存分ぞんぶんの御成敗ごせいばいを願ねがひたうござい  
ます」

アリス「ヨリコ姫様、左様さやうなお心遣こころづかひは御無用ごむようにして下さい。三萬さんまんや五萬ごまんの金かねを使つかつてお宮みやを建たてたところで、別べつに私わたくしの宅たくの財産しんしやうが傾かたむくといふわけでもなし、一いつ旦たん、ウラナイ教けうに渡わたした以上いじやうは是非ぜひなしとして、再びふたたび以前いぜんに幾層いくそう倍増ばいぞうした立派りっぱな

御神殿を造り上げ、ウラナイ教の向かふを張つて見せてやらうぢやありませんか。  
なア倅、お前はどう思ふか、老いては子に従へといふ事もあるから、お前の意見に任しておく」

イルク「當家の財産は、もとより罪の固まりで出来たのですから、なにほど立派なお宮を建てても、神様の御用に立たないのは必然の結果です。決して私は惜しいとは思ひませぬ。神様のお許しあれば、當家の財産全部を投げ出して立派なお宮を造りたうございます」

アリス「成程、倅の言ふ通りだ、お前に何も彼も一任しておく。皆さま、倅とトツクリ相談して下さい、私は老年の身、失禮いたしましたして、離棟で休ましてもらひます」

と座敷杖をつきながら、病みあがりの體を引き摺つて離棟をさして出でて行く。  
玉清「私も永年の間神谷村で苦勞艱難をいたし、何とかして三五の道を再興させたいものと千辛萬慮の結果、當家の發起によつて立派な宮が建て上がり、大神様の神司となり、先祖も業をつむ事になつて大變に喜び勇んで奉仕してをりました

が、モウかうなれば、何とも致し方がございませぬ。私はこれより神谷村に立ち  
歸り、もとのごとく里庄をつとめ、村民を安堵させてやりませう』

ダリヤ『モシ、玉清別様、あまりお氣が短いぢやありませんか。どうぞ暫く、何  
とか定るまで待つてみて下さいませ。やがて間もなく、三五教の宣傳使がお出で  
遊ばすでせうから、その上トツクリ御相談遊ばしての上のことに願ひたうござい  
ますす』

玉清『敗軍の將は兵を語らず、然らば少時お言葉に甘へ、逗留さして頂きませう』  
アル『モシ若旦那さま、決して御心配要りませぬよ、キツとあの高姫といふ奴、  
今に尻尾を出しますからマア暫く待つてみて下さい。私とエスとが一生懸命に彼  
奴の素性を探索してゐます。モウここ十日と経たない中に、キツと空助夫婦を叩  
き出して御覽に入れます。キューバーの野郎も臭い代物です。少時成行きに任し  
て見てゐたらどうでせう』

イルク『いかにも、彼奴ア、私も怪しい奴だと思つてゐる、キツと神様が善惡を  
裁いて下さるだらう。大國常立尊様、神素蓋鳴尊様は、あのやうな悪人に聖場を

任まかして、安閑あんかんと見てみてござるやうな、へドロい神様かみさまぢやございますまい』

かく話はなししてゐる所ところへドヤドヤと入り來きたるは三五教あななひけうの宣傳使せんでんし照國別てるくにわけ、照公てるこう、玄げん眞坊しんぼう、コオロ、コブライの五人連ごにんづであつた。

照國てるくに『御免ごめんなさいませ、拙者せつしやは三五教あななひけうの宣傳使せんでんし照國別てるくにわけでございます。梅公うめこうが何時いつやらは、いかいお世話せわに預あづかつたさうでございますが、まだ彼かれは當家たうけへは歸かへつてをりませぬか』

イルク『ハイ、貴方あなたが噂うはさに高たかき照國別てるくにわけの宣傳使せんでんし様さまでございましたか、私わたくしは當家たうけの主あるじ、イルクと申まをします、いい處ところへ來きて下くださいました。サアサアどうか奥おくへお通り下くださいませ』

照公てるこう『拙者せつしやは照國別てるくにわけ様の弟子でし、照公てるこうと申まをします、何分なにぶんよろしく』

玄眞げんしん『拙者せつしやは玄眞坊げんしんぼうと申まをす修驗者しゆげんじやでございます、何分なにぶんよろしくお見知みしりおき下くださいまして以後いご御懇意ごこんいに願ねがひます』

コオ『奴輩やつがれはコオロと申まをす、あまり、善よくもない、悪わるくもない三品野郎さんびんやらうでげす。不思議ふしぎにも照國別てるくにわけ様さま一行いっかうに難船なんせんした處ところを救たすけられお伴ともになつて參まゐりました。どう

か門番にでも使つてやつて下さい」

コブ「奴輩はコブライと申しまして、チツとばかり名の賣れたやうな、賣れぬやうな侠客渡世を致しますものでございます。何分よろしくお願い申します」

イル「ヤア皆様、よくこそお出で下さいました。何はともあれ照國別宣傳使様と共に奥へお通り下さい、チツとばかり當家には心配事が起りまして、相談の最中でございます」

照公「いかなる御心配か知りませぬが、幸ひ先生もみらつしやるし、及ばずながらお力になりませう」

イル「ハイ、有難うございます。何分よろしく」と挨拶し、自ら茶を出し菓子を出し、力かぎりに響應する。

照國「當家は非常な舊家と見えますな、庭石の苔むしたる趣といひ、石燈籠といひ、旅の疲れを慰むるには屈強のお座敷、イヤ、どうも立派なお座敷を汚して済ませぬ」

イル「何を仰有います。見る影もなき破家に駕を枉げられまして、一家一門の光

榮これに過ぎたる事はございませぬ。子孫の代まで言ひ傳へて喜ぶでございませ

う

玉清「私は神谷村の玉清別と申す三五教の信者でございます。照國別様とやら、何卒なにとぞお見知りおかれまして、今後とも、よろしく御指導の程をお願い申します」

照國「ヤアあなたは噂に承つた玉清別様でございますか、これは珍しい處でお目にかかりました。何分よろしくお願ひいたします。時にイルクさま、今ちよつと承れば當家には何か取込事があつて御相談の最中だと聞きましたが、どうかお邪魔になれば席を外しますから」

イル「イヤ、決して御心配には及びませぬ、實のところはスガの宮の件につきまして……」

と一伍一什を詳細に物語つた。

照國別は「ウーン」と言つたきり雙手を組んで少時思案にくれてみたが、何か期するところあるものごとく膝を八タと打ち三つ四つ頷いて、



「ヤ、分りました、どうか私に任して下さい、この解決はキツとつけて上げませう」

イル「何分よろしく、お頼み申します」

ヨリ「照國別の宣傳使様、妾は貴方のお弟子梅公別さまに非常なお世話に預かつたものでございます。此處にをりますのは花香といつて妾の妹でございますが、不思議の縁で梅公別様の妻にして頂く事に内定してあるものでございます。何分よろしくおとりなしをお願い申し上げます」

照國「ヤ、かねて梅公別からヨリコ姫様の事も花香姫様の事も聞いてをります、何事も神様の思召し次第ですからな」

花香「これはこれはお師匠様、初めてお目にかかります。妾はいま姉の申しました通り、梅公別さまに大變な御鼻肩に預かつてある花香でございます。何分よろしく……今後の世話をお願い申し上げます」

かく互ひに挨拶なせるをりしも、梅公別の宣傳使は重たげに大きな葛籠を背負ひ、エチエチ入り來たり、

梅公「ア、御免なさい、梅公別です、大變な御無沙汰をいたしました」

番頭のアルは頭をピヨコピヨコ下げながら、

「ヤア、よう来て下さいました、先生、若旦那様も、大旦那様も大變、先生のお越しをお待ちでございました。これから一寸奥へ申して来ますから」

梅公「イヤ、それには及びませぬ、照國別の宣傳使が見えてゐるでせう。……私の方から伺ひます」

と、大葛籠を玄關にソツと下し、案内もなく屋内さしてニコニコしながら進み入る。

梅公「ヤ、先生はじめ皆さま、御一同、お早うございましたね」

照國「ヤ、今當家へ伺つたところだ、實はお前が、あの暴風雨に小舟を出して浪の上うへに消きえてしまつたものだから、少しばかり心配しんぱいしてゐたのだ。ヤ、無事ぶじで結構こつ々々、花香姫はなかひめも先まづ先まづ御安心ごあんしんだらう」

ヨリ「梅公別の先生様、お久ひさしう御目おめにかかりませぬ、先まづ先まづ御無事ごぶじでお目出めでたうございます。花香はなかも大變たいへんにお待まち申まをした様子やうすでございます、これ花香はなか、早はやく

御挨拶を申さないか」

花香姫は顔を赤らめながら恥づかしさうに手をついて、

「アノ、旦那様、イーエ、梅公別の宣傳使様、お久しうございます、妾、どれほど待つてゐたか知れませぬのよ」

梅公別は無雑作に愛想よく、

「ヤ、奥さま、イヤ奥さまと言つては濟まないが、花香姫さま、先づ先づ御壯健でお目出たう、私だつてヤツパリ花香さまの事ア何時でも忘れてゐやしませぬよ」

花香「ハイ、有難うございます。そのお言葉を聞いて得心いたしました」

照公「オイ、梅公、馬鹿にすない、何かおごつてもらはうかい。俺の前で、おやすくない處を見せつけやがつて、あまりひどいぢやないか、アツハハハ」

ヨリ「梅公別さま、當然ですわね、これ花香さま、何もオチオチすることはありませぬよ。言ひたい事あれば人さまの中でも構はない、ドシドシ言つたがよい、

憚りながら姉さまがついてをりますからな」

照公「ヤ、これは堪らぬ、お面、お小手、お胴、お突とござるワイ。ヤ、かうな

りやいよいよ敗北だ。照公砲臺も沈黙せなくちやなるまい、ウツフフフ

梅公「仇話はさておいて、海上から「ほのか」にスガ山の聖地を見れば怪しい雲

が立つてゐました。何か變つた事はありませぬかな」

イル「ハイ、お察しの通り、その事に就きまして今、相談會を開いてをつたとこ

ろでございます」

梅公「高姫、空助、キューバー等の悪人が聖地を占領せむとしてゐるのでせう」

イル「ハイ、已に占領されてしまつたのです。最早今となつては、手の出しやう

もございませぬので……」

梅公「決して心配なさるな、梅公別がキツと解決をつけませう、悪人輩を一言の

もとに叩き出し、もとの聖地に回復せむは吾が方寸にございます。ヨリコさまも

ダリヤさまも、玉清別さまも安心して下さい、キツともとの通りにしてお目にか

けませう。おほかた、高姫と言ふ奴、ヨリコさまの素性を洗ひ、理窟づくめに放

り出したのでせう」

ヨリ「ハイ、お察しの通りでございます。何分汚れた魂でございますから、聖場

を守るなどといふ大それた事は出来ませぬ。妾の慢心から柄にも合はぬ宮仕へを致しまして聖場を汚し、皆さまに對し申譯がないので、この通り悄れ返つてゐるのでございます」

梅公「昔は昔、今は今、たとへ如何なる悪事があつても、悔い改めた以上は白無垢同然、一點の罪も汚れもあらう筈がありません、左様な御心配は御無用になさいます」

と慰めおき、照國別、イルク、玉清別を別室に招き、高姫追放の計畫に密議をこらし悠然として再びもとの座に歸り來たり、

梅公「大空に塞がる黒雲吹き拂ひ

月日を照らす科戸邊の神

よしやよし醜の黒雲包むとも

科戸邊の神吹きや拂はむ」

これより一同はスガ山回復の策戦計畫の準備に各々手分けをして取りかかり、明日を期して大擧スガ山に神軍を進むる事とした。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一五・七・一 舊五・二二 於天之橋立なかや旅館 北村隆光録)

## 第二章 妖魅歸(一八三一)

スガの宮の神司玉清別を初め、天人のやうな三人の美人が千草の高姫と問答の結果、放逐されたといふ評判が、スガの町をはじめ近在近郷まで電のごとく俄かに擴がつてしまつた。それゆゑスガの神館は押すな押すなの大繁昌、立錐の餘地なきまで參詣者が集まつて來た。宗教問答所の看板は矢張り以前のまゝ掲げられ、唯違つたところはヨリコ姫の名が千草の高姫と書き替へられたばかりである。智仁勇の三徳を備へたとばかり町人の評判になつてゐたヨリコ姫を、説き伏せるやうな千草の高姫は、どんな偉い奴かも知れないといふので、看板はあつても問答

せうといふものは一人もなかつた。妖幻坊は例のごとく離棟の室に固く錠を卸して晝の中は眠つてゐる。

コオロ、コブライの二人は偵察隊として朝未明より入り来たり来たり玄關に立ち塞がり、「頼まう頼まう」と呼ばはれば、悠然として現はれ来たる千草の高姫は、

「玄關に頼むと聲をかけるは

誰が命か聞かまほしさよ」

コオ「吾こそはスガのお宮に詣できて

看板を見て問答せむと思ふ」

コブ「吾とても宗教問答所の看板を

見<sup>み</sup>て腹<sup>はら</sup>が立<sup>た</sup>ち君<sup>きみ</sup>を訪<sup>と</sup>ひけり

高<sup>たか</sup>姫<sup>ひめ</sup> 面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>し睡<sup>ねむ</sup>けさましに汝<sup>なれ</sup>二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>

吾<sup>わ</sup>が言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>に薙<sup>な</sup>ぎふせて見<sup>み</sup>む

コオ 偉<sup>えら</sup>さうに仰<sup>おつしや</sup>有<sup>あ</sup>りますな照<sup>てる</sup>月<sup>つき</sup>に

黒<sup>くろ</sup>雲<sup>くも</sup>かかるとめしこそあれ

コブ 如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>ほどに知<sup>ち</sup>恵<sup>え</sup>さかしたも女<sup>をんな</sup>の身<sup>み</sup>

太<sup>いか</sup>い男<sup>をとこ</sup>に勝<sup>か</sup>ち得<sup>う</sup>べきかは



高姫たかひめ 男をとこてふ衣被ころもかぶりしをんなこけ女  
なにかはあらむいちどき一時こに來よ

コオ 今いま暫しばし待まつてござねよめま眩めまひする  
やうな珍ちんじ事が突發とつぱつするぞや

コブ 何なんなりと吐ほぎいてござね今いま暫しばし  
汝なが斷末魔だんまつま近ちかくありせば

高姫たかひめ 見みる影かげもなき木こわつ葉ばが玄關げんくわんに  
立たちてたはごと吐ほぎくをかしさ

コオ 高姫よ暫く待てよ汝こそは  
見る影もなきやうにしてやる

コブ へらさうに言つても一寸先見えぬ  
曲津の盲哀れなるかな

高姫 朝早く神の館に乗り込んで  
縁起の悪い口を開くなよ

コオ おのが尻つめつて人の痛さをば  
知らぬ愚か者あはれなりけり

コブコ 身みも 魂たまも 痺しびれ 果はて たる 曲津まがつ身みは  
刃やいばに さすも 耐こたへ ざるらむ

高姫たかひめ 譯わけも なき こと を べらべら 吐ほざく より  
便所べんじよの 掃除さうぢなりと せよかし

コオコ スガ山やまの 塵ちり 吹ふき 拂はらふ 大掃除おほさうぢ  
日ひのある 中うちには じめて くれむ

コブコ 神々かみがみが いよいよ 表おもてに 現あらはれて  
狸たぬきの 尻尾しつぽ 露あらは して 見みむ

高姫たかひめ 何なにをいふ狐狸きつねぬきの身魂みたま奴めが

誠まことの神かみの前まへ恐れぬか

コオ 間男まをとこか真まことの神かみが知らねども

どこやら臭くさい糞くその香かぞする

コブ 臭くさいはず千草ちくさの姫ひめと言いふぢやないか

鼻高姫はなたかひめよ鼻はなを折をられな

高姫たかひめ 吾われこそは高天原たかあまはらより下くだりしゆ

名なを高姫たかひめと言いふぞ尊たふとき

コオ 「何ぬかす譯も知らずに偉さうに  
類桁たたく事のをかしさ」

コブ 「この女郎妖幻坊の妖怪に  
現をぬかす馬鹿女かも」

高姫 「やかましい玄關先でつべこべと  
恥を知らぬか木わつ葉武者ども  
神館わけの分らぬ奴が来て  
吾が魂を汚がさむとぞする」

と言ひながらスタスタと踵を返し奥に入る。

コオ『これや女俺をんなおれが怖こはくて逃にげるのか

どこどこまでも追おつて往ゆくぞや』

コブ『面白おもしろいとうと尻尾しつぽをまきやがつた

奥おくの一室ひとまにふるてゐるだろ』

二人ふたりは執念しふねん深くも玄關げんくわんをつかつかと上がり、問答席もんだふせきに入いつて見みると高姫たかひめは怪訝けげん  
な顔かほして問答席もんだふせきに控ひかへゐしが、二人ふたりの姿すがたを見みるより、

『どこまでも禮儀れいぎを知らぬ馬鹿男ばかをとこ

許ゆるしも得えずに奥おくに入いるとは』

コオ 『天地の神の道をば知らずして

圖々しくも聖地に居るとは

魂消たよおつ魂消たよ千草姫

見ると聞くとは大違ひなる

高姫 『何なりと勝手な熱を吹くがよい

分らぬ奴は相手にはせぬ

コオ 『甘い事いうて逃げるか千草姫

どこどこまでも調べにやおかぬ

コブ 『今日の中金毛九尾の正體を  
現はしくれむあら頼もしや』

高姫 『奴ども早く歸れよ神館  
汚せば神の冥罰うけむ』

コオ 『甘いこと言うておどすか千草姫  
尻が呆れる雪隠がをどる』

コブ 『糞婆のくせにお白粉べつたりと  
化けてゐやがる金毛九尾奴』



高姫たかひめ 「貴様きさまらは館やかたを汚けがしに來きたのだろ  
何なんとも言いへぬ臭くさい香かがするら」

コブ 「知しれたこと道場だうじやう破やぶりをおつぱじめ  
尻尾しつぽ出だすまで戦たたかひ止やめぬら」

高姫たかひめ 「是これはまた困こまつた奴やつが來きたものだ  
青大將あをだいしやう奴線めせん香かう立たてよから」

コオ 「蛇くちなはが蛙かはづねらつた時ときのごとく  
吞のんで仕舞しまはにや歸かへりやせないぞら」

コブ 山鳩が豆鐵砲を食つたよな

面してふるふ高姫をかし

高姫 何なりと悪口雑言つくがよい

言靈幸はふ國と知らずに

コオ 言靈の幸はふ國と知ればこそ

悪の言靈打ちやぶるなり

コブ 言靈を打ち出だしつつ高姫の

醜の肝玉うち抜きて見む

高姫たかひめ 『笑わらはせる線香せんかうのやうな腕うでをして  
打うつも打うたぬもあつたものかい』

コオ 『なかなかおれに俺おれは容赦ようしやは線香せんかうの  
煙けぶりとなつて熏くすべてやらう』

コブ 『煙けむたげな顔かほして慄ふるふ千草姫ちぐさひめ  
灸やいとすゑられ汗あせをぶるぶる』

高姫たかひめ 『胡麻ごまの蠅はへ見たみたよな奴やつがやつて來きて  
酒手さかて貰もらはうと息いきまいてゐる』

コオ 『汝こそは逆手使うて聖場を』

奪い取つたる曲者ぞかし』

コブ 『逆さまになつて謝わるところまで』

動きはせぬぞ二人の男は』

高姫 『このやうな譯の分らぬ代物に』

問答するのは嫌になつたり』

コオ 『否應を言はず館につめかけて』

荒肝取らねば歸るものかい』

コブ 『それやさうぢやコオ口お前の言ふ通り  
膏を取つて誡めてやらう』

高姫 『油蟲朝も早から這うて来て  
神の燈明消さむとぞする』

コオ 『お前こそ神の燈明消す奴よ  
暗い心の醜神司』

コブ 『このやうな譯の分らぬ妖婆をば  
相手にせずにもう去のうかい』

高姫たかひめ 『これや奴やつこたうとう往生わうじやうしよつたな

高姫たかひめさまの威勢みせいに怖おぢて

コオ 『もう歸いのと思おもへば又またも貴様きさまから

小言こごといふ故ゆゑまた一戦ひとくさせむ

コブ 『瓢箪へうたんで鯰なまじおさへるやうな奴やつ

いつまで居ゐても果はてしあるまい

高姫たかひめ 『そろそろと奴やつこが弱音よわね吹きかけた

知恵ちゑの袋ふくろの底そこも見みえたり

コオ 何吐かす知恵は幾らもあるけれど  
受取る力汝にない故

コブ 相應の道理によつて馬鹿者には  
馬鹿を言ふより道もなければ

高姫 負け惜しみ強いと言つても程がある  
餓鬼畜生さへ呆れて逃げむ

かく、くだらぬ掛合ひをやつてゐるところへ、大勢の老若男女が捻鉢巻して歌  
を歌ひながら、神前に奉ると稱し山車を曳いて登つて来る。高姫はこの光景を見  
て鼻うごめかし、得意満面の體で表を眺めてみると、一昨日叩き出したヨリコ姫、

玉清別、花香、ダリヤ、アル、エスおよびイルク、その他三五教の宣傳使の一行が、美々しく衣服を着かざり、鬱金の捻鉢巻をしながら、問答所の廣庭へ山車を留め、どやどやと玄關口に上がり、

ヨリコ「これはこれは千草の高姫様、一昨日は妾に取つて終生忘るべからざる結構な御教訓をたまはり、翻然として蓮の花の開くがごとく、天地の道理を悟らしてもらひました。汚れはてたる身でございますがお禮のため、この通り山車に供物まで満載して参りました。花香もダリヤもどうか妾から宜しく申し上げてくれとの事でございます」

高姫は傲然として、

「善哉善哉、改心が何より結構ですよ。お前さまも折角ここまで聖場を造り上げ、おつ放り出されて、さぞ残念でございますが、一旦創のついた體は至粹至純な大神様の御用は出来ませぬから、お氣の毒とは思へども、これも前世の因縁でせう」

ヨリコ「重ね重ねの御教訓有難うございます。ちよつと妙な事をお尋ね申します



が、貴女はこの聖地の神司とおなり遊ばした以上、一點の身に曇りはございません  
まいね」

高姫「お尋ねにも及びますまいよ。この高姫の身に兔の毛で突いたほどでも悪事の  
缺點があつたら、この聖地に安閑と御用をしてゐる事は出来ませぬ。それは天地  
の規則ですからねえ」

「失禮な事を申し上げますが、人間といふものは知らず識らずに罪を犯してゐる  
ものです。もし貴女に缺點を發見した時は、この聖場をお立ち退き遊ばすでせう  
ね」

「神の言葉に二言はありませぬ。どうか妾の素性に缺點があるならお調べ下さい。  
いつでもこの聖場を立ち退きますから」

「そのお言葉を承つて、百萬の味方を得たやうな心地がします。ホホホホ、花香、  
ダリヤさま、玉清別さま、アルさま、エスさまイルクさま、また再びこのお館に  
勤めてもらはねばなりませんまい、オホホホホホ」

とあくまで大膽不敵な態度をして見せる。

照國別はつかつかと高姫の傍に寄り、

「ヤ、高姫さま、暫くお目に掛りませぬ、私は照國別の宣傳使でございます」

高姫「ナニ照國別の宣傳使。ヤアお前はウラル教から脱走して来た、へボ宣傳使の梅彦ぢやないか。マアマアマア、出世したものだナア。腐り縄でも三年すりや役に立つ、乞食の子でも三年すりや三つになる。お前と別れてから最早十三年にもなるだらう。まあ結構々々、これから改心して神妙にお勤めなさい。この高姫が弟子に使つて上げまいものでもない」

梅公「ヤ、千草の高姫さま、トルマン城でお目にかかりました者ですよ」

高姫「ハイ、いかにもお前さまは梅公別とかいふ方だつたな、いつ見ても綺麗なこと、どうかお前さまは何處へも行かずこの神館の役員となつて勤めて下さいな」

「ハイ、思召しは有難うございます、何分よろしうお願い申します。湖上でお目にかかりました貴方の夫、空助さまはどちらにゐられますか、一寸お目にかかりたいものでございます」

「ハイ空助さまは一寸お疲れて、離棟の別館でお寝みになつてゐられます」

「實は貴女の御成功を祝しお祝ひを持つて参りました。この澤山の箱包は空助様へのお土産、この葛籠は高姫さまへの土産ですから、どうぞ受取つて下さい」

「ヤアどうも有難う、マア何と澤山のお土産なこと。随分澤山のお金がかかったでせうなア」

「いやどう致しまして、サア、イルクさま、玉清別さま、この箱包は全部皆の方に手傳つてもらひ、空助さまの別館の前まで運んでおいて下さい。そして合圖をしたら一齊に蓋を開けるのですよ」

「ハイ畏りました」

と、村の若者十數人はイルクが監督の下に別館にエチエチ運んで仕舞つた。梅公別は、高姫の前に葛籠を置き、

「サア、高姫さま、この葛籠を開けてお目にかけてませう、貴女に取つて大變な意味あるものかも知れませぬ」

と、意味ありげに笑ひながらパツと蓋を取れば、太魔の島にて眞裸となし、追剥ぎをなし、蟻の巢に投げ込んだフクエ、岸子の兩人が白装束を着てすつくと立上

がつた。高姫は打ち倒れむばかり驚いたが、さすがは曲者、氣を取り直し、度胸を据ゑ、

「オー、何かと思へば白鷺が一番、妾のためには此上もない贈り物、今晚の酒の肴に料つて頂きませう」

梅公はきつとなり、

「これ高姫殿、お呆けなさるな、この女は太魔の島の銀杏に祈願を籠むるをり、貴女が銀杏姫と名乗り、追剥ぎなさつた事があらうがな、そのみならず計略をもつて二人を蟻の森へ追込み、喰ひ殺させむと計つたでせう。まだその上この梅公までもたばかり、蟻に殺させやうとしたではありませぬか。これでも貴女は身に缺點がないと言はれませうか、サア返答承りませう」

高姫は答ふる言句もなく、忽ち顔色蒼白となり、唇までもふるはせてゐる。

ヨリコ「モシ高姫さま、あなたもやつぱり追剥強盗をなし、謀殺を企らみ、ずるぶん善からぬ事をなさいましたね、サア如何です、これでも貴女は完全無缺の身と仰有いますか」

梅公は合圖の口笛を吹けば、如何はしけむ數十頭の猛犬現はれ出で、ワツウ  
ワツウ　ワツウ　ワツウと百雷の一時に轟くごとき犬の聲、妖幻坊の空助はたま  
りかね、正體を現はし、いづこともなく雲を霞と消え去つてしまつた。高姫は進  
退これ谷まり、白衣をパツと脱ぐや否や、たちまち金毛九尾白面の惡狐と還元し、  
雲を呼び雨を起し、大高山の方を目がけ電のごとく中空を驅けり姿を消してしま  
つた。ああ惟神靈幸倍坐世。

因に言ふ。玉清別は元のごとくスガの宮の神司を勤め、ダリヤ姫は大道場の司  
となり、アル、エスの兩人を掃除番となしおき、ヨリコ姫、花香姫は、照國別一  
行と共に聖地を去つて宣傳の旅に赴くこととなりける。

（大正一五・七・一　舊五・二二　於天之橋立なかや別館　加藤明子録）  
（昭和一〇・六・二五　王仁校正）

世は烏羽玉の闇となり

山河草木ことごとく

言問ひさやぐ世の中を

常磐堅磐の松の世に

治めむためと嚴御魂

天津御神の御言もて

豊葦原の瑞穂國

綾の高天に天降りまし

至善至美なる御教を

蒼生に説き諭し

朝は東夜は西

南船北馬の難を越え

神の稜威も伊都能賣の

天津誠を宣べませど

惡に溺れし世の中は

神の言葉に服はで

力かぎり刃向かひつ

沐雨櫛風の苦業さへ

水泡に歸せむとなせしをり

天津御神は畏くも

嚴の御靈の杖柱

珍の御教を助けむと

瑞の靈を下しまし

瑞穂の國の中心に

高天原を築かせつ

經と緯との機をおり

心も清き紅の

錦の教を垂れたまふ

手段となして畏くも 明治は二十五年より

天津御神の御心を 筆に寫して詳細に

蒼生に教へます 其の神文を一々に

清書せよと命ぜられ 飛び立つばかり勇み立ち

止め度もなしに慢心の 階段えちえち攀ぢ登り

神の見出しに預かりし 吾こそ眞の信仰と

心の黒き黒姫が 神書の心をとりに違へ

瑞の靈の宣り言を 残らず曲と貶しつつ

小北の山に巢ぐひたる ウラナイ教の偽教主

鼻高姫ともろともに 魔我彦誘ひ聖地をば

後に見捨てて出でてゆく いよいよ陰謀七八分

成功なさむとせし時に 瑞の靈は嚴かに

天の岩屋戸押し開き 天地に塞がる叢雲を

伊吹拂ひに拂ひまし 御空は忽ち五色の

祥雲棚びき日月の

清き光に曲神の

頭を忽ち射照らせば

黒姫身魂に巢食ひたる

常世の國の曲神は

汚れし身體ぬけ出だし

力も落ちて身體は

忽ち神の冥罰を

被り百日百夜の

修祓うけて敢なくも

命の親と頼みたる

高山彦を殘しおき

黒白も分かぬ烏羽玉の

暗き黄泉路に旅立ちて

八衢街道の四つ辻に

鼻高姫の精靈と

出會し種々の物語り

天國地獄の問答を

いと諄々とはじめける

其の經緯を瑞靈

或夜の夢に八衢に

精靈出でて聞き取りし

一伍一什の顛末を

ここにあらあら述べ立つる

時は昭和の第二年

新の十月十九日

神に心を筑紫瀉

肥前の國の島原の



南風樓の二階の間

北極星を枕とし

加藤明子に筆とらせ

口解きたる物語

述ぶるも樂し惟神

神のまにまに始めゆく

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ。

天地寂然として黒雲みなぎり、濃霧は四邊を包み、晝なほ暗き夜のごとくにし

て咫尺を辨ぜず、蒸し暑き嫌らしき惡臭を帯びたる空氣身邊を襲ふ。八萬地獄の

草枕、旅に出で立つ黒姫の曲の精靈は、ただ一人小聲に呟きながら、なほ現界に

吾が肉體のあるものと信じ、

黒姫『いよいよ世の終末は近づけり、日月天に輝けども、世道人心紊亂の極に達

し、中空に妖雲起りて、下萬民飢渴に苦しむ。時は今なり時は今なり、妾こそは、

嚴の靈の恩命を拜し、此の暗黒の世をして、光明世界に轉換すべき大責任を雙肩

に擔へり。アア高山彦は、何を苦しみてか躊躇逡巡する、日の出の神の肉の宮、

高姫司は何處にありや。神諭にいふ世の終りの時至らば、至誠至實の神柱三人あ

れば可なりと聞く、その三人とは、龍宮の乙姫殿の肉の宮この黒姫の身魂をはじめ、日の出の神の肉宮とあれます小北山の高姫司、高山彦をおきて外に誠の神柱は世に非じ、アア思へば思へば吾が身魂の責任の重かつ大なる、古今其の比を見ず、東西其の例を聞かず。變性女子の身魂と自稱せる彼贗神柱が末路を見よ、彼が光は螢火にも如かず、彼もし眞の瑞靈なりせば、この世の終末に際し一大火光となりて、せめては地上の低空を飛翔往來し萬民の目を醒ませ、神聖の神國を樹立すべきに非ずや。口先ばかりの瑞靈、その影の薄きこと、冬の夕日に如かず。アア至れり至れり、吾が願望の成就の時期、高姫來たれ、高山彦、吾につづけと呼ばはりながら、木枯荒ぶ茅野原を、神官扇を右手に持ち、左手にコーランを携へて、八衢街道の入口に、かかるをりしも向かふより、脛も現はにいそいと、金剛杖をつきながら、髪ふり亂しだん尻を、ぷりんぷりと右左、振舞ひながらやつて来る。女は言はずと知れた小北山、日の出の神と自稱する高姫司の精靈ぞ。高姫「ママママママ、黒姫さまぢやないかいな。ここはどこぢやと思つてゐますか。生前に日の出の神の言ふことを、半信半疑の態度で聞いてゐたものだから

ら神罰は靦面、お前さまはこれから地獄の旅に向かふのぢやないか。生前には比較的豊満の靈衣もすつかりと剥脱され、形ばかりの三角形の靈衣を額に頂いてゐるスタイルは、まるきり地獄の八丁目を歩いとる亡者ですよ。アアもう今となつては、此の日の出神の生宮もお前さまを助けるわけにはゆきませぬわ、マアマアマア、えらい事になりましたなア」  
と目を丸うし、口を尖らして名乗りかけた。

黒姫「どこの乞食婆がやつて來るのかと思へばお前さまは高姫さまぢやないか、このごろは天地暗澹として四邊暗く、空氣が悪いので、まあまあ氣の毒な、持ち前の病氣が出て發狂しなかつたのだらう。ちつと確りしてもらはぬと龍宮の乙姫の肉宮も困るぢやありませんか。ホホホホ、あのまあ小むつかしいスタイルだと、こんなことを大將軍様にお目にかけたら、千年の戀も一度にさめますぞや」  
「ほつといて下さい、黒姫さま。お前さまは聖地において慢心した結果、日出神の教に背き、神罰を蒙つて百日百夜の修被を受け、笥のやうに骨と皮とになつて、お國替へをなさつたのぢやないか。それでもまだ現界に生きてゐるつもりで

すか。何とまあ慢心した身魂の迷うたのは可憐さうなものだなア。アア底津岩根の大ミロク様、この黒姫さまも一度は龍宮の乙姫の肉の宮まで勤めた神界の殊勳者ですから、如何なる罪がありませうとも、神直日大直日に見直し聞き直し、どうか地獄行きだけはお許し下さいまして、せめては第三天國の入口までなと上げてやつて下さいませ、惟神靈幸はへませ

と兩眼より玉の涙を滴らせながら、天に向かつて合掌する。

黒姫「高姫さま、確りして下さい。決してこの龍宮の乙姫は死んだ覚えはございません。お前さまお前さま餘り慢心が強くて信仰に酔つ拂つたものだから、これほどピチピチしてゐる私を亡者と間違へてゐるのですよ。なるほど百日百夜の修被を受けたのは事實です、しかしまだ死んだ覚えはありません。かう常暗の世の中となつては、世界萬民を助けるために、底津岩根の大ミロク様の神柱、日出神の生宮を兼たお前さまが確りしてもらはなくちゃ、どうしてミロクの世が建設せられませう。お前さまは、あまり大將軍さまに現を抜かし、戀に眼が眩んで千騎一騎の此の場合になつて呆けたのでせう。アア高姫さま、氣の毒な方ぢやなア、伊都能

賣めの大神おほかみさま様、天てんの大おほミロクさま様、三千世界さんぜんせかいの人民じんみんが可憐かはいさうと思召おほしめすなら、どうぞ  
この高姫たかひめさまの狂人きちがひを本心ほんしんに立たち直なほらして下くださいませ、高姫たかひめさまさへ元もとの正氣しやうきに  
お歸かへりなされば私わたしの肉體にくたいはいつ國替くにがへしても構かまひませぬ  
高姫たかひめ「あーあ、仕方しかたのないものぢやな。これほど言いうても黒姫くろひめさまの精靈せいれい殿どのは判わか  
らぬのかいな。エエぢれつたい、惟かむながら神靈たま幸ちはへませ」  
黒姫くろひめ「アア高姫たかひめさまも判わからぬやうになつたものぢやなア、長ながらく聖地せいちを離はなれて小こ  
北山たやまに陣ぢんどり、鰯いわしの昆布卷こぶまきになつてゐるものだから、肝腎かんじんの時ときに、發狂はつきやうしてしま  
つたのだらう。生いきてゐるか、死しんでゐるか、見分みわけのつかぬやうになつては、  
神柱かむばしらも何なにもあつたものぢやない。アア氣きの毒どくだなア」

高山彦たかやまひこ「朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

たとへ大地だいちは沈しづむとも 曲津まがつの神かみは荒すさぶとも

誠まことの心こころにや叶かなはない 小北こぎたの山やまより遙はるばる々と

高姫さまや黒姫が

山川千里を越えながら

幾十回と限りなく

足を運びし熱誠に

つい動かされ老骨を

ひつさげながら神界の

御用の端に仕へむと

妻子を後に振捨てて

浪花の里に流れ入り

花柳の巷も厭ひなく

神のおんため道のため

烏のやうな黒姫を

老後の妻と定めつつ

小北の山に往きかへり

鷹の教と知らずして

日の出神と自稱する

高姫さまの筆先を

一字も残らず讀みつくし

その收穫は五里霧中

荒野を彷徨ふ心地にて

三年四年と過ぎけるが

皇大神の御心に

背きしたためか黒姫は

百日百夜の苦しみを

身に受けながら淋しげに

吾を見捨てて神去りぬ

さは去りながら人間は

神代の昔の因縁を

持ちて生れしものなれば いかにかに汚き黒姫も

吾が女房と諦めつ くだらぬ教を謹みて

聞きあたるこそ嘆てけれ 今日吾妹が昇天の

百日祭になりぬれば 心の手向をなさむとて

靈の鎮まる奥津城に 花供へむと進むなり

黒姫はたして靈あらば 吾に一言今までの

誤解を謝せよ天地の 神の御前に平れ伏して

神に背きし罪業を 悔い改めて根の國や

底の國なる苦しみを よく助かれよ惟神

神は汝と共ならば 必ず地獄の苦を逃れ

天津御國に安々と 神の助けに昇るべし

ああ惟神々々 頓生菩提黒姫よ

後に残りし吾が命 あまり惜しくはなけれども

自殺をなせば天の罪 自然に死して汝が後を

慕したひて行ゆかむ其その日ひまで 身み魂たまを研みがいて天てん國こくの

神かみの御み苑そのに復ふく活くわつし 半はん座ざを分わけてわれ待まてよ

汝なれが昇しよ天てんせし後のちは 一ひと人りくよくよ老おいの身みの

淋さびしさ勝まさる冬ふゆの夜よる 衣ころもは薄うすく齒ははふるひ

足あしもわなわな行ゆき艱なやむ この窮きう状じやうを憐あはれみて

國くに治はる立たちの大おほ御み神かみ 一ひと日ひも早はやく黒くろ姫ひめが

御み後あとを追おはせ給たまへかし ああ惟かむ神な々ながら々ながら

御み靈たまの恩ふ頼ゆを願ねぎまつる

かかく歌うたひながら 高たか山やま彦ひこの精せい靈れいは

枯かれ草くさ茂しげる荒あれ野の原はら 杖つゑを力ちからにとぼとぼと

八やち衢またさして進すすみ來くる 黒くろ姫ひめ見みるより狂きやう喜うきして

黒くろ姫ひめ 〆お前まへは吾わが夫つま高たかさまか 何ど處こにどうしてござつたの

合が點てんのゆかぬ事ことばかり 日ひの出で神かみの生いき宮みやの

高たか姫ひめさまが發はつ狂きやうして 私わたしを亡まう者じやと誤ご解かいする



ひやくまんげん 百萬言を盡せども  
こころ 心の狂うた高姫は

わたし ことば 私のことばは糠に釘  
とうふ 豆腐に鋳應へなく

いかが 如何はせむと思ふをり  
かすかに聞こゆる吾が夫の

こゑ ちから 聲を力に佇めば  
まがふ方なき吾が夫と

し 知りたる時の嬉しさは  
ひやくまんじん 百萬人の味方をば

え 得たるがごとく思ひます  
ひ 日の出神の生宮の

たかひめ 高姫さまよつく聞け  
たかやまひこ 高山彦のハズバンド

あら ここに現はれます上は  
わたし 私が亡者になつてるか

はつきやう あなたが發狂してをるか  
いと明白に分るだろう

とき たす まさかの時の助け舟  
てんだう アア天道は人を殺さない

ありがた 有難し有難し  
わが 吾が夫さまと縋りつく

たかやまひこ 高山彦は仰天し

くろひめまよ 〇これやこれや黒姫迷ふなよ  
まへ このよ 〇前は此世の人でない

ももかももよ 百日百夜の病ひに  
てんめい 天命つきて現界を

後に見捨てて行つた者

誤解するな』とたしなめば

高姫鼻をつんとかみ

いとも急はしき口元で

『高山彦がよい證據

お前は亡者に違ひない

早く神言奏上し

地獄の關門突破して

天國淨土に行くがよい

高山彦に執着を

のこしちやならぬ黒姫さま

左様ならば』と背を向けて

一目散に駆け出せば

骨と皮との瘡腕を

グツと伸ばして黒姫が

鼻高姫の後ろ髪

むんずと捉んで引き戻す

高姫地上に轉倒し

『アアいやらしやいやらしや

亡者になつても此の通り

執着心の深い婆々

地獄に落つるは當然

日の出神は知りませぬ

これから高山彦さまに

とつつき散々愚知こぼし

なんなら冥途の道づれに

伴れて行かんせ左様なら』

悪垂口を叩きつつ

また逃げだすを黒姫は

頭に角を立てながら

線香のやうな手を出して

襟髪グツと引き戻す

高姫ふたたび地の上に

轉倒したるその刹那

姿は煙と消えにけり

高山彦はゾツとして

身慄ひしながら逃げ出せば

またもや黒姫後を追ひ

悪性男のハズバンド

この黒姫の黒い目を

ぬすんで日出の生宮と

甘い約束したのだらう

許しはせない」と言ひながら

氷のごとき冷やかな

拳を固めて打ちおろす

全身汗にしたりつつ

高山彦は手を合せ

「黒姫暫く待つてくれ

三千世界にお前より

外に増す花持たぬぞや

さはさりながら果敢なくも

散り行く花は是非もなし

汝が後をばおはむかと

天地の神に願ひても 業因未だ盡きざるか

死ぬにも死なれぬ身の苦衷 察してくれよ黒姫』と

両眼涙をたたへつつ ことわけすれど黒姫は

白髪頭を横にふり 皺涸れ聲を張りあげて

『悪性男のハズバンド 黒姫愛想が盡きたぞや

鼻高姫の後を追つて 尻の世話でもするがよい

煩さい親爺』と言ひながら 悋氣の角をふりたてて

夜叉のごとくに驅け出だす かかるをりしも天空に

天津祝詞の聲聞こえ 梅の花片ちらちらと

四邊におちて香ばしく いと爽かな音楽に

つれて紫雲をわけながら 氣高きエンゼル悠々と

下り来るよと見る中に 黒姫姿は後もなく

煙と消えて室内に 眼くばれば高姫が

黒姫靈璽の前に座し 片言交りの祝詞をば

奏上そうじやうしながら涙なみだぐみ　　ぶつぶつ小言こごとを言いひみたり  
高山彦たかやまひこは夢ゆめさめて　　ホツと一息ひといきつきながら  
鼻高姫はなたかひめの親切しんせつを　　心こころの底そこより感謝かんしゃしつ  
庭にはに出いづれば大空おほぞらに　　皎々かうかう輝かがやく望もちの月つき  
心こころも廣ひろく伏ふし拜をがみ　　感謝かんしゃの祝詞のりとを奏上そうじやうし  
小北こぎたの山やまへと進すすみ行ゆく　　ああ惟かむながらかむながら神々々  
御靈みたまの恩ふ頼ゆぞ畏かしこけれ。

（昭和二・一〇・一九　長崎縣島原町南風樓にて　加藤明子録）

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

靈界物語　第七二卷　山河草木　亥の卷

終り